550
176

550
176

550-176
1200501508229

35.11.16

日本古典全集刊行會板

日本古典全集

西鶴全集

第九　一目玉鉾
　　西鶴置土産

編纂
校訂　正宗敦夫

内閣文庫
昭和

550-176

西鶴全集第九解題

一目玉鉾解題

「一目玉鉾」は名所記で有つて、西鶴としては珍らしい著述で有る。宗祇の名所方角鈔のやうな本で有る。先づ日の出の濱として日本國の事を載せ、其より夷が千島から壹岐、對馬に及んで居る。西鶴の著述たるを疑ふ人も有りとか。しかし私は西鶴の著述で有ると信ずる。其處々の記述、ほんの一寸した短い書き捨てたやうな處にも西鶴の筆たる事は十分うかゞはれる。又テニヲハの用法にも西鶴の慣用たるが目立つ。とにかく西鶴著述として間違ひは無い。浮世草子の作者にふさはしい觀察を短文で書いて案外に面白い。普通の名所記のやゝもすれば無味乾燥になり勝ちなるを、本書の然らざるはさすがに西鶴で有る。

さて西鶴の著述として不似合にも名所名所の歌が隨分掲げて有る。昔から名所は歌枕と云つたやうなわけで、名所と和歌とは離れぬもので有つたから西鶴も世間並にやつたと見える。西鶴がうろ覺えの名所の歌を調べて書くのは面倒なと思つたと見えて、大分誤脱も有るやうで有る。宗祇なぞは面倒でも一々名所の歌の出典を明記したが、西鶴は浮世草子の作者ほど有つて出鱈目で有る。其の處の歌でも無いのを名が同じければ其處へ引いて來ると云ふやうな亂暴を平氣でやつて居る。出典を掲げるのは骨が折れるから一つも掲げて無い。處で此歌の内に西鶴の作歌が有るで有らうかと云ふ事は問題で有る。大方は古歌で有らうが出典不

明の歌も大分有るらしいから考へると、少し俳諧がゝつた調子の調はぬ歌が有る。其内には記臆の誤から來た不調の歌も有るかも知れぬが、或は彼西鶴の作も少しは有るかも知れぬ。有つた處で問題になるやうな作品は有りはせぬ。此の書の面白いのは其の記述にありと見るべきである。殊に誤脱の多い本で、にはかごしらへのやうな氣がする。長崎から諸外國の里數を誰かに一寸位聞いたのかは知らぬがよい加減な里數を列記した處なぞ西鶴得意の處で、人を馬鹿にしたやうな事を眞面目くさつて云つて居る處も面白い。

西鶴は江戸へは行つた事が有るので有らうか、東海道は大體に於て見聞によつた物で有るらしい。關西、九州方面は大體海路によつた形に成つて居るが何處まで彼自身が知つて居たか。案外記述が荒いから大阪近邊から餘り離れなかつたかも知れぬ。

本の形は水谷氏云く。

一目玉鉾　大本四册

板行　元祿二年巳正月吉日　（江戸日本橋青物町萬屋清兵衞　大坂心齋橋筋順慶町柏原清右衞門）

挿繪　筆者未詳

製本　竪八寸八分　横六寸三分

本文　枠　竪七寸六分　横五寸三分

行數　十五乃至十六行

此書、本文以下奥附の年月書肆の名まで西鶴の自筆であるが、序文だけは別人である。……紙面を上下二段に劃して上は本文、下は圖畫となつて居る。……本書再版の奥附に享保三戊戌年五月吉祥日、江戸日本橋南二丁目小河彦九郎、京寺町松原上ル丁菊屋七郎兵衞、大坂心齋橋筋順慶町柏屋清右衞門とあるものがある。又「西鶴回國道之記」と外題替をしたものもあると聞いてをるが未見。

と有る。此の書は奥書が樣々に變つて居るのを見ると版が轉々したもので有らう。水谷氏の初版を萬屋と柏原と云はれしが相違なくば、其次は雁金屋庄左衞門板か又は定榮堂本で有らう。本全集に收むるに當り、原本は大阪圖書館藏本に據つた。其本の奥書は　大坂高麗橋心齋橋筋南入町　雁金屋庄左衞門板と有つて板行月日は元祿二年で有る。又此書が目ざまし草に揭げられた事が有る。其奥書は、大坂心齋橋南四丁目　書林定榮堂　吉文字屋市兵衞藏版と有る。何れが先か不明で有る。目ざまし草に揭げし分には編者が古歌の出典を調べて少々は書き附けて有る。しかし全部では無いやうで有る。

雁金屋出版の本卽ち今原本に用ゐた本には錯簡が有る。「柳が浦の清經の最後の所」として「見渡せば柳が浦の」云々の歌ありて、竹島村、干珠島云々となつて三池。此所の名物賀留多の次が赤阪、長島云々となつて居る。しかし是れは誤で有ると思はれる。地理に合はぬ。此錯簡は大坂圖書館本のみの錯簡かも知れぬ。とも角も今は目さまし草に據つて訂正して置いた。

引歌に誤脱が有るが其内にはわざと變へたのかも知れぬ。凡て今は本の通りにして置いた。脱と見ゆる處のみ二三しるしをして書入て置いた。地名なぞの處は假字遣も原本通りにして置いた。其當時の讀み方を知るたよりにも成るかと思つたからで有る。又文字も此書は改めずに原本に從つて、送りなぞも加へなかつた。斯かる書は別に讀みよくする必要も無いと考へたから凡て原本に隨つたのである。

原本校合上については大坂圖書館の厚意を深謝する。

西鶴置土産解題

「西鶴置土産」は前卷に收めた「織留」と同じく西鶴歿後の出版の内の一つで有る。例の水谷氏云はく、

西鶴置土産　大本五册

版行　元祿癸酉載冬月吉日〔○水谷氏は酉癸と誤植す〕

揮繪　蒔繪師源三郎

製本　竪八寸五分　横五寸九分

本文　枠　竪六寸一分　横四寸八分

行數　十一行乃至十二行

此書は西鶴の遺稿を歿後二ヶ月に發行したもので、卷頭には西鶴の畫像並に辭世の句、如貞、言水、才麿、團水等追善の句が載せてある。跋文によると西鶴病中の作で、三の卷の首より四の卷七枚目の終りまでに亘り、西鶴の自筆を版下に用ひた事がわかる。以て西鶴自筆刻本を鑑別するの標準とすべきである。しかし病中の事であるから、「諸國はなし」等に比べると筆力が劣つてをる。

一本跋文と奥附を削り、五の卷の終りに、「京五條通升屋、青山爲兵衛板行」とあるものがある。無論後摺である。

是れで本の事は明瞭で有る。今校合に用ゐた本は大阪圖書館の藏本で初摺本の方で有る。初摺本の奥書は卷末に原本通り揭げて置いたから此處には云はぬ。此書に卷五の處にどうした事か、一字下げの樣に成つて居る所が處々有る。版木の繼ぎ樣であんな事が出來たのかとも思ふが何樣不思議な事で有るから、取り敢へず其處は一字下げに組むで置いた。別に必要の無い事では有らうと思ふが若し何かの參考になる事が無いとも云へぬので斯く愚かげな事をして置いた。藤井博士は本書に就いて

傾城買の行末はかうなるものと、知るも知らぬも落ちぶれ果てし昔大盡の身の上話、とり〴〵にをかしきが、間々文脈の混亂せし所見ゆるは、門人團水等の補綴せしにや、四卷第一章の末に「三の卷より是迄四鶴正筆也」とことわれり。……馬琴の燕石襍志に西鶴「彼岸櫻」（元祿六年江戸板）といへるは、蓋し此置土産を求板改題せしものなるべし。

と云はれた。藤井博士の見られた本は「青山爲兵衛板行」の本で有る。其再版の後に版が賣られたので有ら

うか。本全集第一卷の解題に於て與謝野寛先生は「置土産」と「彼岸櫻」とを別々に掲げて居られる。藤井博士は同一の書の改題ならんと云はれた。私はまだ「彼岸櫻」と云ふ本を見る事を得ぬから何れの說に贊成して好いかを知らぬ。朝倉無聲氏の小說年表には「彼岸櫻」を載せて無い。又「置土産」の條に其改題せる本の有る事も云つてない。二三の友人の說は藤井博士の說に贊成するやうであるが、誰も確かな事を云はぬ。しかし藤井博士の說にも一つうたがはしい事が有るのは馬琴元祿六年江戸板と有る。此「置土産」の原板が元祿六年冬の出版で有る、其が直ちに江戸へ行つて改題出版せられたと云ふ事に不思議が有る上に、博士の見られた京都靑山版の後摺は江戸から版を持ちかへりて又原名に直して出版した事にせねばならぬ。此處に私は疑を挿まざるを得ぬ。暫く「彼岸櫻」を見るまでは事を決めぬ方がよからう。

置土産はやはり好色本の系統に近い本で有つて、唯だの雜話集では無い。先づ織留中の「世の人心」に書かれたと同じやうな處が書かれてある。好色生活の打留め、其處には必然例の金の問題も出て來るわけで有つて、色と金、而して其果ての行き着く處まで行つた處。其れでも生きて行かねばならぬ世の中がよく書かれて有つて、西鶴傑作の一つで有る。五卷の方は或は團水の補綴が多いのでは有るまいか。私の兄、白鳥の書いた西鶴論中に置土産を評した處を附載して置く。

正宗白鳥

私は作者が縱橫に才筆を揮つた所謂「轉業書」である「好色本」を棄て、絢爛の極平淡に達した晩年の名著「置土産」を讀むに及んで、この作者に對して、はじめて帽を脫がうとする氣持がした。

西鶴が「一代男」を出してから、遺稿の「置土産」が門人によつて公にされるまで、僅か十年ほどの歲月が經過してゐるだけである。彼れはその間に、好色本の外に、「武道傳來記」や「武家義理物語」のやうな武家物を書き、「懷硯」や「新可笑記」のやうな隨筆雜話集をも著はし、「日本永代藏」や「世間胸算用」のやうな町人物をも出してゐる。かういふ風に內容に變化のある作品を著した文豪は、後世の文學研究者批評家に取つては、甚だ都合のいゝ研究題目となるのである。馬琴のやうな作家では、二十年前の作品でも三十年後の作品でも、作風にさしたる變化がないので、馬琴論を草する評家は、自家の批評眼を發揮するのに不便である。近松でもさうだ。彼れの人生觀の變化とか思想の一轉機とか、區分けして、評家の意見を立てるのに不便である。

その點で、外國の舊い作家のうちでは、シエークスピアなどは、最も評論家の據つて立つに便利な作家なのである、處女作から最後の「あらし」まで、順序を立てゝ、作者の心的狀態を跡づけやうとすればなし得られるやうに出來てゐる。……しかし作家——殊に昔の作家——が一から二といふやうに、創作上の階段を經て、僅か三年か五年の間に、人生觀の變化や、思想の轉換を試みつゝ進むものであらうか。私は疑つてゐ

る。ブランデスの巧妙なる沙翁論に、私は無條件に贊同するのを躊躇してゐる。

そのブランデスの沙翁論には、沙翁の厭世調が一作ごとに濃厚になつて、「リア王」に至つて、つひにどん詰りに達したと說いてゐる。近代歐洲の批評家の巨頭である彼れブランデスは、犀を燃して、古今を絕した戲曲とされてゐる「リア王」を研鑽して“World Catastrophe”の悲劇だと大袈裟に斷定を下してゐる。「リア王」が果して世界終局の悲劇であつて、人生のどん詰りがそこに現はれてゐるか否かは兎に角彼れの口吻を借りてわが西鶴を批評すると、「置土產」に至つて、色慾生活のどん詰り、すなはち、人生のどん詰りに達したのである。「置土產」は西鶴の世界に於ては、やはり“World Catastrophe”の淋しい物語なのである。一つは金ピカの時代物であり、一つは袢纏着の世話物であるといふ外形的相違はあるにしても、どん詰りの氣持は同じ譯である。そして、沙翁は、このどん詰りの心境から歩を轉じて、最終の「あらし」に於ける如き、寬仁大度の境地に心を安んじるやうになつたのだが、西鶴は、「置土產」に於て、どん詰りそのまゝで、そのどん詰りのうちに自から安立してゐる心境を見せてゐる。私が帽を脫がうとするのは、作者のこの態度である。

「人には棒振蟲同前に思はれ」の一篇を、私は昔から好んでゐる。淋しいながら澄返つた境地が思浮べられる。「置土產」中の絕章である。「大名の若子樣のお慰みに」買はれて行くやうな高價な金魚を飼つてゐる金魚屋、その金魚の餌になる棒振蟲を、一日がゝりで取集めて賣りに行つて、錢二十五文に賣つて、「明日また持つて參るべし」と、下男どもにお世辭を云つて歸る男。その男が昔は贅を盡した大臣の某であつたことを見つけた昔友達。昔友達の同情を斥けて、「女郎買の行末かくなれる習ひなれば、さのみ恥しきことにもあらず、いかなゝおのゝの御合力は受けまじ」と云つて、これきりの二十五文を惜氣もなく投出して、舊友に一盃の茶碗酒を振舞ふその男。「蘆垣に秋を過ぎたる朝顏の、末葉もかれ〴〵になりける蔓を搜して、その實を一つ一つ取つて、又來年の詠めを慕つてゐる」露の命の人の世を知らぬ顏なる七十あまりの婆さん。「窓より親の面影を見て、父樣の錢持つてもどらしやつた」と叫ぶ子供。同道して來た昔友達の一人を目賢く見つけて、「お三人の中にも伊豆屋利兵衞さまこれへ入らせ給ふまじ」と、勤めの身であつた昔只一度假なる枕物語をした男には會ふまいとした女房。かういふ人々の面目が、短かい一章の間に、簡潔に暗示的に描かれてゐる。私は、在學時代に島村抱月氏主宰の下に催された文學合評會に加はつてゐたことがあつたが、その時「西鶴」が課題になつたので、問題が六ケしくつて批評の言葉に窮して、「隻幅の中に萬丈の波瀾を藏す」と云つたやうな妙な評語を用ひて誤魔化したことを、今思出した。「置土產」のこの一篇には、しかし、その幼稚な評語が當らないことはない。

かの昔友達は、舊知の零落を憐んで、一口いくらの救助金を出合つて、かの家へ持たせ遣はしたが、はやかの男は在鄕へ立退いて、家は空家となつてゐた。「色々穿鑿すれど、其行方知れず」三人の昔友達はこれを歎き、「おもへば女郎狂ひもまよひの種」と云合せてやめた。「世は定めなし。異なことがさはりとなりて

其頃の薄雲、若山、一學三人の女郎の大分損といひ終りぬ」（をはり）

「人には棒振蟲同前に思はれ」と云ふのは、西鶴自身が、人間をさう思つてゐたのかも知れない。この棒振蟲賣りが、「明日また持つてまゐるべし」と云ふのは、彼れが明日の日に大した希望を寄せてゐないことが知られる。それでも、彼れは、「さのみ恥しきことにもあらず」と云つて、陋巷の窮生活に安んじてゐるところがある。そして、友達の憐憫をうるさがつて山野に身を隱したのが面白い。

西鶴は、色慾世界のはじめから終りまでを見盡したのであつた。そして、人生はかういふものと見定めて、そこに安んじて、無用な焦慮煩悶反抗激怒を心に起してゐない。陋巷に道を守る古聖賢の如く、あるひは芭蕉の如く、悟道の域に達したと云つてもいゝだらう。

「あたご颪の袖さむし」の一篇もなか〳〵味ひが深い。昔全盛を極めた大臣が、零落して世を隱れた貧しい生活を立ててゐながら、ある日愛宕參詣を思立ちて出掛けた途中、ふとした出來心から、吝な遊びを企て、「物まゐりの精進をうち破りて、木綿寢具にわびながら、太夫に逢ふ心地して、又下向にもたはぶれ、御初穗の殘りをありぎりに取らせ、山崎よりの舟賃なくて、ひろひ草鞋の步行路。中食無しに歸りつた。

「棒振蟲」の友達は、舊友の末路を見て、世の無常を感じて、女郎狂ひを思留まり、「あたご颪」の隱居は、神詣での途中、遊女屋の壁のこぼれから內を覗いたり、場末の宿が色町めいてゐるのを感じたりしたのが緣となつて、昔の夢を追ふやうになつた。「これほど懲りた身でもやまぬものは好色」と、隱居はわれとわが身を笑つてゐるらしいが、作者も、この「棒振蟲」の隱居に對して微笑をおくつてゐる。

西鶴は、春本見たいな浮世草紙を書いて賣出さうと企てゝ以來、人間を色慾によつて蠢動してゐる「棒振蟲」みたいに觀じて人生を寫して來た。色戀の世相がさま〴〵に描かれてゐても、眞に美しく可憐な詩となつてゐる戀物語は、「八百屋物語」一篇だけだと云つていゝ。女や戀を詩化し美化して、「永遠の女性」といつたやうなものを求めてゐる「神曲」や「ファウスト」に比べて、わが古典の「一代男」や「一代女」は、一見甚だ見窄らしく見えるのである。迷妄を脫して見たら、つまりは人生の眞相は西鶴の見たとほりなのであらうと、私は思ひながらなほ飽足らない思ひのされるのを如何ともし難い。

それで、私は、この「わけ知りの聖」に、東西文人中の一尊者として帽を脫しながら、その後に追隨する氣にはなれない。……森鷗外はかつて、「妄想」？と題した感想文のうちに、自分は人生の途上、いろ〳〵な傑れた文人や哲人に出會ふと、立留つて脫帽して敬意を表することはあるが、後から隨いて行かうとは思はないと云つてゐた。私も同感である。（西鶴論ノ一節）

西鶴全集第九目次

一目玉鉾　西鶴置土産　一四七　三

月年雲八平治乃末の山風を
海八今の所乃
廣く
十廻の松孫ゝ寿ゝ
抑成勢ハ四百五年小弦国ハ慌と
それゝ行基と桂尼と築の末ハ
世ハ民まて玄ハ車洲ゝ奇ゝて東孫乃
名ハ赤蟬孫と改め表ゝ多ハ千鶴の見
見ゝ人ゝ多ハ百年ゝ思ハ拾ハ百と

久かたの日本、雲は平治る江東の山、風は穏なり關西の海、今君が代の道すぢ廣く十廻の松條に音なく、千聲丹鳥の舞謳歌、抑成務天皇五年に諸國の境をわかち、それより行基はしを掛堤を築給ひ、末の世の民まで土の車の引歌にして、東路の名所舊跡を改め、夷が千島の干鮭の目も見ぬ事は人にかたるべき種なし、忍ぶ摺の石を燧筥には入れがたし、松島鹽竈の煙に蓑菅は眠の覺めもの、白川夜ふねと聞きしに、山に有關を越へて武藏のの月の赤いも、富士の雪のおもしろいも、眺めてこそ、三保崎の鴈も、田子の浦の鰹魚も、喰ねばしれぬ、泊々宇津の山邊の葛かづらは尋ぬずして、十團子を都への傳もがなと思ふも、替る世の中の人心、赤坂に遊女あり、岡崎に長橋有、鈴鹿の鬼も偽りの時雨に近江菅笠、是やこの相坂山の戻り馬も、暮て伏見の川舟、難波の梅の匂ひ風に舟路の浦々嶌々、鳴門の浪風ゆたかに日の出の濱より西泊の海迄、長旅の枕詞に一目玉鉾と名付、見えわたりたる道しるべぞかし、

維時元祿二年己巳正月吉辰　　難波俳林

松壽

鶴

水のつくし
らんこーまち
ひろしまこまち

東の沖浪しづかに、毎朝くれなゐの影ゆたかに、久かた日の本麁也。

○日の出の濱

我國は天照神の末なれば日の本とも云にぞ有ける

天津空替らず照らす日の本の國靜なる御代そかしこき

○夷千島

こさ吹て曇りもやせん陸奥の夷には見えじ秋のよ　月

此島長さ百三十里、横十五里、是より北高麗へ十八里、あり〳〵見べし。夷の大將を遮牟紗院といへり、妻を女軟腰といふなり。

○蠟孤島

島山里〳〵つゞきて廣し、夷より此所へ海上百里有といへり、荒浪にしてわたり難儀也。

○常盤島

是は夷より五十里、島崎の切戸見えわたりて、毎年　月十五日より、初鴈の渡りくる島國是也。

白雲に翅しほれし鴈金のおりゐる磯も浪や隙なき

是につゞきて、岩あらく渡海なりがたし、寒中は氷の橋かゝれり。

○氷浮橋

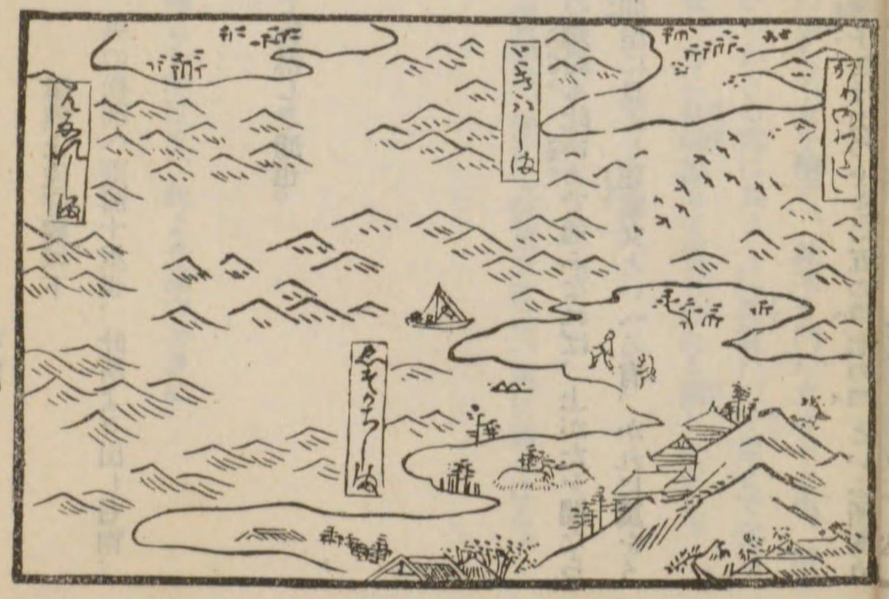
島濱みな〳〵獵師の住家、竹の柱笹葺にして、形も人倫はなれしもの也。

○離小島

千島の美景、諸木諸鳥の毛色、入江の曝岩、玉敷磯の氣色、かゝる所を都の人の見殘して古歌さへ稀也。海邊に臼善光寺とて一堂有、本尊は信孚と同體也。突臼臺座にして有ける。

○松前　松前志摩守殿城下

上の國餌指といへる大所有、此島より出る名物、蠟孤の皮、熊の皮、豹鹿膚、あざらし、鷹、おっとせい、鹿、三好こがね、とゞ、鯡、干鮭、昆布、鶴、白鳥、鴈、諸國の商賣人爰に渡り、萬上方のごとく繁昌の大湊也、浦々の末々は昆布にて葺し軒端の人家も見えわたりぬ、是より島國へは番所ありて人の通ひ絶たり。



津輕土佐守殿城下

○津輕

岩城山とて高山有、是につゞきて比賀崎といふ大難、夷の松前へ荒海十里也、此所より出し名物、うとふ、やすかた、がつほう、鷹。

○外の濱

此所今に殺生人獵師の世をわたる業とて幽に住あれて物淋しき浦也。

紅の泪の雨にぬれし迚簑を着て取うたふやすかた

陸奥の外　濱なるうとふ鳥子はやすかたの音をのみぞ鳴

子を思ふ泪の雨のみの〻上にかゝるもつらしやすかたの鳥

○青森

此浦は舟着にて、津輕松前の荷物是より積也、諸國の廻船も此湊まで通ふなれば、上がたゞ聞ならひ、言葉やさしく女の姿も當世にちかし、難波津の問屋に見えし蓮葉女といへる有、かれに萬をうつすなり。

○野内

○安佐虫

此所に溫泉有、諸病によしといへり。小湊里ならひに濱子なほ山つゞきに五の戸七の戸といふ所ありて

○鍾塚

世に語り傳へしにしき木の里爰なり、いにしへ此里の美なる女を戀て、此木を門に立けると也、所のならはしにて、なびけば取入かたらひをなし、思ひつかざる男は其まゝに捨置れ、千束まで立つくし、戀死せしを、塚に埋み、名計殘れり。此里の女、今に絹機織りて世をわたる業となせり。

○狩場澤

○鼈

此所まで津輕土佐守殿領内也、うしろに松山高うして番所有、爰にて往來を改め、奥に通しける。

○述路

是より南部の領分なり。

○狹の里

陸奥のけふの細布程せばみ胸のあいかたき戀もする哉

卯花の咲る垣ねは乙女子が誰爲めさらすけふの細布

此里にせばき細布を織出せし也。又無名抄に鳥の毛織ともかけり、此より里つゞきに

○喜多井　○三の戸　○福岡　○子津那木　○野間久

○奈部　○枯杉

南部山城守殿城下

○盛岡

此所に奥の富士とて駿河なる山の形にかはる事なし。

○磐提山

むかしは關所也、岡つゞきに里あり、今も木深き森見えわたりぬ。

口なしの一入染のうす紅葉いはての山はさぞ時雨らん

思へどもいはての山に年をへて朽や果なん谷の埋木

○固山

此宿東路には人の情もふかし、旅人をとまれと、小手まねきの女姿もさのみいやしからず、髪も兵庫まげに物かたく、白粉は雪の曙をあざむき、口紅は夕日に移りて、さりとてはをかし、後ろ帶見よき所がらの風俗、是も一慰とて、かり枕おもしろし。

○花牧

爰も旅人のために遊女を定め置ぬ、其役目とて三味線引て、小歌も所からにはよしや、此右の方の廣野にむかし駒有。

○大治牧

陸奥の大治の駒も野かふには荒こそまされなつく物かは

○鬼柳

此所も番所有。

○人首

○阿以左里

是より松平陸奥守殿領分也、

○金崎　○水澤　○前澤　○歌無鳴　○澤邊　○荒家

○古川　○大崎浪　○三本木

いづれも海邊の里つゞき風景也。

○喜多賀美川

○逆柴山　○一の關　○高舘城

文治五年源義經合戰の場なり。

○光堂

此久藏寺は秀衡建立の靈屋也、七寶莊嚴の卷柱にしてひかりわたれり、此所今に櫻の谷也。

寺領千石

○櫻谷　○衣川

此川の中の瀨といふに、辨慶最後の跡。

きのふたちけふきて見れば衣川すその綻さけのぼるらん

○衣の關

櫻色に四方の春風落てけり衣の關の春の明ぼの

諸共にたたまし物を陸奥の衣の關を餘所に聞哉

○平和泉

泉三郎忠衡城の跡有。

○蟻賀邊　○宮野　○月立　○吉岡

○七つ森

松の梢むら立、同じ山の形七つありしに此名を付し。

○高木

是より松島につゞき、島浦の風景、何國はあれど、爰の詠めにあかぬ所也。

○小野　○磯崎　○蛇崎　○富の山

○小黑崎

をくろ崎三つの小島の人ならば都のつとにいざといはまし

○美豆小島

人ならぬ岩木も更にかなしきはみつの小島の秋の夕ぐれ

○月見崎

浪間の月、同じ影ながら、爰は殊更に、

○五大堂

此島に名水湧出る井有。

○瑞岩園

福禪寺は開山法心和尙

右に天麟院、圓通院、左に陽德院、正宗忠宗兩國主の御影有。

○松島

松島や汐汲蜑の秋の袖月は物思ふならひのみかは

立歸り又もきて見ん松島やをしまの笘や浪にあらすな

○竹の浦

此小島に座禪堂有、道橋浪靜なり、民部卿忠教朝臣、藤浪かゝる松島の橋と讀れしも爰也。

○長老坂

爰に西行戻の松有、月見の借屋とて美景也、

○高清水　○磯二子島　○沖二子島　○朝日山
○福浦　○燦嶌　○沖の井
○金花山

皇の御代榮んと東なる陸奥山にこかね花咲
此島山の磯邊に砂金有、金子とてなまこの名物出ける。
○長濱　○浮浪

○奥の海

尋ね見るつらき心の奥の海よ汐干　方にいふかひもなし
たつねても他し心の奥の海の荒き磯邊は寄舟もなし
○赤沼　○輕島　○翁島　○毘沙門島　○鎧島　○洲ケ崎　○屏風島
○鬘島　○甲島　○橋掛島　○肘が崎　○遠名の野島
○雄島

心あるをしまの蜑の袂かな月やどれとは濡ぬ物から
秋の夜の月や〔○原本脱〕をしまの天の原明がたちかき沖の釣ふね
○釜の口　○青海原　○蛇島　○千賀浦　○鹽竈

此六社明神は一條院の御時中將藤原の實方奥劦に流人となり、和歌名所を集め、歌枕と名付、阿古野松をたづね給ひし古歌に、

陸奥のあこやの松に木隱て出べき月の出もやらぬか

此松今は出羽の國に有と翁のをしへ給へり、是鹽竈の明しん也。

秋霧の籬の島のへだてゆゑそことも見えぬちがの鹽がま

同じくは越や見まし白川の關のあなたの鹽がまのうら

此所にさし渡壹丈の大釜四つ有。
○鐘掛島　○大澤　○裸島　○鴈金山　○富島　○高垣
○都島

沖のゐて身を燒よりも悲しきは都島への別れなりけり

別路は身をやく沖の數そへて都島べにとぶ螢哉

○末の松山　○中の松山　○元の松山

此山の尾崎沖につゞきてかけ浪越かと見しに、岩に玉ちる景色替らず。

浦近く降くる雪は白浪の末の松山越かとぞ見る

春の行すゑの松山吹風に霞まぬ浪も花やちるらん

○沖の石

我袖は汐干に見ゆる沖の石の人社しらね乾くまもなし

○離島

明暮はまがきが島を詠めつゝ淋しく〔○都戀しき〕音をのみぞ鳴

いさり舟笹が島の篝火に色見えまがふ當夏の花

○十符里

陸奥の十符菅簡七ふには君をねさせて三ふに我ねん

○壺石文

此石高さ六尺横三尺厚一尺五寸、面向に立、抑多賀城は神龜元年甲子按察使鎮守府將軍大野朝臣東人所築也、其後天平寶字六年十二月東海道節度使兼鎮守府將軍藤原惠美朝臣此城内に立置て此碑といへり。

田村將軍鉾を持て此碑のうちに、髮を日本の中央のよし傳へり、又壺といふ所の名にはあらず、前栽に立られしゆゑなり

陸奥のいはで忍ぶをえぞしらぬ書き盡してよ壺の石文

みちのくの奥ゆかしくもおもほゆるつぼの石文外のはま風

○奥細路　○生巢原　○轟の橋　○岩切　○緒絶橋

白玉のをたえのはしの名もつらし亂て落る袖の涙に

人心をたえの橋に立歸り木葉ふりしく秋の通路

○鬪鵲岡

此所の山陰、花の盛には皆紅のごとし、天神の社立せ給ふ

○藥師寺

是に運慶の作の十二神有

○横野　○玉田

○宮城野

此野の絲萩花房も餘の所にかはりて、むかしは髮に錦を亂し、都人の目にもめづらしく、爲仲手折せて長櫃に入てかへられし。其跡もかたちも今は一本も見えず。廣野に小松ばかりありて秋をしらず。此花の種元は枯て世に殘り、仙臺の人の庭に咲せし。

宮城の本原の小萩露をもみ風を待毎君社まて

哀なる宮城か原の旅ね哉片敷袖に鶉なくなり

みさむらひ御笠とまうせ宮城野の木下露は雨に增れり

○木下野　○權現堂
○國分寺
當寺は聖武天皇天平年中に日本國中に一國一ヶ寺を御建立をありしによつて國分寺といふなり、其一寺也。
○白山權現　○小鶴の沼　○袋原
此澤にさま〴〵の鶴、ふだん羽をたれて、人をおそれず見えし。
○比丘尼坂　○化粧坂　○原町
材木藏有、舟町といふ所に遊女有。
○國見坂　○龍の口　○仙臺
○青葉山
民家京の町に替らぬ繁昌の大所なり、尾形町かぎりもなく、甍立つゞき、久しき城下のしるし、諸木枝を垂、風に葉音なく、靜なる國也。
○繼路山
千本杉とて大木有、此中に愛宕大權現立せ給ふ、惣じて當國は杉の木多き所也。

松平龜千代殿城下

○廣瀨川
仙臺の町はづれに流れたる大河なり。
○琵琶首　○芭蕉が辻　○六道辻
宿の出はづれに、人家の軒端に古代より植つゞきて、其根ざし今に廣葉をあらはし、此所は名のたかき札の辻也。
○五つ橋　○清水小路
入組し川の面に、橋を五つわたされし、水きよく、かゝる風景おもしろし、參劔に八橋名斗殘れり、難波に四つ橋是さへ稀に詠めしに、是は又何國にか有べし。
○中田
此里のすこし西にあたつて、生出の森有、裾野は玉笹みだれ、細川より埋木ながれ出、香灰に燒也。
○熊野山權現
○名取川
むかし名取りの老女住ける所とて、今に語り傳へし片里有。
陸奥に有といふなる名取川なき名取てはくるしかりけり
名取川晉に名立そ陸奥の忍ぶが原は露あまるとも

○佐溜川

爰に赤坂明神立せ給ふ。

○増田

植松寺空海の靈寶多し、當寺は夕日上人の開山の靈地也、諸木しげりて、風法音のとなへ殊勝に見えわたりぬ。

○小松岡

いにしへは野邊なりしが今は里々村々つゞきし。

○糠塚

此所錦戸合戰の時、源頼朝公改め給ひ、米塚となし給ふと也。

○實方塚

さねかた中將は小一條定時の子也、長德四年十一月十二日此所にて死す。

○岩浪　○石地藏

此所より相馬海道あり。

○武隈明神

○二木の松

昔日橋の季通みきとこたへん聞し二木の松も、藤原元善任國の時、館の前に植初めしより數多生出、其後孝義又任國の時情をくれたる人の爲めとて是を伐せて橋に掛し、跡は杉村の中に寺のみ殘れり。

○槻の木

宿はづれに大木有、文治五年に源頼朝奥孟合戰の時、此槻の木の下にて、かぶら矢二つ權現にこめられし事有。

○憚關

知るらめや身さへ人目を憚の關に泪はとまらざりけり

やすらはで思ひ立にし東路に有ける物を憚の關

○舟廻

○油掛地藏

此所にむかしより石佛まし〳〵て、大師の作といひ傳へり、其里に住ける油賣毎日灯明とて、かはらけもあらねばかしらから〔○に脫カ〕一抄づつ掛しに次第に富める家となり、それより此堂をた〔○て脫カ〕けるといへり、

○大河原

此宿のひだりのかたに、柴田が城跡山中に石垣崩殘れり。

○韮髪山

此山の頂人のかしらのごとくなるによつて、此名をいひなしける、其岡野へに照井太郎が塚有。

○金瀬

○刈田宮

此山下に白鳥大明神立せ給ふ、是は日本武の尊の垂迹なり、崩給ひて後白鳥「○と脱カ」なり、大和の國に飛給ひ、また讃岐にも飛せ給ふ、景行天皇の御宇也、今爰に勸請して、御社拜まれ給ふ。

○子捨川

此里へむかし白川院の御時、ゆゑある宮女の東に行し夫の發心を尋て爰にくだり、世を思ひ切、子を捨置、其身は此川に沈みしとなり、それより淺瀬のかはり早川となれり。此流の末に、

○眞野萱原

分詫て何國里とも白菅のまのの萱原霧籠てけり

露分て秋の朝は遠からで都やいつのまの〻萱原

○白石　片倉小十郎居城

此所より名物の紙絹紙子出る。

○竈崎

津の國有馬のごとく入湯有、諸病によし、ひだりのかたに高山見ゆる。

○戸澤山

○佐伊川

鞍割坂といふ有、是は錦戸合戰の時、此岩谷にて人馬をそこなひしよりかくは名付し。

○甲冑堂

是は佐藤庄司が二人の子次信忠信が女の御影、鎧を着しむかしを今に其姿を木像に移し置ぬ。

○牛馬の沼

此ぬまにむかしよりおのづからのうし馬生じ、今に絶る事なし。

○越川

此所に仙臺福島兩院の石佛有。

○國見山

此高根より近國見えわたるによつて名付し山也。

○賀以田

むかし辨慶東くだりの時、爰に休みし所とて、腰掛松、さもあるべき大木の枝を垂れて殘れり。

○伊達大木戸

龜割坂も此所也、錦戸太良泰衡後鳥羽院文治五年九月三日に此城にて討死す、家人河田次郎是を討。

○下紐關

東路のはるけき道を行めぐりいつかとくべき下紐の關

現とも夢ともみえぬ程斗通はばゆるせした紐の關

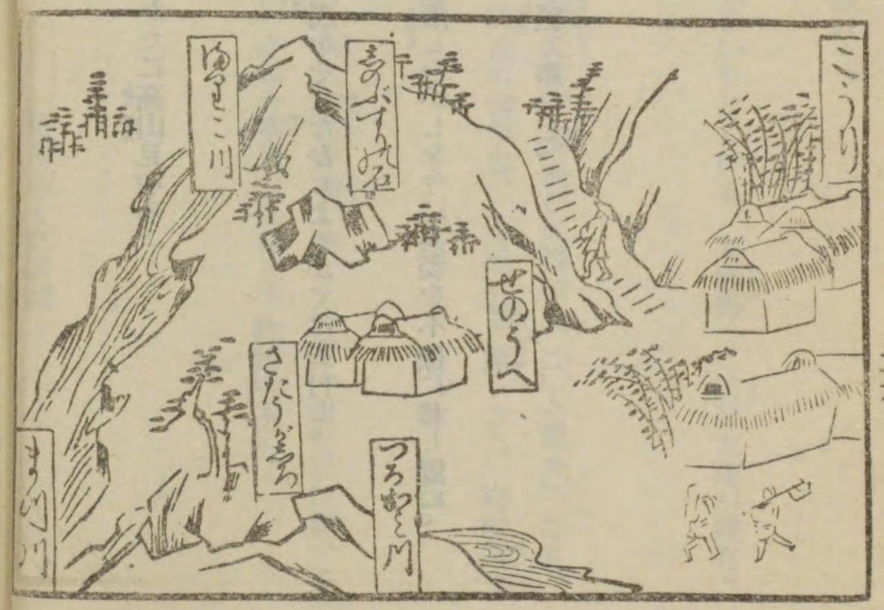
○藤田

此宿に明の藥師とて立せ給ふ、諸病の中にも眼病を祈れば七日のうちに驗氣を得ざる事なし。

○桑折

是より最上の海道有。

○瀨の上



此所に鶴上川とて清き流れ有、見渡しに丸山、是は佐藤庄司古城の跡也、後鳥羽院文治五年十月二日厚免を蒙り、爰に住す。

○忍摺石

此山あいの野に、薄紫の石に苔むし、今に其名埋れず、むかしは此石に草の葉を絹などにすり付けるといへり。

陸奥の忍ぶもぢ摺誰ゆゑに亂れそめにし我ならなくに

○鞠川

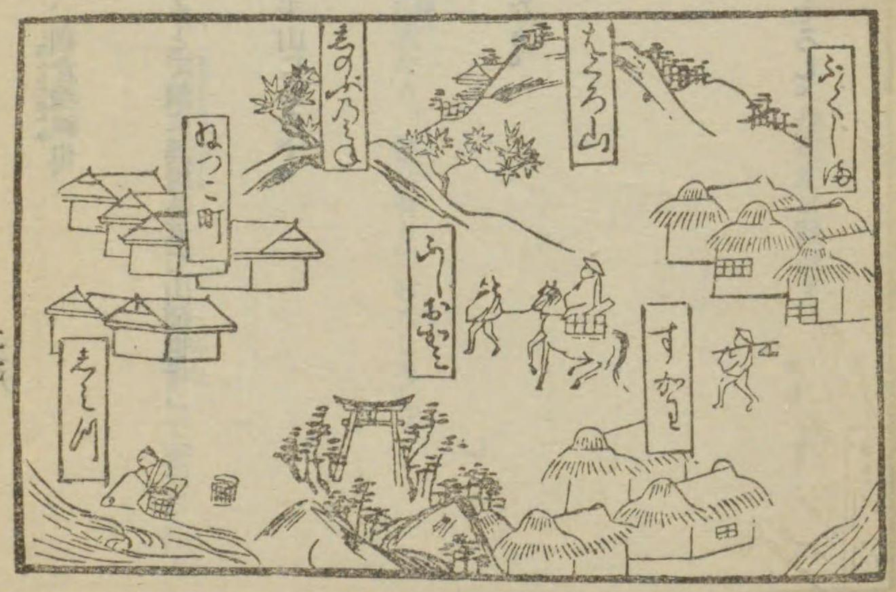
山川白浪岩にくだけて早水也。

○松川

○福島

名物の絹縞出る。遊女有、町作もよろしき所也、是より羽黑見ゆる。

○羽黑山



此權現は推古天皇元年に出現、出羽の國に立せ給ふ、稲倉魂神也、

○須川

此宿の出はづれに、むかしより絶えず溫泉有、伏拜みとて坂に鳥居ありて山道也。

○信夫峯

紅葉村〳〵とありし山を、所の人かくは申せし、信夫山にあらず。

○爾津子町

里近くに漉通とて綺麗なる清水あり。

○八町の目

是より二本松の堺也、遊女ありて、物のおかしき所なり。

○二本柳

宿の入口に古木のしだり柳二本しげりて見えける。

○舟引山

○安達原

黑塚とて草村の中に柏の木の村立て殘れり、今もおそろし。

陸奥のあだちが原の黑塚におに籠れりと聞は誠か

分詫びぬ露のみ深きあだち野を獨乾かぬ袖しぼりつゝ

丹羽左京殿城下

○二本松

町並よろしき所也、此山に出湯有。

○相田

溫石　此所より出る。

武隈の松は二木を都人いかゞと問ばみきとこたへん

男鹿鳴あだちが原は紅葉して色も替らぬ武隈の松

○本宮

此所より會津海道有、宿も賑はしく旅人さだまつて泊所なり、遊女有りておもしろし。

○高倉

此宿はづれに步行渡りの川有。

○日和田

むかし爰に永代淵とて、靑龍の住て人をなやましける、弘法大師戒め給ひ、其蛇骨にて觀音を作り給ふ。

○福原

是より三春、内藤豐前守殿城見ゆる。

○小田原

此宿に田村明神の宮あり。

○笹川　○すケ川

是より白河の領分諏訪の宮立給ふ。

○淺香山

淺ましや淺香の山の櫻花霞こめては見えずも有哉

時待ちて落る時雨の雨そゝぎ淺香の山は移ろひぬらん

○同沼

みちのくの淺香の沼の花かつみかつ見る人に戀や渡らん

あやめ草引手もたゆく長きねのいかで淺かの沼に生けん

○山の井

淺香山影さへ見ゆる山の井の淺くは人を思ふ物かは

○信夫山

人しれずくるしき物は忍ぶ山下はふ葛の恨なりけり

何事を忍ぶの岡の女良花思ひしほれて露けかるらん

○葛松原

世の中の人にはくずの松原とよばるゝ名こそ嬉しかりけれ

○笠石

此里の入口に其まゝ人の笠を着たる姿の石有。

○影沼

うき藻もなく、水の絶ざるぬまなりしが、むかしより月の影移る事なく、月なしの沼といへり。

○久來石

爰は石川の何がし住殘せし山城の跡、松村立、下草もはえず見えし。

○矢吹

○新田

此所に岩切の觀音立せ給ふ、人のなやめる瘧たちまち落ける、是大師の御作なり。

○大和田

○大田川

○夫婦坂

むかし此里人、業平高安に通ふごとく、夜〳〵忍びしに、たびかさなりて後には顯れ渡り、二人ともに身を捨しより、爰を戀死坂ともいへり。

○化地藏

此石地藏夜毎に御身より火焔の燃え出で、人皆是におそれて、往來をとめける、有時刻付の飛脚通り合せ、袈裟かけに切て、其後は何の事もなかりき、今に形を殘しまします。

○小田川

○根白

宿はづれに清水有。

○白川

此山城の麓あぶくま川末に袖の渡し。

○阿武隈川

行末にあふくま川のなかりせばいかにかせましけふの別を

君か代にあふくま川の埋木も氷の下に春をこそまて

○袖の渡

みちのくの袖の渡の泪川心のうちに流れてぞすむ

本多能登守殿城下

○白川關

山をむかひあはせ、領堺より番所有、爰を二所の關といへり、抑〳〵孝德二年に諸國の關を定め給ふ最初なり。

便あらばいかに都へ告やらんけふ白川の關はこえぬと

都をば霞とともに出しかど秋風ぞ吹く白川の關

○革籠

二條院の比、吉次信高といふ者金商人此所にて死す、是其塚也。

○堺明神

是より陸奥下野の堺なり、

○白坂

此所に茶屋ありて、名物の餅を賣、赤前だれに小手まねき、口ばやにまゐれ〳〵といふ聲、聞なれずしてひとしほおかしき事也。

○道野邊清水

ひだりのかたにいさぎよく清水今に流れし、爰につゞきて、大木の柳に玉垣してむかしの根ざし也。

○遊行柳

道のべに清水流るゝ柳陰しはし迚こそ立とまりつれ

○芦野

爰に那須の七騎堂あり。

○那須野

此里より那須紙出る、びやう〳〵としたる篠はらつゞきし。

武士の矢なみつくろふこ手の上に霰たばしる那須のしの原

○殺生石

刀根川の上に有、仁皇七十六代近衛院の宮女也、玉藻の前が亡魂此石になれり、又久壽二年に三浦上野此兩介、此野の狐を狩りける。

○鍋掛の里　○大田原

此山つゞきに室の八島ちかし。

○室の八島

立のぼる煙も霧となりにけりむろの八島の五月雨の比

いかにせん室の八島に宿も哉戀の煙を空にまがへん

○黑髮山

詠めつゝ散りなん事を君も思へくろ髮山に花咲にけり

旅人のますげの笠や朽ぬらん黑髮山の五月雨の比

是日光山也、稱德天皇景雲元年に開基、勝道上人建立の伽藍也。

○佐久山

○喜連川

此兩所御殿あり。

○氏家

是より宇津の宮の領堺なり、安久津川舟ありて江戸までも乘行所也、衣川といふ流に名物の鮎あり、水上は日光川なり。

○白澤

此廣野をうつの宮ばらとて、むかしより千種もかじけてそだちかね、土色黑うしておかしき氣色なり。

○宇津宮

日光山の御成道有、ひだりのかたに山城の跡有、是宇津宮の彌三郎舊跡也、此所の町並、都の風俗

にすこしもかはらず、男女ともにしとやかなり、東に稀なる大所、物の自由も爰也、名物の縮布出る。

○宇津明神

山陰に立せ給ふ、松村立て年をふりし宮居也。

○雀の宮

里はづれに、小笹のしげれる中に、ちいさき宮の立給ふ何の子細もなし、村雀のねぐらなるが故に、かくは書付けし。

○石橋

此宿に御殿有。

○大平權現

松杉のしげれる山陰に立せ給ふ、海道のみぎのかたなり。

○小金井　○新田

此里よりひだりのかたに筑波山見ゆる、水無能川も此麓なり、霞の山もはるかに高し。

○筑波山

つくばねのみねより落る皆野川戀ぞ積りて淵と成りける

櫻花咲やしぬらんつくば山このもかのもにあまる白雲

○霞山

ほのかにもしらせてし哉東なる霞の浦の蜑のもしほ火

今はとて心筑波の山見れば梢よりこそ色かはりけれ

○小山

此所に山城の跡有、むかし建仁二年に城の長茂京都にて謀反、小山朝政是を討て後此國に住城の所也。

○三棟明神

山陰に立せ給ふ、此麓に日光の還御道筋なり、ひがしの方に鹿島見ゆる、櫻川磯邊寺も此方なり。

○鹿島宮

當社春日明神志賀明神と一體分身也、告の明神も近し。

常陸なるかしまの宮の宮柱なほ萬代を君が爲とか

丸雪ふるかしまの崎の浪高み過てや行ん戀しき物を

○眞間田

曇なき影も替らず昔見しままの入江の秋の夜の月

○野木

○古賀

○栗橋の渡

御關所はこねのごとく、手形御改の所也、舟わたし有。

○中田

是より東はるかに高き山陰有、國府臺といへり、昔北條氏綱里見義弘と戰し所也、景行天皇の御時、日本武尊東夷征伐の爲めに關東に御下向ありて御歸陣の時、此市川の淺深をしりたまはず、猶豫したまふ所に、鵠鳥飛きたりて瀨ふみして此國府臺に上り、尊に向ひける、尊御感ありて、汝に此山をとらすべし、永代此所に主となるべしと有しより、鵠臺とあらたむ。

○幸手

○栢戸

是よりひがし南のかたにあたり、勝鹿の浦も見えわたりぬ。

○勝鹿浦

かつしかのうらまの浪の打つけに見そめし人の戀しきやなぞ

勝鹿や昔のまゝの繼はしを忘れてわたる春霞哉

○賀須か部

是よりひがしに野原ありしが、曠々〔○と脫カ〕して里もなく、森もなく、川もなく、月の入るべき山もなく、爰に毛色さまゞの野馬あり、南のかたの浦邊を、

○廬崎

たのめてもこぬ見の濱の沖津風何いほ崎の松にふくらん

○越賀部

此所に御殿有。

○草賀

是よりにしのかたに里ありて、すこしの宮ゐ有、爰をしのぶの森といへり、同じ野つゞきに萩はらのいとかすかに咲殘れり。

○忍ぶの岡

涼しさをなしの薬風に先立て忍の森に秋やきぬらん

○千手

○待乳山

待ち山おろす嵐や寒からん角田川原に千鳥鳴なり

誰にかもやどりをとはん待乳山夕越行ばあふ人もなし

爰につゞきて岡野邊に見えわたる、

○金龍山　○小塚原　○淺茅原　○鏡が池

○隅田川

梅若丸の塚印、柳櫻を今に寺の前に殘しぬ、むかし男の讀みし都鳥、此流今に、名にしおはゞいざ事とはん都鳥我思ふ人は有やなしやと

水茎の跡かき流す角田川言傳やらん人もとひこず

○三野

遊女の住める里也、名所の野三つ有とて此名おもしろき、爰の太夫のゆかり花紫高尾、此色に迷ひ身は煙のはしば日本堤衣紋坂大門口まで見え渡る。

○駒形堂

爰の氣色唐人もほめし所也。

○東叡山

寛永寺と號す、天台宗也、黑門の前より並木櫻、江戸の花見爰也。

○下谷

天神のやしろ立せ給ふ、此あたりを、

○向の岡

武藏野の向ー岡の草なれば根をたづねても哀れとぞ思ふ

○淺草寺

當寺は仁皇三十四代推古天皇の御宇に建立、本尊は聖觀音、關東に最初の伽藍也。

○千壽橋

○三十三間堂

稽古矢數の爲めに都を爰に移す。

○木願寺

○御米藏

○鳥越橋

是よりひだりのかたの川向ひ本庄、人家立つゞき、安樂寺の天神立給ふ、

むさし野に掘かね〔○の脫カ〕井も有物を嬉しく水の近付にける

○本庄　○深川　○永代島

○兩國橋

武藏下總の堺川といへり。此所の遊興舟九間一丸、川武丸、金銀ちりばめし借ふね有、浪靜に笛たいこ、水鳥もおどろかぬ、此御時なり。夏は涼み秋は紅葉に花火夜のよし野の詠め爰ぞかし。

○柳原

○淺草見付

是より江戸の町筋、萬人の通り町の繁昌、馬のり物車は道を道に引もかぎらず。

○江戸

ちとせの松風枝をならさず、紅葉山に千秋の色まさりて、久かたの日影、にしの丸、雲しづかに、諸大名の屋形は雪の曙のごとし。月むさし野に廣く清なれ、春は花の朝げしきかはらぬ常盤ばし、大下馬の出仕傘、是も袋に治まれる時津國。

○御本丸

○西の丸

○紅葉山

むさしの國玉川といへるは水道のきよき流の多波川の上となん。

○玉川

多摩川のさらす細布さら〳〵に昔の人の戀しきやなぞ

日本橋ときめき渡り櫻田の中松平右衞門佐殿、松平安藝守殿屋敷のほとりを、

○霞關

春くるゝ行方何國しらねども空に霞の關やすゝへし

○山王の宮　社領六百石

○愛宕山

○増上寺　寺領五千石

當寺は西譽上人草創三緣山廣度院といへり、西譽は應永二十四年七月十八日に迁化。

○神明宮

是よりにしのかたに名所かず〳〵、爰にしる〔○し脫カ〕がたし西の久保にといふ所に、

○三田八幡

金椙といふ所をすぎて、芝の町はづれに札の辻、此ひがしの濱邊に獵人の住めり、芝肴とて磯物是より出ける、西に牛つかふ車宿、

○大佛　長一丈の立像也

是は大原の端玄の弟子端性と申、歸命山の木食沙門のつくり給ふ、石像の二王門あり。

○琰魔堂

太子堂庚申堂立給ふ。是より左のかたは海ぶた、石垣つゞきて、右の岡野邊松しげり所を高繩といへり。なほ岡山越て、にし南のかたに高岡立給ふ。

○目黑不動　寺領三十石

○東海寺

昔澤庵和尚のすみ給ひし寺なりしが、迁化の後、紫野大德寺の內より輪番持也。

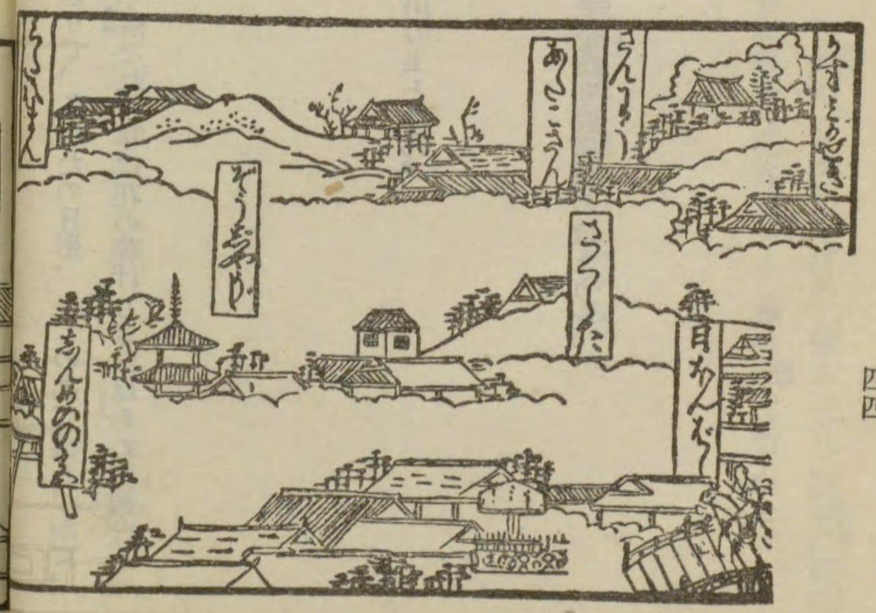
○御茶屋

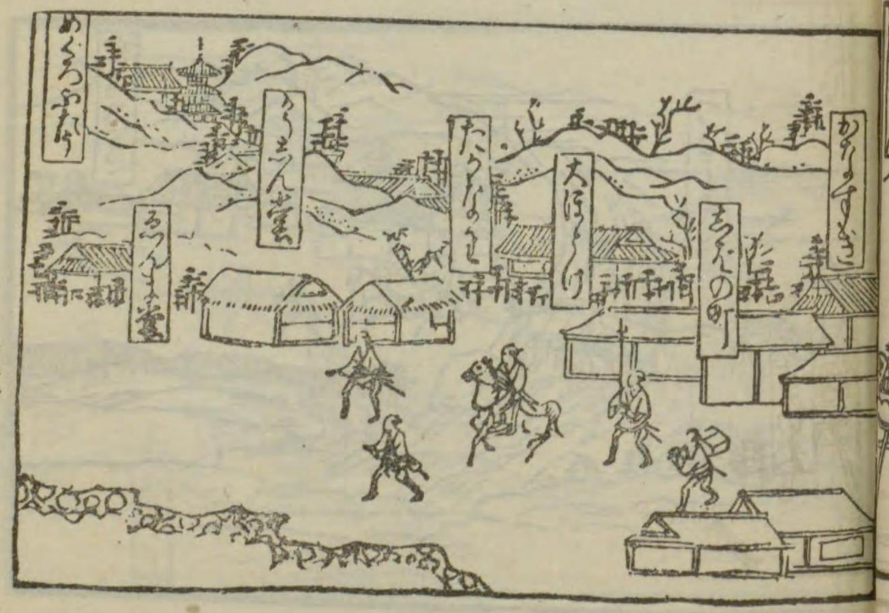
○妙國寺

當寺は法華宗也、駿河大納言殿のに立てられし御成御門を爰にひかれ、金銀の彫物ひかりかゞやきしが、是も昔になりぬ、濱のかたに藤の茶屋とて、軒端に花を咲かせてかけ作り、殊に夏は爰に寄らなん。

○品川

此浦より名物の海苔出ける、ちかき比までは、一





夜妻の色作りなして人を留めける、今其小歌の聲も絶えし、濱づたひに行て、西の方に荒川といふ里あり、爰を武藏野とて果しもなき野原也。

○秩父山

行末は空もひとつのむさし野に草の原より出づる月影

○鈴の森

昔欽明天皇の御宇に始て宇佐の宮にて鈴の御前あり、是より日本に神人用ひける。當社もその祝へり。又鈴石とて形丸うして、ころばかせば自ら鈴の音をなす。

○六郷里

爰に大橋掛れり、長さ百貳拾間、右の方に池上の道筋あり、左の方に羽田村とて獵師の住ける所也。此川に名物の鮎あり。それより右の野ずゑをはるかに行ば、流れしづかなる細川有、岸邊に原田の里。

○入間川

さりともとたのむの鴈を頼にて入間の里にけふぞ入ぬる

○三好野

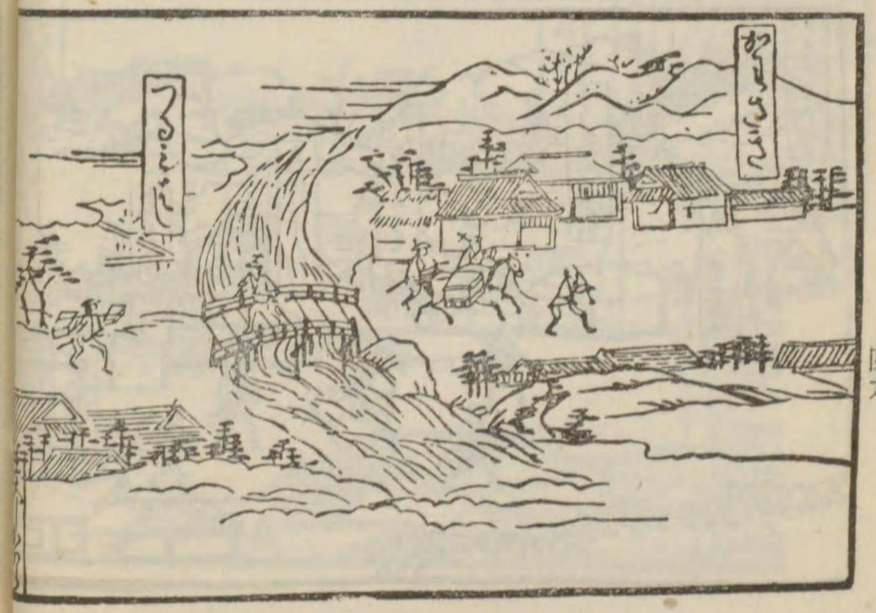
我方によるとなくなる見よしのゝ田面の鴈をいつか忘れん

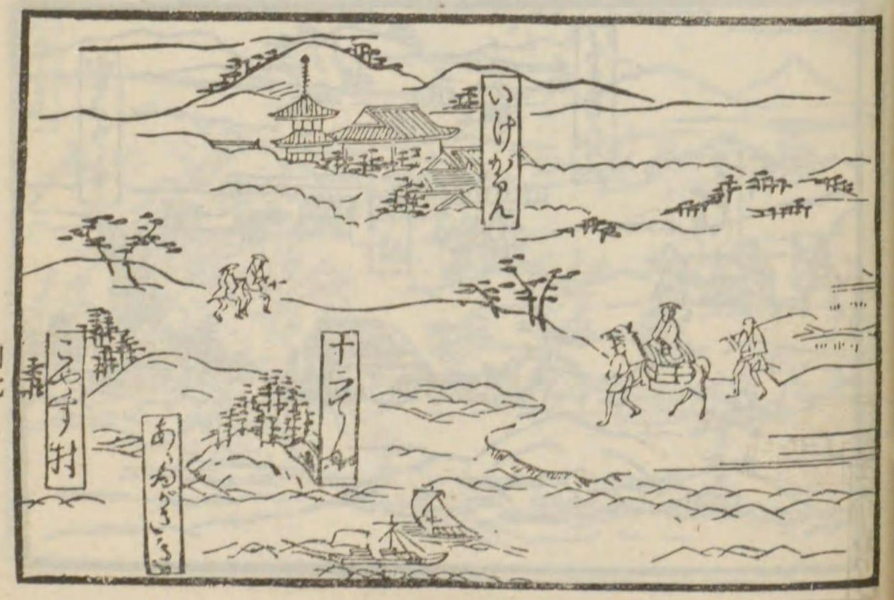
○川崎

ひだりのかたに大師河原といへる里あり、むかし弘法だいし入唐したまひ、みづから御影を作り、流沙川にながし給ふに、年ふりて後、此浦に流れ、獵師引あげぬ、木像に牡蠣のから取つき、今におがまれ給ふ。

○鶴見橋

海道の右のかたの見渡しに本木といへる里あり、つゞきて市場の町はづれより、法華宗の本山三所のうち池上、右に見えける。





○池上　寺領百石

本門寺は後小松院御宇に日輪上人の開基の地なり、延文四年四月四日に迁化し給ふ。

○十二天

是より濱邊にこやすなどいひて、浦々島々見えわたりて、氣色おもしろき所なり、此磯ばたに花貝、わすれ貝、さま〴〵の玉拾ふも目にめづらしき。

○荒蘭崎

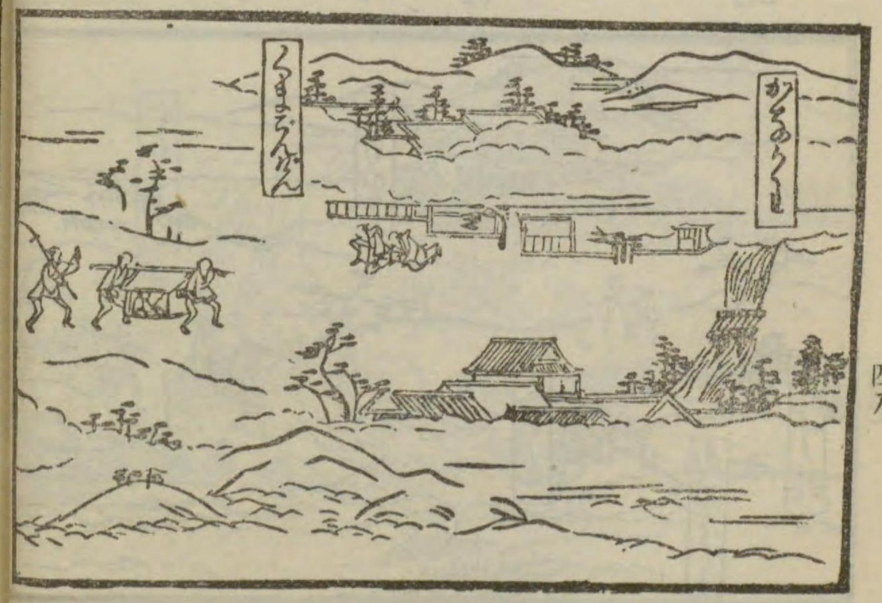
白波のあらゐの崎の磯馴松替らぬ色の人ぞつれなき

○金川

此宿にもむかしは風流女ありて、たはぶれのかり枕に、旅のくたぶれをたすけ一所也、右のかた岡に、

○熊野權現

それより海道筋の右のかたに、笹葺の軒の下に、



富士の人穴なりといひ傳へし岩穴ふたつあり。

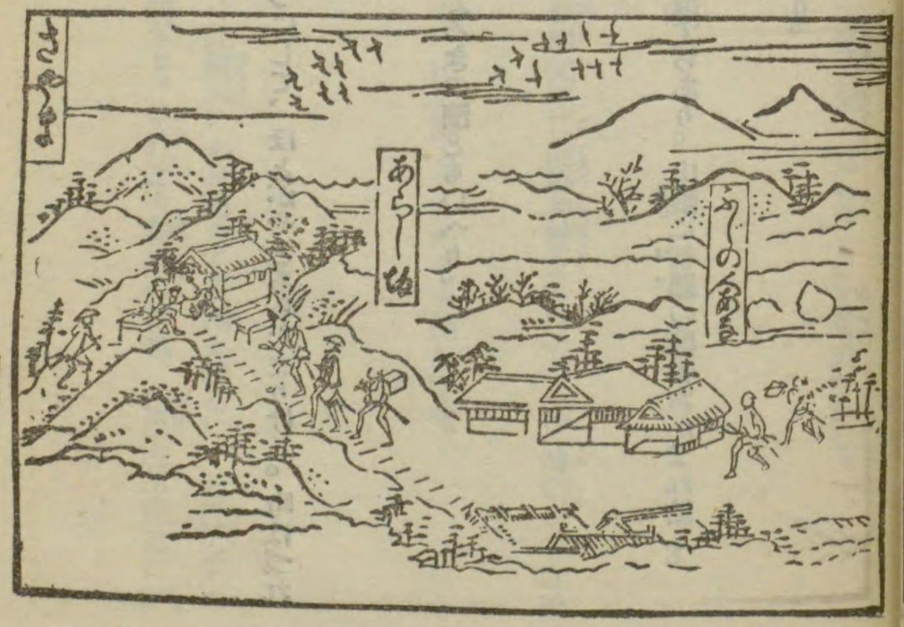
○富士人穴

是はむかし建仁三年六月に、大將源頼家公仁田四郎忠常をめして、此岩穴のかぎりを見てまゐれとの仰によつて、忠常入て地獄をめぐりて淺間の權現にあひたてまつりし事、東鑑に詳かなり。

此權現は木花開耶姫と申奉りしが、皇孫のみことに嫁して、彦火火出見の尊、火酢芹尊、兄弟の御神を一同に產給ひしと也。國府の淺間宮は延喜年中に信濃の國あさまを移し給ふ、此ゆゑに山中の神を本宮とあがめ、府中宮を新宮と申奉る。

○嵐坂

此所は浦風のかよひきて、諸木の枝なりやむ事なし、里の名もひとしほ耳に凉しき南請の茶屋あり。是よりひだりのかた、細道鎌倉へのかよひ也。右



はるに、

○挾山

秋風になびく挾山の葛かづらくるしや心うらみ兼つゝ

○新町

此所むかしは帷子といへる宿つゞきなりしをひとつにして、ほとがやとあらたまりける。町はづれ右のかたに武蔵相模の堺目あり。

○堺山

是よりひだりのかたの浦邊に松しげり岡野あり。よろきの濱ともいへり。

○古世路木森

思ふ事待に月日はこよろぎの磯にや出てけふは恨みん

○信濃坂

吉田町はづれに橋あり。左の田の中に鶴が岡への道すぢあり。山陰に初瀬の觀音おがまれ給ふ。

○戸塚

右のかたに八幡宮の立せ給ふ松山の中に時宗寺あり。

○原宿町

此里はかし馬のおほき所也。是より左の山越に、玉繩の城、見わたしに若宮山ちかし。

○鎌倉山

宮柱ふとしく立て萬代に今ぞ榮んかまくらの山

○遊行寺

並松の山中をこして、道場坂の右のかたはやし中に、

開山一遍上人は伊豫國河野通信の弟也、後宇多院建治元年に熊野神勅をうけて、爰に時宗寺を立給ふ、正應二年八月十日迁化。

此寺に小栗判官の塚あり、其奥に横〔○原本訓のこ〕山の塚とてむかしを殘しける。

○藤澤

是より左のかたの海に、

○江島

江島やさして汐路に跡たるゝ神はちかひの深き成べし

昔北條四郎時政は桓武天皇十三代平時方の男也。此辨天に七日籠りて子孫を祈るに、七代天下の執權に立んと夢の告に貳丈斗の大蛇うろこ三枚殘せり。それより鱗形の紋也、建保四年正月に神託あり。

爰につゞきて高砂、姥が島、あはびの名物なり。右のかたに白旗といふ山里有。

○大山　寺領三百石

當時は眞言也。後花園院永享四年に建立ありし所也。別當を八大坊といへり。

○馬入

舟わたしの所也。御上洛の時は橋を掛しとなり。是より南のかたの濱つゞきを、浪の瀨川といへる。

○手本浦

流て越手本の浦のかひあらば千鳥の跡を絶すとはなん

町はづれ右のかたの山陰に松のむら立て、白旗といへる里有。是は源義經、同辨慶二人の首、高館より鎌倉にと上せけるに、夜中に此浦に飛きたりて、龜のせなかにならび、聲を出して笑ひしを、里人此所に埋みし。武藏坊が塚には、今に松の風のみ殘りて物淋し。

○平塚

宿はづれに櫛現の立せ給ふ。

○高麗寺　寺領百石

此寺は天臺宗なり。是より山水の清き流れ川。

○花水橋

右に山々ひだりに濱邊、景色もひとしほおもしろき眞砂地、かけ浪おのづからの瀑石、玉にすらせる大磯石爰の事也。

○唐土原

名にしおはゞ虎やふすらん東路に有といふなる唐土が原

十間坂を越て、山の陰に櫛現の堂あり、曾我祐成うたれて後、虎御ぜん出家せし寺とて、名のみ今に殘りし。

○山下田　○宿河原

○大磯

長者やしきとて、むかしを石居に殘せり。此町はづれ虎がいしとて、紫だちてなめらかなるが、旅人くたぶれし片手に力持をしけるに、大かたの人はあげがたし。是より並松つゞきて、眺めにあかぬ里のや、ひだりのかたに岸根水絶え〳〵に浮藻の花もかれ〳〵になりて物のあはれ見えし。

松の木立浪越岩のけしき迄げに見所は大磯のはま

○鳴立澤

心なき身にも哀はしられけり鳴立澤の秋の夕暮

すこし松原の石道をすぎ行ば、まばらに里の見えし所を、

○小磯

此町はづれに、山川橋をわたりて切通し、石地藏の立給ふ。是はむかし夜道を飛脚の通りしが、此形をおそれて、切りけるとて、今に袈裟がけにつぎあはせり。

○府中

是は相模の國の府也。此里町をすこし出はなれて、右のかたに岡山六社の立せ給ふ。それより右の山本にかうしんの堂あり。又右の畠中に年ふりし並木の松の兩方にうはりし、是を日影の馬場とて、小栗判官の鬼毟毛をせめ給ひし跡也。又藏王の堂も立給ふ。

○梅澤

此里岡松のかげに、左のかたは海を見おろし、茶屋あり。筋鰹といへる魚あり。町の入口に、

○東大明神

それより關本といふ所に、山の下道に寺見えける。

○最勝寺

是より海道右のかたに、ひさしき里〳〵見えつゞきし。爰を曾我の祐成、時宗がふる里とて、今に其名を殘してゆかりのものも住ける。

○曾我里　○山野内　○中村

道筋は磯馴松のはやし、ひたりのかたに浦浪うちつゞ〔○きノ字脱カ〕て、ゆくに片里をすぎて、

○早川

右は山のひだりは海にちかし、歩行わたりして程なく一色の里を過て、

大久保加賀守殿城下

○小田原

此宿の右のかたに小田原陣の時の戰場殘れり。町の中に筋違橋を越て、名物の外郎屋、甲かね、樫木の足駄、夢想枕、青石、饅さま〳〵の物出ける。町はづれ心見の坂に地藏堂あり。笠松ひだりのかたに椙山ふかし。

○石垣山

是は太閤秀吉公氏直にむかひ陣を取給ひし所也。玉笹を分のぼれば、山川音なして、右のかたの里を湯澤とて、諸病人の入所也。

○湯本

此里にむかし連歌師宗祇の塚とて、岩の陰道に苔の下露殘れり、地藏堂有、すゞも澤の茶屋、大澤を越て、

○二子山

形其まゝ名を見せける畑茶屋過て、さいかち坂、
樫木坂、左右岩組けはしき難所也。白水坂、本箱
根。

○權現堂・社領貳百石

此東福寺は孝謙天皇天平寶字年中に、滿月上人開
基也。寶物さま〳〵有、友切丸貳尺五寸、蔦唐草
の拵へ、長闌の太刀三尺三寸、祐成十番切の劔也。
赤木のさすが有、時宗筆跡有。

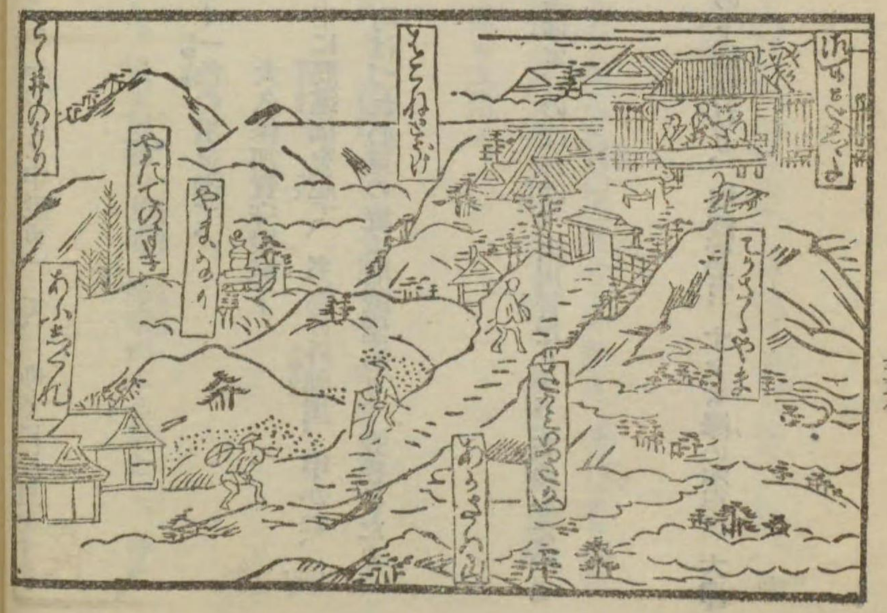
○箱根山

これ山薄紫の壺すみれ二しほ三しほは誰か染けん

○湖水

元明天皇和銅七年に此湖はじめて見出す、尉が島
につゞきて磯邊に際の川原ありて物かなし。相模
伊豆の堺有。

○山中



此里はづれに矢立の椙有、右のかたに一柳殿の石
塔有、ひだりのかたに赤澤山見ゆる、右の山越に
小久井森ちかし、長坂、大しぐれ、塚わら、三津
屋しだいにくだり坂也、枯木坂、石はら坂も難所
なり。由留木の橋などいへる名所、右のかたの澤
山なり。坂下に岩屋あり。

○初音原

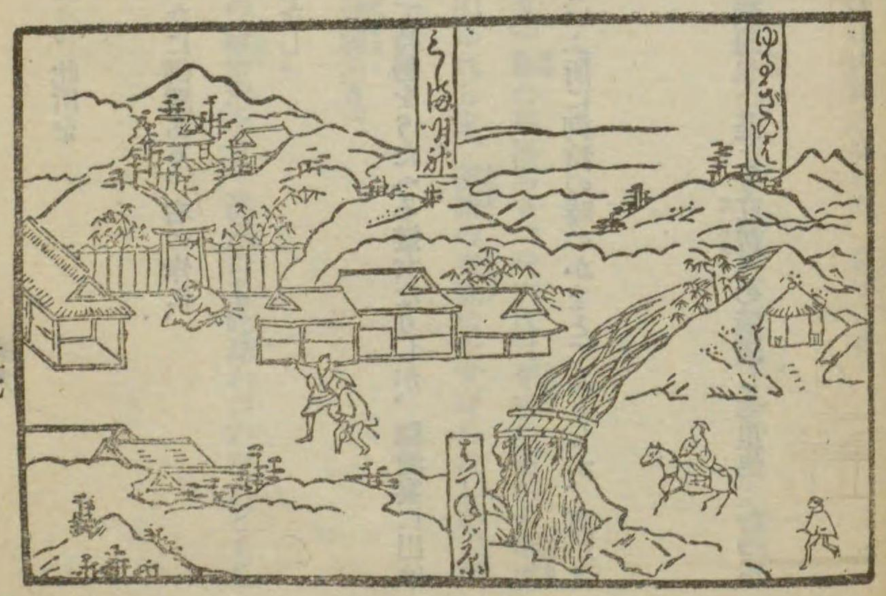
此野にして鶯なきそめけるとなり。左の海越に大
島小島見ゆる。

○伊豆高根

千早振いづのお山の玉椿八百萬代も色はかはらじ

○三島

右のかたに明神の社あり、大山祇の神是也。崇
〔○原本訓そう〕神天皇十七年、鎮座したまふ。
治承四年十月二十一日に頼朝參詣あつて社内を寄



進したまふ。御池に鱧有、左のかたの浦邊に溫泉あり。此所を

○走湯

是は仁明天皇延暦貳年に始て、宿はづれひだりのかたに御殿あり。右の岸に、

○千貫樋

是は伊豆駿河兩國の堺目なり、此水日照にも絶る事なし。

○黄瀨川

むかし頼朝富士の御狩の時、此里の長が娘に龜鶴とて時勢をうたへる遊女なりしが、御酒宴に出ける。世にかくれもなき美形なりと申傳へり。

○車返里

是より樋口といへる里を過て、新宿を越て、釜野といふ所に御狩の時のかまとてありしが、萬かはりて野は池となり釜が淵といふ。

○山王宮

此林のうちにも頼朝かりばの大釜今に有、ひだりの濱邊也。是より江尻への横渡し七里也。むつかしき所なり、乘るまじき海上といへり。

○三枚橋

古代は此所淺き澤にして、板なげわたして、其名を今は大橋となれり、宿中に有。

○沼津

此宿舟つきなればはん昌の所なり。むかし名取の遊女も旅人のうきを晴させける。わかさ、若松といへり、是兄弟の美女と見し人語り聞傳へし。

町の出はなれに、右のかたにしげり木のはやしを、

○千本松原

是よりひだりの野中に六代御〔○原本御ノ字重複セリ〕前の石塔あり、此六代は平家の何がし維盛の御子なりしが、北條四良時政にとらはれ、鎌倉に引かれしを、高雄の文覺にたすけられしが、其後又此所にしてうたれ給ひし古塚也。

鼠町、すはまち、松長町をすぎて鱧が原とて名物の蒲燒あり。

○原

此右のかた田の中に小島ありて、若松むら立て、その邊皆沼なり、高水にも此島わづかなれどもしづまずして浮けり。

○浮島原

白妙のふじの高根に月冴て氷をしける浮島が原

○對面松原

うき島のつゞき也。是平家退治の時義經奥劔より、治承三年十一月に此所にして頼朝公にた〔○いぬかし〕めんありしといへり。

ひだりのかた山の根本に見えける、

○江國寺

○鶴が澤

此沼にふだん丹鳥舞あそびし、是は頼朝はなちおかれし。

○八重山

更に今都も戀し足柄の關の八重山猶へだて〔○て脱カ〕も〔つゝノ誤カ〕

本吉原を過ぎて、足柄の明神立せ給ふ、左に高根見えし。

○足柄山

行人の心留めずば足柄の關守神もかひやなからん

與田の橋を渡りて、善德寺の御殿への道有、名物の酢あり。

○大纒里

爰にむかし竹取の翁すまれし跡也。ひとりの娘あり、かぐや姫といへり。此事たけとり物語にしるせり、桓武天皇延暦年中の事なり。

○富士山

孝靈天皇五年に始めて駿河國にあらはる、山の上の社は、平城天皇大同元年に建立あつて、本宮となし給へり。徐福といへるもの、不老不死の藥をもとめて、此山にとゞまり、是蓬萊山の詠め、嶽は八葉に分て芙蓉を削がごとし、三國無双の美山也。

時しらぬ山はふじの根いつとてか鹿子まだらに雪のふるらん

目に掛て幾日〔○に脱カ〕成ぬ東路や三國をさかふふじの芝山

朝日さす高根のみゆき空晴て立もおよばぬふじの川霧

○鳴澤

煙立思ひも下や氷るらん富士の鳴澤音むせぶ也

飛軒思ひはふじと鳴澤に移る影こそもえはもゆらめ

麓に大宮といへる里有、山の根に祐成、時宗を荒人神と、建久年中に頼朝勸請したまふ。

○兄弟宮

○鵜飼川

是より河田の郷、市場といふ里をすぎて、山川不斷に高浪して、岩に玉水をくだき、棚なし舟に竿

さすもせはしき渡し也。

○富士川

流れてと思ひし物を富士川のいかさまにしてすまず成けん

是よりひだりのかたの濱ちかくこいしはら、景色おもしろき所を、

○吹上濱

六本松とて、むかし牛若丸あづまくだりの時、旅つかれにて休らひたまふ所なり、右のかた山陰に、松のはやしのうちに御殿あり。

○神原

右のかた山ひだりは海邊、里〳〵は獵師のすめる所なり。此浦に矢骸といへる魚あかる也。

○由井

町はづれ右に別明神立せ給ふ、是よりひがしは大海にして峰つゞ〔○き脱カ〕なり、鹽濱有。

○田子浦

五月雨のふる江のむらの笘屋形軒までかゝる田子の浦なみ

田籠の蜑の宿まで埋む富士の根の雪も一に冬はきにけり

○薩埵山

觀應二年七月に足利尊氏、直義兄弟合戰ありし所也。親しらず子しらずとて、浪うちきはの岩組をむかしは旅人の難義。

○般城山

駒なづむいはきの山を越兼て人もこぬみの濱にかもねん

○廬原

清見潟關より外もいほはらの松こそ浦のへだて成けれ

○清見關

見し人の面影とめよ清見潟袖に關もる海の通路

清見潟關に留まらで行舟は嵐のさそふ木葉成けり

古代は此峠に關ありしが、桓武八年に絶たり、くだれば岩のかげ道せはしく興津川是より右のかたの山陰、安部高丸謀反の時、坂上田村丸の陣場といへり。

○奥津

此所に藤の丸、かうやく屋軒をならべて見えける、萬によし。

○清見寺

惠日山東福寺の爾長老聖一國師の弟子開聖といふ法師此寺をひらきはじめり、巨鰲山清見寺といへ

り。世にひゞき渡れる鐘の聲、寺前より美景見えわたる、舟路又あるまじ。客殿方丈のこらず雪舟筆を殘しぬ。名木の海、是殊につねより色香ふかし。

○伊原川

右の山下に伊原左衞門が城跡殘れり、ひだりのかた濱邊に小松有し。

○有度濱

うとの濱に天の羽衣むかしきてふりけん袖やけふの祝
いつとなく戀駿河なるうと濱のうとくも人の成增る哉

鱸島につゞきて天津をとめのはごろも掛の松とて年ふりし。

○三保の松原

清見潟磯山本は暮初て入日殘れる三穗の松原
風はやみ三保の浦わをこぐ舟の舟人さわぐ浪立らしも
忘ずよ清見が關の波間より霞て見えし三保の松原

○袖師浦

から衣袖師の浦のうつせ貝むなしき戀に年のへぬらん

同じ名所出雲にも見えけり。

○江尻

此宿舟つきにしてよし。むかし爰に若狹、若松といへる兄弟の遊女有、右の野中に姥が池とて人のなかる聲につきて泡立ておそろし、をのかたにかう入いふべし、

○久能山

此知滿寺は聖武天皇の御宇に、行基山に入て、千手觀音の像を作り給ふ、爰を補陀落山ともいへり、當時堯辨法師は天臺の學者也、聖一國師はじめの師也、後に聖一は東福寺に開山となり給ふ、唐土より渡せし瑪瑙の羯鼓を此寺におくられける、又源伊豫守頼義薄墨といふ笛を寄進し給ふ。

○狐崎

野つづきて、岡松のくろみし所なり。是より右の方、田の上といふ山寺に、梶原景時の影有、よし田、長沼、まがりかねといふ里〳〵を過て、

○府中

町の右のかたに御城有、屋形つゞきて、山〳〵に寺社多し、にしの山陰に、

○淺間宮

此社は孝靈天皇の御宇に出現、是富士大權現也、此所に移させ給ひ、駿河國一の宮なり、桑竹細工人、紙子、さまゞ名物也。

安部川の上に、松のしげりたるすこしの山の見えける、凩の森是也。

○木枯森

消詫ぬ移ふ人の秋の色に身を凩の森の下露

右のかたの峯くろみたる所は、しづはた山なり。見渡し、

○志豆機山

今朝みれば霞の衣織掛てしづはた山は春はきにけり

誰がためぞしづはた山の永日に聲のあやをる春の鶯

○手越里

むかし重衡鎌倉に取はれし時、頼朝公あはれみ給ひ、千壽をつかはされし。其親の里、手越の長者の跡とて酒屋して有。

○鞠子

○小笹山

連歌師宗祇の住給ひし跡とて有。此山川より盆山の黒石出ける。それより岩根道を行に笹の屋立つづきて、賤の仕業にはやさしくも十團子を賣聲もをかし。

○釘無堂

是はむかし飛驒の工が作れり、地藏立給ふ、けはしき谿陰を行に、

○宇津山

旅ねする夢路はゆるせ宇津の山關とは聞ず守人もなし

茂りあふ蔦も紅葉も紅葉して木陰秋なる宇津の山こえ

駿河なる宇津山べの現にも夢にも人にあはぬ成けり

いづれ蔦の細道、ひとしほ淋しき所也。業平都おもはれし事も旅ごとに思ひ出さるゝ山路也。

又坂のおりくちにも地藏堂あり、今は馬さへ自由の道となれり。息つぎの清水有。

○岡部

此宿の右のかたに松ばやし物ふりて、社を立置ぬ。是は昔日岡部六彌太を祝ひ籠しといへり。それより右の野中に茂り丸山殊勝に、そのめぐりは池にて、おく深にをがまれ給ふ。

○八幡宮

かり宿町、白子町を越て、ひだりの方に見えける。

○田中城

是より並木の松原をすぎて程なく、

○藤枝

此所は海邊ちかし。魚いきてはたらく所也。町出はなれに砂川をわたりて右のかたに、

○烏帽子山

そのまゝ山の形立えぼしのごとし、是より小松のはらを右のかたはるかに、島田が淵とて丸池有。むかし執心ふかき女の人をうらみ身をなげしよりいひならはせり、此女姿を作り、髪の結振目立て、それより世に島田曲といへり。

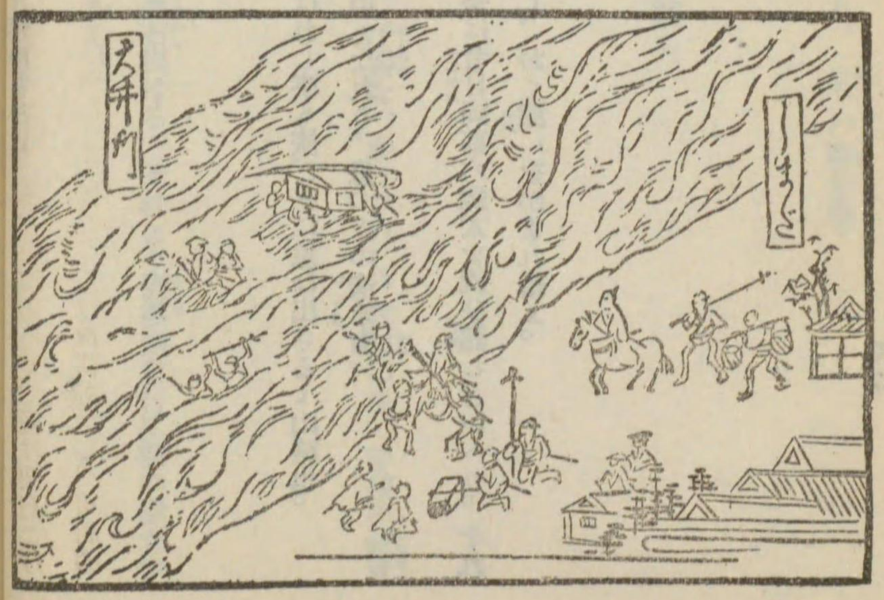
○瀬戸

此里に染飯とて、くちなしにて黄色になし、家ごとに是を賣ける。はじめわづかなる事なりしに、いつとなく所の名物とはなりける。

○島田

此宿の中より石道あらし、川原茱萸の木しげれり。

○大井川



そも〳〵此川日本第一の流れ、北の諸山よりひとつに落合、不斷に濁りて浪あらく、底は栗石こけやむ事なし。南に海近し。高水にわたるべき所にあらず。常にも川越なくては及びがたし。東海道ひとつの難所也。

思ひ出る都のことは大井川幾せの石の數も及ばじ

大堰川は駿河遠江の國境也、是より山道けはし、

○金谷

此南のかたに、山たひらにして、こまつ村立、

萩の折ふしに咲ける廣き原有。

○引馬野

もろ人の衣にすらん梓弓引まの野べの秋萩の花

ひくま野やかやが下なる思草又二心なしとしらずや

姫子松ひくまの野べに子日して手毎に千世をかざしつる哉

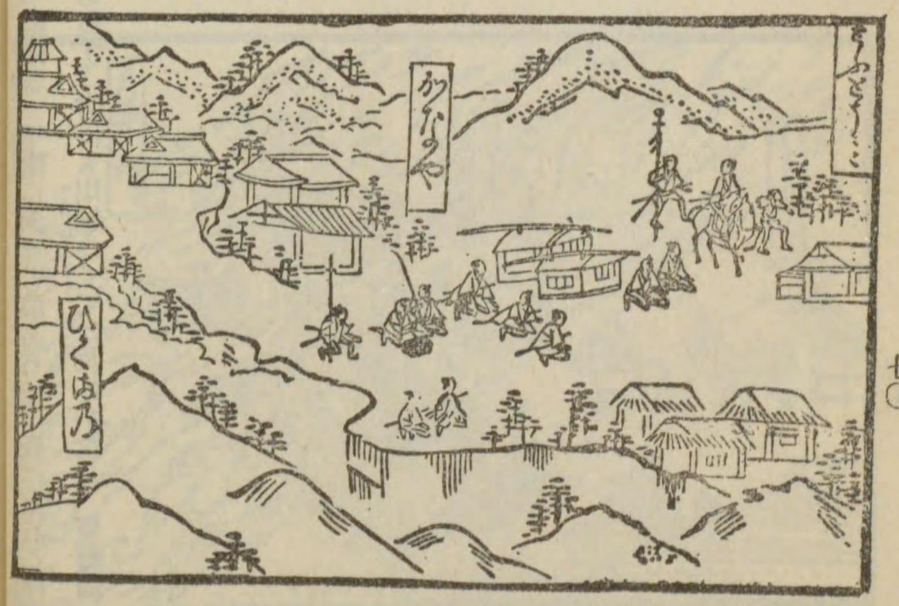
岩の陰道十六丁の坂をのぼれば、里の屋の淋しく立つづきし所、

○諏訪原町

此所より北はるに、白雲に埋みて、峯かさなりて見えし甲斐の白根なり、

○雪見山

此麓里に北南に流れし川有、



○菊川

わすれめや軒の萱まに雨もりて袖引かぬる菊川の宿

此所に矢の根鍛冶の名人有、また切飴の名物有。

○駒場原　○栗瀧

○泣子坂

むかし此里の賤の女、金谷の宿につまありて、夜道を通ひしに、山盗是をうちけるに、此腹より男子の出生して、後母のかたきをうちて、其身は出家せしと語り傳へり。

○燧坂

右のかたに御殿有、並松としふりて物靜なる所也。

○佐夜中山

待明すさよの中山中々に一聲つらき時鳥かな

旅衣夕霜さむき篠のはのさやの中山嵐吹くなり

鳥の音を桀の里に聞捨て夜深く越る佐夜の中山

古代には此峯に關の戸ありし。

○夜泣松

人の語り殘せしは、夜泣する子に此松を灯して見するに、かならずやみぬるためし有りて、旅人切絶て、今は蕪のみ殘れり、右のかたの山に、

○觀音寺

是に無間の鐘有、毎年二月の初午に、諸人參詣ける。

○柳が峠　○男鯨山　○女鯢山

此山より碁石出る、右かたに洞の清水とて湖汐のさし引有。

○西坂

此麓に笹の屋軒をならべて、賤の手業に蕨餅をせしが、今は世にしれたる名物とはなりぬ。

○八幡宮

此神前に銀杏の大木あり、其むかしは蛭が田といふ所といへり、又左のかたに鞍骨の池見ゆる、影森といふ里近し。

○長橋　○曾根川

○掛川

此所より葛布出る、ひだりのかたに久能の城見ゆる、里つづき小松の長縄手平地也。

伊井伯耆守殿城下

○小池町　○鯖田村　○狹井田　○原川

○淺間宮

右の山陰に立せ給ふ、大鳥居は海道に有。

○不瀨川　○沓部村

此間何の名所もなく、北のかたに松山つゞきて、南のかた田島、里〳〵見えわたりぬ。道ばたの家毎に小荷駄の馬道具の細工人あり。又わらの中ぬきにして上草履のうつくしげなるを作り出せし。

○袋井

此町の出はなれに土橋かゝれり、松原をすこしすぎて、熊野の權現の社、右のかたに立せ給ふ。

○木原里　○藤島町　○三上の坂

○祝の里

此野に源頼朝公鶴をはなち給ふとなん、後代見し印にとて黄金の札を付られし、其鳥今に住ける、富〔○士脫カ〕野にも此沙汰有。

○行人坂

爰に月待日待の山伏勸進せし故にかくいへり。坂の上に饂飩屋見世をならべて、山家女の色つくりて往來の人を口ばやに小手まねき、ひとしほをかしさもましぬ、ひだりのかたの森の中に、熊野のごんげんまします。

○見付
宿の軒端に春をかさねし梅有、町の出はなれに、右のかたに三本松有、鷺去のはし長さ十二間有、町の中右の松影に、

○物社大明神　社領四十二石
左のかたに今野浦といふ溜池有、同松林の〔○中脱カ〕に石の鳥居立。

○八幡宮
宮のまへ饅頭の名物也、左のかたに、

○櫻池
昔日比叡山に肥後の阿闍梨源光法師手に一滴の水に、身の影移し、生ながら大蛇となり、此池に入給ふ。

○中市場
此里に御殿有、町中より左のかたへ横須賀に行道筋有、町の出口に坂有、是より松陰の海道ゆけば、そうか山の宮、一色の里、大森村を過ぎて堤づたひに、

○池田の宿
むかし此里に遊君あまた集め、旅人を留し長者有、此娘に湯谷といへる美形なりしに、平宗盛郷にまねき給ひ、花の友ともなし給ふ。

○天龍川　○小天龍
舟渡しの早川也、水上は信濃國飯防の海よりの流れといへり。新田左中將義貞と足利尊氏と合戰ありし所也。川の西の畔の中に、

○子易森
中の町をすぎてあんまはし十二間あり。右のかたに沼ありて、藥師堂立給ふ。鳥居松とて一木ある申ならはしぬ。柏葉村みかたの原などいふ所有、右のかたに天王の社立給ふ、植松村の橋三十二間有。

○濱松
町筋長く、はんじやうの宿なり。右のかた町中に諏訪大明神の社有。此宿の出女の手業にさし足袋名物なり。右のかたに本坂越の道あり、ひだりかたはかぎりなく大海波あらし、爰を遠江灘といふ也。是より松原の砂道つゞきて、物淋しき所なり、若林の郷、赤塚、篠はら、新田すぎて右のかたに入海はるかに山ぎはに大澤などいへる所あり。左のかたに蓮の咲ける長沼有。壺井村といへる所有。松ばやし中に里〳〵有。春秋は松露をほりて童子賣ける名物也。かし馬のたくさんなる海道なり。

○舞坂

是より舟渡し、暮におよべば、此宿にとまりてよし。南はあら海にして、風吹には高波うちかけ難義なり。洲崎のかはる事たび〳〵有、是を汐越島といへり。燒蛤爰の名物なり。

○今切の海

此所後土御門院明應八年六月十日の夜大地震して、北の大山崩れて二十三丁の舟渡しとなりぬ。七つさがれば舟留也。

○御關所

御奉行
石川又四良殿

鐵炮女手形御改め也、南より北へ入江ふかし。

○荒井

右のかたの浦邊に御茶屋有、家毎に鰹のたゝき賣ける、此所の名物也。町はづれ獵師のすみし片濱にして、わすれ貝、子安貝、うつせ櫻貝、さま〴〵目なれぬ貝づくし、浦の童の賣ける。

○千年山

むかし螺の貝飛出し跡とて、右のかたに谷崩て見えし。此下に白洲有、爰ぞ橋は絶ても、風わたる濱名のはしの夕汐にさゝれて上る蜑のすて舟

○濱名橋

是迄も人に馴ぬる契かな濱名の浦の袖の汐風

橋本といふも名斗殘りて、いまは荒れたる野邊となりぬ、右の方の山中に湖あり。

○高師山

高し山花だに宿ををしまずば只越殘せけふの夕暮

白浪の高師の山の桀より眞砂吹まき浦風ぞ吹く

○白須賀

○白菅湊

松陰の入海掛て白すげの湊吹越秋のしほ風

吹送る風のたよりも白菅の湊別れて出づる舟人

○汐見坂

此所北は山つゞき南のかたは海にして、景色おもしろし。富士見えわたれば、富士見坂ともいへり。浦づたひに勢孫の鳥羽への舟わたる有。

○猿馬里

此山里に柏餅とて木の葉につゝみて旅人に賣りける。

○境橋

是は遠江三河のさかひ川なり。人皇四十一代持統天皇參河國行幸ありしとしるせる史書に菅野の眞道が爰をしるせり、又右の山陰に高さはかり難き岩有。

○二川

柄澤といふ所を過て、松原の中にて、ひだりのかたへ道有て、岩穴の陰に觀音を切付て、弘法大師御作と申傳へし。殊勝なる所也。

○大岩村　○小岩村

右の山つゞきに、燧坂といへる所有、此谷陰よりひうちいし出ける。同じ高根ならびに風景おもしろく詠めにあかぬ所有。

○石蒔山　○山中橋

此松の陰ひだりのかた町、近年の茶屋、饂飩そば切の上手なるところなり。

○吉田

右のかたの山城町屋舟つきなれば、諸商人入込し所なり。

小笠原市正殿城下

○長橋

百二十五間有、是より伊勢の白子にかよふ舟つきなり。右のかたの遠山に、花は絶ても名は、

○花園山　○荒野崎　○然菅渡

行人も立にわづらふ然菅の渡や旅の泊成らん

○二村山

ともし〔○し脱〕て今宵も明けぬ玉匣二村山の岑の横雲

五月闇二村山の時鳥みねつゞき鳴聲を聞哉

三日井の郷、小坂井の里より東の山は笹谷といへる所有。

○鳳來寺　寺領七百四十石

此煙岸山は昔日理修仙人の住家なりしが、藥師如來の立せ給ひ今佛法のれいちとなれり。此桦里はんじやうなる所也。

石田の里をすぎて、左右村〳〵と並松年ふりし、海道を行に、ひがしの山陰に祇園のやしろ立せ給ふ、本生寺といへるも、此岑つゞきなり。それよりすこし北の山添に、大雲寺といふ有。

○御油

此宿はむかしの名殘とて、風流人留女見えける。まへ〳〵は夕暮の出立姿、都の時花袖をうつし、紅うらを戀風に吹かへして、かゝる所にはやさしく、三筋の糸に色ふくまて引掛〳〵、旅人の夢をさませし。又右のかたに松の並木ありて、外道見ゆる。

○本坂道

ひだりのかたに松二本すぐれて見えしはへ山有。爰を竹庄とて、ふる城のあとなり。

○赤坂

此宿は東海道第一の遊興の所。たはふれ女の數〳〵ありしが、今は昔の形もなく淋しくなりぬ。此里に一夜酒名物也。左右の山のすがた、女松それ〳〵に枝ふりて、詠めつゞけておもしろき所〳〵。

○長澤

爰にお茶屋有。是より松陰をすぎてひだりのかたに、

○法藏寺　寺領八十三石

東照權現いとけなくおはしましける御時、御手習あそばしけるとや。此淨土寺の門前の里にわらんじの名をとれり、飛脚のもの五日路はくといへり。里〳〵すぎてひだりのかたに茂りたる山の中に天王のやしろ立せ給ふ。

○藤川

是より岡の郷、佐宇田の郷を過て、左のかたに西尾の城下への道有。右のかたに御茶屋あり。此道筋の里〳〵に苧細工の早繩貫ざしの上手ありし。

○大平川

淺瀨なれども落水はやし、橋は四十二間にしてわたしける。陰の郷こして小川有。是よりも西のかた岡崎の領分也。

ひだりのかたの濱邊に星野といふ所有。昔日三河の水を都にあげて、帝の御鬢水といふ說有。右の方に、

○宮地山

君があたり雲井に見つゝ宮地山打越行ん道もしらなくに

水野右衞門殿城下

○岡崎

城は左のかたに有。町作り都めきて、萬の商人爰に集る。むかしは此宿に遊女あつて獅子踊の岡崎ぶしを爰よりうたひ初めし。町はづれ松葉川、此上に、

○豐河

狩人の矢はぎに今宵泊なば明日や渡らん豐川の浪

○矢矧里

長居せそ心していよ梓弓やはぎの川の鷺一むら

貳百八間の長橋有。抑〳〵矢はぎと名付る事、日本武の尊東夷をほろぼし給ふ時、爰にて矢をつくらせ給ふと也。又建武年中に、足利尊氏合戰ありし所あり。右のかたむら藪の中に長者屋敷、淨瑠璃御前のむかしを今に殘しぬ。

○御影堂

是よりうとふ坂、尾崎、今村の茶屋、西田を過て、左の方の浦邊に、老津島、童子の浦有。右の細道行ば、

○八橋の里

五月雨は原野の澤に水越ていづれ三川の沼の八橋

駒留てしばしはゆかじ八橋の蜘手に白きけさのあわ雪

八橋山無量寺の觀音は淸和天皇年中に、在原の業平の作といへり。杜若の澤にて唐衣の歌讀しも爰也。

○池鯉鮒

宿中にお茶有。左のかたに苅屋、稻垣、信濃守殿城下有。右の山下に狹奈崎大明神の社有。毎年四月に馬市立て、芝居もの傾城爰に集る。芦の屋の里を過、右のかたの岡山つゞきに、

○衣の里

夕暮は梢の風の音づれて衣の里に秋をしる哉

○芋川

此所はかくれもなき髭男饂飩そばきり上手なる里也。

○今岡里

此所三河尾張の境ばしとて、まん中より木と土にてわたせり。天龍の宮、穴生村六月朔日新米有。

○鳴海

此所に鶴重氏家小刀剃刀の上手也。

鳴海がた鹽せの波にいそぐらし浦の濱路に掛る旅人

古里にかはらさりけり鈴虫のなるみの野べの夕暮の聲

○夜寒里

袖かはす人もなき身をいかにせん夜さむの里に嵐吹也

○松風の里

松風の里にむれゐるまな鶴の千年かさぬる心地社すれ

仙人塚星崎を濱邊に見て、

○喚續濱

鳴海がた夕浪千鳥立歸り友よびつぎの濱に鳴なり

○笠寺

轉輪山龍福寺の觀音は八劔の神作、立像にして笠をめして、拜まれ給ふ、三十三年目の開帳有。

○中島橋　○田畠橋　○刀部村

○山崎ばし

是より右に名古屋の城見ゆる。

○宮

町の入口左のかたに三途川の姥有。濱邊迄民家つゞきて御茶有。町中に玄太輔の宮。北の大森の中に、

○熱田社

此御神は村雲の劔を納め、景行天皇四十九年に勸請、是日本武の尊の御垂跡也。西の御門の脇に蓬萊山有、龜の形に松村立たり。又宮中にひとつの石塔有、其長貳尺あまり、是揚貴妃の驗となん。

○船番所

七つかぎりに船留、日和次第に佐屋の里へまはる也。津島の祇園見沼の内海ちかし七里の横渡し、左は大海、右新田鍋田越。

○桑名

左のかたの海を請て城有、右に舟番所、是よりつゞき樫木挽物出る。此浦の蛤、鰐しろ魚名物也。

松平越中守殿城下

昔日清見原の天皇御位につき給ふに、大伴の玉子むほんに吉野より此所に行幸あつて、爰にて軍兵催し、美濃國不破の關の合戰に御運ひらかせ給ふと也。其後聖武天皇の御時藤原の廣繼むほんに、是も此桑名の浦に御幸ありし舊跡也。ひがしは皆伊勢の海、北のかたはみのゝ山〳〵見えける、ひだりのかたの浦邊はるかに長島見ゆる、松平土佐守殿住所なり。宿はづれより、若松の長繩手をすぎて矢田のかた町、大福村、やなか村をこして、

○町屋川

小橋有、大橋は百六十間の土はし也。繩生村、あふせ村、かき村を行て濱邊はるに玉垣の里有、久しき名所也。

○日永の里

町つゞきの海道なり。右のかたに高田の門徒寺有。

○星川　○朝氣の里

桑名よりくはで來れば星川の朝氣の〔○里脫カ〕は日永なりけり

是より里〳〵をすぎて、右のかたに美濃の大垣の城見ゆる、程ちかし。

○富田の里

町作の所を越て、ひだりのかたにもちふくの村、ばつの村、此所に八幡のやしろ立せ給ふはづ川

土橋五十九間有。見立川是もはしかゝれり。

○四日市

此所より桑名に乗行舟あり、しけたる日和にのるまじき海也。右のかたに御殿有。此町不斷人立のしげき物かしましき宿、出はなれて濱田の里、赤堀村をゆきて、右のかたの松ばやしのうちに天照太神宮やしろ立せ給ふ。ひなの村是にも宮所ありける。

○追分

是よりひだりに伊勢道あり、右かた本海道也。尾古曾むらをすぎて、うねめ町に砂川ありて、五十間の橋を掛し。

○杖突の里

此町はづれに、すこしなれども、けはしきのぼり道有。馬も難義の所、旅人も杖なしには草臥るとて、杖つきの坂といへり。爰饅頭の名とりし、景色よく休所也。

○小谷村　○大谷村

是も茶屋あり。山中なる程平道にして、松陰より左右を見晴し、何となくおもしろき所ながら名所はなし。

○鞠が原

ひだりかた松林のうちに御茶屋有。是より里〳〵を越て、

○藥師

宿の左の森のうちに御殿あり。右のかた坂の下に藥師堂有、如來は昔日越の大德泰澄法師諸國修行の時、いまだ此所は山中にて、民家もなかりき。杳なる洞に光明のかゞやきしをたづね行て見給ふに、菊面石也。そのめぐりに十二の守護神立せ給ふ。爰ぞ佛の住所なりと則此石を刻み、藥師如來となし給へり。それより一里出來て、石藥師とはいひならはせり。うきな町、砂川をわたり過て、

○庄野

此宿の名物にやき米の俵をうつくしげにわらをすぐりて青き苧にして細かに編みける、そのなりはりうごのごとし、童子のもてあそびになる物也。

○泉の里

大川有、七十間のかけはし。此里の左のかたへ道筋白子、若松に行、小田村すぎて林の中に、

○開善寺

爰につゞきて川合村、十三間の道橋有。和田の村行て松原に新町、右のかた家つゞきにしてきれいなる茶屋有。

板倉隱岐守殿城下

○龜山

町のかたに城有、右に野尻見ゆる。左の方は關の入口迄岸根つゞきの砂川の流れ清し。落葉里、むら緒の町村を過て、右のかたの岩山に出羽の國にありしを爰に移しぬ。

○羽黑山

是より里もなく、右は高根つゞき、不斷に嵐はげしき所、爰を大東風繩手といへり、近江路の山見えし。

○伊吹山

あふ事はいつといふきの岑におふるさしも絶せぬ思成けり

玉かつら伊吹の山の秋の露誰が面影を松むしの鳴

關のひがしかたに追分有、是より南の方伊勢海道なり。

○關

此宿火繩名物也、町のひだりのかたに地藏堂有。

○寶藏寺

此寺は傳教大師の草創也。文應年中に炎上して、文永四年に小堂立ける。其後紫野一休和尙爰に來て狂歌など讀給ふ事も有。是よりやま〳〵を詠め行に、左の方に伊賀の海道あり。又古城の跡として、松も年ふりし山有。右のかたに、

○岩振山

爰の山の形都ちかくなき事を、見し人毎に是を惜みぬ。岩つゞじひとしほ也。里人の申つたへて、筆捨山ともいへり。

それよ　一の瀨の里をすぎて、山川の細き流れひだりのかたにわたり、右に替り行。あるひは又棚橋を越てさま〳〵に道有。

○鈴鹿川

すゞか川八十瀨の浪を分過て片敷物はいせの濱荻

鈴鹿川明かた近き天の戸をふり出て鳴時鳥哉

○沓掛村　○新茶屋

此所は四季にかぎらず日請の山の野老ありし。

○坂の下

此宿むかしは坂の上に有けるが、大雨に崩て後爰に替りぬ。町の中に橋ふたつ有、山水音高し。是より次第あがりにして岩の陰道おそろしき高山也。

○鈴鹿山

さゞ過ぬ是や鈴鹿の關ならんふり捨がたき花の蔭哉

長世のためしにひかんすゞか川越ていつきのわたらへのしめ

○同宮

當社は天武天皇大伴の王子におびやかされ、吉野より伊勢に移り給ひしに、鈴鹿の翁天皇を大神宮へおくり奉り、策ごとをめぐらし、軍に勝せ給ふ、其翁の社といへり。

○梧杓橋

鈴鹿山きりの古木の丸木橋是もや琴のねにかよふらん

峠にむかしは關有、光仁天皇三月十六日此關の太鼓おのづからに鳴事有。

醍醐天皇延喜六年に、此山の盜人十六人うたせ給ふ事有。伊勢近江の境野、左に三つ子有、湯の鼻の里、

○澤江　○木下　○鼈坂

むかし此谷に五尺あまり龍住て人をなやましけるを、會解僧是をむなしくなして、塚をつき、しるしに松二本植置し。名物の丸飴有、山道すぎて石川の淺瀬をわたる。

○田村宮

右のかたの森ふかく、大明神立せたまふ。是より石道つゞきて、

○白川橋　○生野

此所に茶屋あり。爰を過て宿の入口に櫛屋あまた見えける、是を土山くしと世間にもてはやしぬ。旅人に賣にもかけねなし。又うどんそば切の上手也

○土山

外の白川橋を渡りて右の田村明神のやしろ爰にも有。それより里〳〵つゞきぬ。

○松尾村　○舞野村　○岩室村　○市場村　○德原村

○大野村　○今宿村　○伊奈川　○さゝ村

○新庄村

右のかたに清水有、丸山とて松しげりし、是は城あとといへり。

○水口　　加藤孫太良殿居住

宿のひがしを作坂といふ也、此所に柳の籠裏つゞら、笠、萬の藤細工人有、櫻屋煙管有、旅籠屋に不斷鮨汁有、町筋二つに分り、右のかたに觀音堂有。

○大岡寺

是は甲賀三郎をつくり籠しといへり。町はづれ右かたに八幡宮有、馬場崎、小脇村、泉村をすぎて、

○横田川

是より左のかたはるに高根有。

○信樂山

都だに雪降ぬればしからきの眞木の杣山跡絶ぬらん

鳴神の音も杳に信樂や外山をめぐる夕立の空

田川といへる茶屋を過て、三雲村、よし中村、なづみ村、はり村、平松村、糀袋をすぎて左のかた西に澤山の城有。

○石部

町を出て手孕の里、左のかた笠松の陰に稲荷の社有。勾の里、川頻の里、木の村の出はなれに川づらの池有しが、今は沼となりぬ。

○梅の木

此所に和中さんとて賣藥有。右の杳に名所の山つゞき也。

○鳥籠山

つまこふる鹿ぞ鳴なる獨寢の床の山風身にや入らん

あだにちる露の枕にふし詫て鶏鳴なり床の山かぜ

○櫻山

櫻さくさくらの山の櫻花さく櫻あれば散る櫻あり

三上なる櫻の山の花盛散るといふことは嵐とぞ思ふ

○三上山

杳なる三上の山を目に懸て幾瀬渡りぬやすの川波

ちはやふるみかみの山の柳葉は榮ぞ增る万代までに

三上の明神は元年天皇養老年中に天くだり給ふ、是日本第二の忌火也。太袋村、めかは村、岡村、新屋敷を過て、

○草津

辻より右のかた美濃海道なり。

○守山

鳴蟬の泪しられてもる山の茂みに落る木々の夕露

靑つゞらしげき人目をもる山の下に通はぬ道ぞくるしき

是より北につゞきて見えし。

○鏡山

かゞみ山曇らぬ秋の月なれば光をみがくしがの浦波

花の色を移しとゞめよ鏡山春より後も影や見ゆると

草津川宿の右に明神有。此里に道中馬の道具鞭蹄拂ひ有。

○矢藏

爰に餅屋あり、是を姥が餅とて名物也。山田やはしの渡しへの追分なり。左のかたに蘆浦の觀音寺、右のかた野路篠原を越ぬ。田の中に月の輪の池といふ有。湖を右のかたに詠め行。

○勢田橋

湖や霞てくるゝ春の日に渡るも遠し勢田の長橋

御調物絶ず備ふる東路に勢田の長橋音もとゞろに

此橋九十六間後宇多院弘安年中に恩性律師是を造る。沖杳に竹生島、白髭の神をかきれ給ふ。浦つづきて、

○眞野入江

唐崎や長柄の山にあらねどもをさゞ波まのゝ秋風

○堅田浦

心引かひこそなけれあふ事はかたゝの浦の網の浮棚

此浮御堂は惠心僧都の御作千體佛也、

○比良山

櫻ちるひらの山風吹まゝに花に成行しがの浦波

○志賀浦

見せばやなしがの唐崎麓なる長柄の山の春のけしきを

○比叡山　寺領五千石

あきらけく後の佛の御世までも光傳へよ法の灯

此延暦寺は桓武天皇七年御草創一乘止觀院と名付、傳教大師開山。

○日吉社

我頼む日よしの影は奥山の柴の戸までもさゝざらめやは

勢田の橋に龍神の宮有。小橋を渡り、

○石山寺　寺領五百七十九石

郡にも人や待つらん石山の岑に籠れる秋の夜の月

當時は孝謙天皇勝寶六年に御草創、其後聖武帝の御宇に、良辨上人丈六の觀世音の像を作りて籠め給。ふ又上東門院の御時、紫式部此寺に籠、名月の湖に移るを見て、水想觀を成就し、自然智を得

て物語を作れり。今に源氏の間とてむかしを殘せり。此女の御影も有し。螢の洞とて、此邊の岸にあつまるは、餘所より光り增て大き也。鳥井川村を過て、松原の田の中に今井四良兼平が塚有。

○聽所　本田下總守殿城下

右に八幡宮有、新羅明神の社有、是は三井寺の鎭守也。中庄村田畑の宮有。

○粟津原

關越てあはつの森のあはずとも淸水に見えし影な忘そ

番馬村、もろこ川を渡り、左の家のうらに、木曾義仲の塚印に、柿の木を植し、松本につき廳師町を過て、

○大津

晉羽山深き霞を分け入れば大津の宮に春の花園

鮒名物萬の商物第一の津也。

○三井寺　寺領四千八百石

詠むれば心の底ぞ淸みまさる三井の淸水にうつる月影

此園城寺は天智天武持統三帝の御願寺にして、敎待和尙の建立也。

○相板〔○坂〕山

君が代にあふ坂山の岩淸水木がくれたりと思ひける哉

此關は文德天皇天安元年四月に始る、明神は蟬丸をいはへり。醍醐天皇延喜五年に、又小野小町は仁明天皇承和の比爰に死す。大谷に針屋浮世繪書有。京伏見道分

○觀修寺　寺領五百石

醍醐天皇御願所開山濟高大僧正、此所に茶屋軒をならべ、淸水を改めて都近くのしるし也。左に月なしの池もちかし。

○粟柄小町

くるす野の氷室の氷いつまでかむすぼほれつゝとけじとすらん

大觀谷とて山道のおそろしき所也。

○藤の森　社領貳百石

深草は名のみ成けり藤の森春を掛てぞ花は咲ける

此社は稱德天皇神護景雲造宮、是早良親王の垂跡也。是より右は京海道深草稻荷山見えわたる。夕されば野邊の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里

いなり山杉立ならぶ下晴て卯花月夜道もさやけし

竹田の里も右に見えし。鐘木町遊女の住家、左の方宇治への道杳に見ゆる。

○木幡山

遠からぬ伏見の里の關守は木幡の岑に君ぞすゑける

○大和田里

黄檗山万福寺は新院明暦元年に建立、開山隱元、寺領四百五十石。

○宇治里

朝戸明て伏見の里に詠むれば霞にむせぶうぢの川波

○醍醐山　寺領四千石

醍醐朱雀　村上三代の御願寺也、開山聖　寶僧正延長四年十月十九日に供養。

○御香宮　社領三百石

當社は神功皇后の御廟也。

○伏見里

夢通ふ道さへ絶えぬくれ竹の伏見の里の〔○雪脫カ〕の下をれ

此里は舟つきにして旅人絶えぬ所也。葛籠、吹矢、茶筅、竹箒、桃名物、又川中の蘆島、舟路の右を淀堤といへり。

○楊枝島

淀野なるやうしが島の夕千鳥己か翅をせゝり鳴なり

○淀

五月雨に岸の柳の枝ひぢて梢をわたる淀の川舟

○羽束師森

家風吹かぬものゆゑはづかしの森の言の葉散らしはてつる

小橋のむかひ水垂の明神の森をいふ。爰に水の落合名物の淀鯉水車有。川岸の舟入詠めつづけて、左に大橋掛し。

○美豆野

雲雀立みづの上野を詠むれば霞なかるゝ淀の川なみ

○八幡山　社領六千七百五十七石

やはた山松蔭涼し岩清水夏をせきてや跡をたれみん

應神天皇也。仲哀天皇第四の御子、御母は神功皇后也。欽明天皇三十一年始て豐前の國宇佐に鎮座、清和天皇貞觀元年八月廿三日に此所へ移し奉る。

○橋本　○狐川　○金川

爰山城河内の國境也。北に愛宕山見えし。

○山崎　○關戸院　○財寺

聖武天皇の御願寺也。山陰に一夜庵とて、宗鑑法師の住し跡有。利休茶湯せられし寺有。木食の寺あり。此里ともし油の名物也。

○水無瀬宮　寺領五百石

春の色をいく萬代かみなせ川霞の洞の苔の通路

惟高親王御所也。土御門院明應年〔○中脱カ〕に御建立、此里に水無瀬殿居住有。是は川筋の北也。南に葛葉の里、茶屋有。松ばやしの中に道心の屋敷跡有。

○渚森

世の中に絶て櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

○禁野　○交野

又や見んかたのゝ御野の櫻狩花の雪ちる春の曙

桓武天皇延暦二年御狩有。

○天野川　○星田山

是や此空にはあらぬ銀川かた野行は渡る舟橋

○枚方

此所舟改の番所山に御茶屋有。北に、

○高槻

○芥川

花も又散ぬるはてはあくた川かへらぬ波に春ぞ暮ぬる

爰につゞきて伊勢寺、是は歌人いせが出し所也。古曾部は能因法師の住ける所。

○金龍寺　寺領三十石

山寺の春の夕暮きて見れば入相の鐘に花ぞ散ける

村上天皇應和二年三井千觀上人開山。

○三島江

みしま江の芦のかりねの短夜にきくも程なき時鳥かな

此濱も昔は遊女あり。爰につゞきて江口の里。

○玉江

玉江にやけふのあやめを引つらんみがける宿のつまと見ゆるは

○佐太宮

左のかたに天神立給ふ。芍藥の名花有。堤つゞきに森口の里、此所に大根の細漬名物也。今市村、

並木の栴檀有。

○平田村

舟番所有。北杳に勝尾寺、箕面山、池田の臭服の高松見ゆる、曝の里、賤の手業に布ほすは雪のごとし。

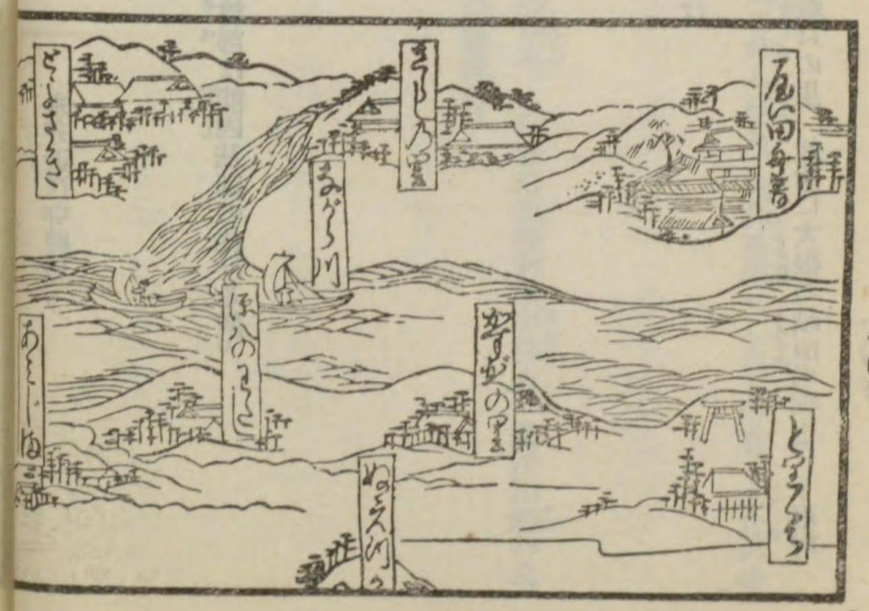
○長柄川

難波なるながらの橋もつくるなり今は我手を何にたとへん

此橋嵯峨の天皇弘仁三年六月に造。川の南に萍上の里、此所に鵲塚有。是は近衛院仁平三年四月に源三位頼政射落し、淀川に流れ、爰に留まる。源八の舟渡し、網島網を打名人有。

○天満豐崎

松村立し森有。是は孝德天皇大化元年に都此所に移しぬ。古跡也。



○大坂　御城代松平因幡守殿

東に松の木間の朝日の影もしづかに移ひ、津都山の尾につゞきしゆゑに、尾崎ともいへり。なほ君が世はさゞれ石山の御城とも申侍る。

○玉造　栗岡山といへる名所也。

○大江岸　今八軒屋といふ、舟つきの上なり。

渡邊や大江のきしに泊りして雲ゐに見ゆる伊駒山哉

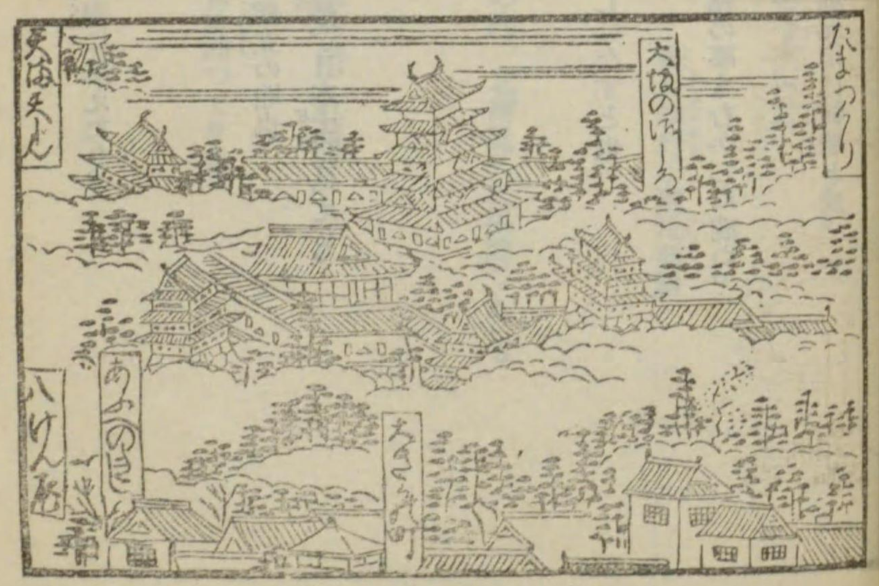
○渡邊　橋

今は橋絶えて名のみ殘れり。太平記二十五卷住吉合戰に楠正行が山名伊豆守を天神の森まで追つめしと見えたり。

○天滿天神

仁皇六十二代村上天皇の御宇天曆の年中に遷宮あり し所也。

○久保津宮　今の天神橋の濱に立せ給ふ。熊野へ



の王子也。樓の岸も爰也。

○難波橋　釋の行基是をかけ初められしと、元享釋書に見えたり。

○田簑嶋　今の北濱といふ所なり。

難波かた汐滿くらしあま衣たみのの島に田鶴鳴渡る

○大融寺森　仁王五十二代嵯峨の天皇弘仁十二年に建立の地也。

○堂島　人王百四代後土御門文明七年に此堂事合運圖、日本土記見えし。

○福島　雀鮨名物　○野田　白藤、名木

元暦二年二月十一日大將判官梶原逆櫓論。

○野里川　島村蟹名物。

○繩かけ橋　○傳法舟寺

今の西念寺也、昔高樓に灯を排げて入船の目じるしになすと也。

ふる寺にのりうかふなり夜もすがら辟帆に上てよみすます

○高津宮　仁王十七代仁德天王難波の三津の内也。都の事もむかしに成ぬ。

荒れにける高津の宮の時鳥誰に難波の事をかたらん

○生玉の森　社領三百石　赤土名物、後土御門院明應五年に社地と成。

○天王寺　○新清水　○茶臼山

仁王三拾二代用命天皇の御子聖德太子の御建立、寺領千三百石

世を照すちかひの海の入日こそ難波の三津の寺と成けれ

○川口御番所　御舟奉行小濱民部殿

○兎原住吉　○三軒屋　むかしは遊女有。

○一の洲　○上人川　○難波島

傳法二の水串の内、何風にも掛所よし、一の水串木の内、北南風には根浪つよし。

風荒き湊の沖の一のすにちかふ小舟ははや入にけり

○住吉　○勝間浦　○天下茶屋

人王十五代神功皇后三韓たいぢの時あらはれ出給ふ御神也、社領

音にのみ聞渡りつる住吉の松のちとせをけふ見つる哉

○敷津　○太刀造江　○細江　○榎津　○佐比江

○あられ松原　○安立町　○七胴の濱

さ夜更てあられ松原住吉の浦吹風に千鳥鳴なり

○堺の浦

おもひきやさかひの浦の櫻鯛あかぬかたみにけふや引らん

○尼が崎　○大物の浦　○淀の繼橋　○浦の初島　青山播磨守殿城下

○須佐入江　○甲山　○打出の濱

此浦つゞき地方あさく舟掛り惡し。

○有馬山　○武庫山　○芦屋の里

○鳴尾崎　北風に汐掛りよし其外は惡し。

けふこそは都のかたの山のはも見えずなるをの沖に出けん

○武庫山　○芦屋の里

霧晴て猪名野を行はむこの海月をぞみつる宿はなくして

○西の宮　○廣田社　○御前の沖

二柱の神の御子蛭兒と申せし、今戎とぞあがめける。北西穴師風に汐掛りよし。前の魚といふは此濱の鯛也。

○御影森　○雀の松原　○脇の濱

世にあらば又歸りこん津の國のみかげの松よおもがはりすな

○六甲山　富士より五番の高山也。

○生田　神功皇后の御時勸請、津の國の一の宮といへり。社領二百石、又梶原二度のかけのゑびらの梅殘れり。

○求塚　二人の男の塚も此邊にあり。

○夢野　淡路にかよふ鹿の、子細有。

○布引　○湊川　楠「○原本訓の脫カ」が塚あり。

天川是や流れの末ならん空より落つる布引の瀧

○川邊村　○二つ茶屋　○湊川

湊山とことはに吹く汐風に繪島の松に浪やかゝらん

○角松原　○須佐の入江　○淀の繼橋

五月雨に淀のつぎ橋中絶て浪の立るに君思ふ哉

○丹生の山田　○栗花落の宮　今に有。

○兵庫の津　○輪田の御崎

車舟わたのみ崎をかいめぐりうしまとかけて汐や引らん

○筑島　○福原の京

平家の大將清盛入道此島をつかれし時人柱に入し松保氏小傳が御影此濱の寺に今に有。

○清盛の石塔　濱の松陰に有。

此津は民家たちつゞきて物の自由なる所也。湯屋風呂屋もあり。むかしは遊女あつて舟がかりの旅人浪枕をかりし也。

是より難波の一の洲まで十里の海上也。

名物萬の磯魚風味各別也。此浦の眞砂作り庭の蒔ものによし。豆腐。

南に阿波の眉山はるかに見ゆる。

まゆのごと雲ゐに見ゆる阿波山を掛てこぐ舟泊り知らずも

○鐵拐の峰　兵庫よりすこし西のかたに高山有。

○刈藻川

里人の夕〳〵にかるも川螢のやどり替り行らん

○蓮の池　○駒が林　○まの〻池

すこし山よせのかたなる野原の松陰に、

○薩摩守忠度石塔有。

○鐘掛松

○一の谷　○二三の谷

○ひよとり越逆落し

源よしつね一戰の跡今にあり。

○平家内裏屋敷有。

○須磨の浦

須磨のあまの鹽燒煙風をいたみ思はぬかたに棚引にけり

白波は立よ衣にかさならず明石も須磨も己が浦〳〵

○須磨寺　眞言寺領十石

若木櫻、青葉の笛、あつもり御影有。

○松風村雨の石塔有。

○行平松　○鹽屋

すまの浦に燒鹽かまの煙こそ春にしられぬ霞成鳧

○島崎　○印南野

女郎花我に宿かせいなみの〻いなといふとも爰を過めや

いなみのや山もと遠くみわたせば尾花にまじる松の村立

○岩屋大明神　○盛俊が塚
○ゑいが島　○大藏谷

旅人のわけ行かたの八重霞大倉谷の春の夜の月

○人丸の社　社領四十石月照院（神主）

ほの〳〵と明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思

○朝貝寺

秋風に波や起らん夜もすがら明石の岡の月のあさかほ

○赤松石塔有。
○明石（あかし）

城主松平若狭守殿

大坂より是まで十五里の所なり。此浦の名物飯鮹（いいだこ）、縮布（ちゞみ）、是より南に岩屋ゑじまがいそ、須本（すもと）、由良（ゆら）見えわたる。

由良の戸を渡る舟人かぢをたえ行方もしらぬ戀の道哉

爰につゞきて西行法師が詠めし磯崎の松今に有、

○里の蜑

浦風になびき〔○に脫カ〕けりな里のあまの燒藻の煙心よわさに

○大鳴門　○小鳴門　○飛島

淡路がたせとの追風吹そひてやがて鳴門にかゝる舟人

世の中を渡りくらべて今ぞしる阿波の鳴門は浪風もなし

○高砂の里　相生の松　明神有。

いたづらに世にふる物と高砂の松も我をや友と見るらん

○尾上寺　○道盛の塚此海邊に有。
○ほこ川　○石地藏　○宇佐崎
○鞍掛島（くらかけ）　○上島　○たんかの大島

いづれも此南の沖に見ゆる。

○曾根（そね）の天神　名木の松有。
○空師（あなし）の里
○沖のなげ石
○姫路（ひめじ）の城主

本田中務大輔殿

大坂より二十五里有　此所より刀の新身うち出す也。是播磨身也。

○銛摩　此所にかちん染有。

戀をのみしかまの市に立民の絶ぬ思ひに身をやかへけん

○清水寺　○野中の清水も此邊也。

古への野中の清水ぬるけれど本の心をしる人ぞしる

○夢前川

朝嵐夢さき川の浪枕あかぬ別れの袖は濡れつゝ

○書寫山　天台圓教寺領九百石

一條院永延貳年に性空上人の建立。

○繪島　此沖に見ゆる。

はりまかた須磨の月よみ空さえてゑしまが崎に雪ふりにけり

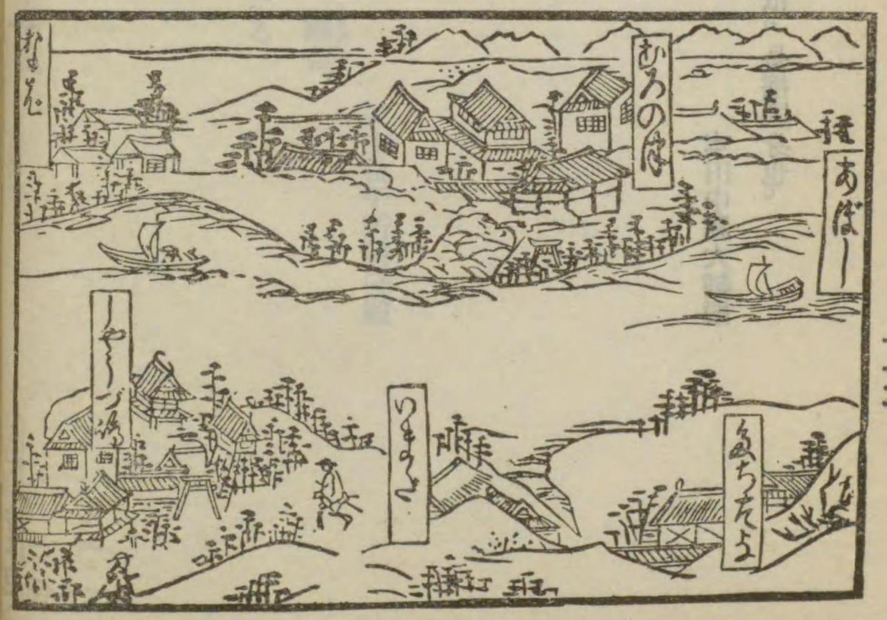
○宮浦　○眞浦

○家島　○高島　○あんげ島

此島々繪島につゞきたる所也。

○網干

民家の立つゞきたる津也。此南の沖に見ゆる。



○たち花の浦　○今田　○岡部

○小豆島　○室津　大湊也。

友さそふ室の泊の秋風に芦を帆にあげて出る舟人

○室の明神　○毛宇利の鼻　○中の唐子

○沖の唐子　○冷邊

○かつら島　○きしま

此室の入海は西國第一の舟かゝり、湯風呂あまた有。遊女町さかりて風義のよき所也。名物になめしの革細工人有。

○那波　○さごし

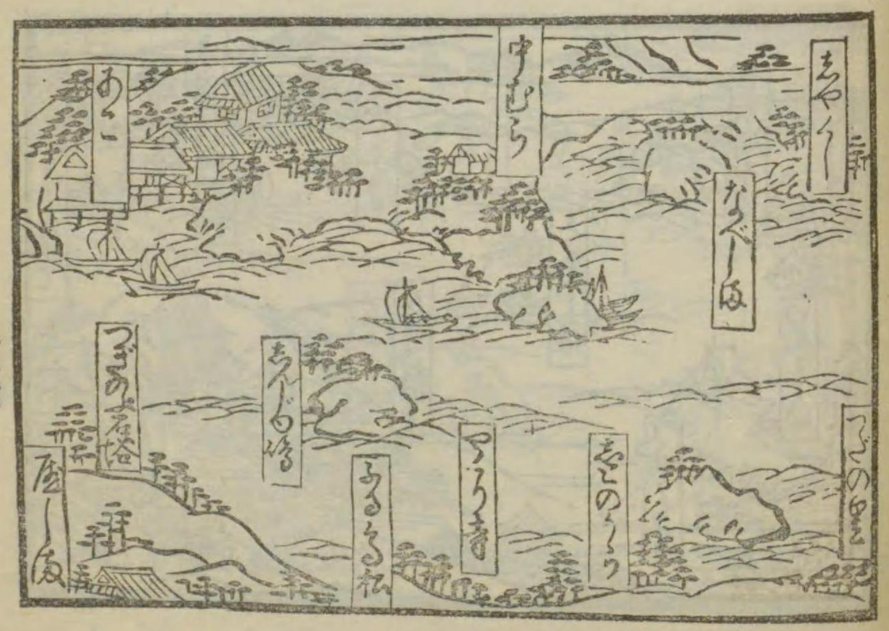
○鍋島

○沈み石　大坂より三十里有。

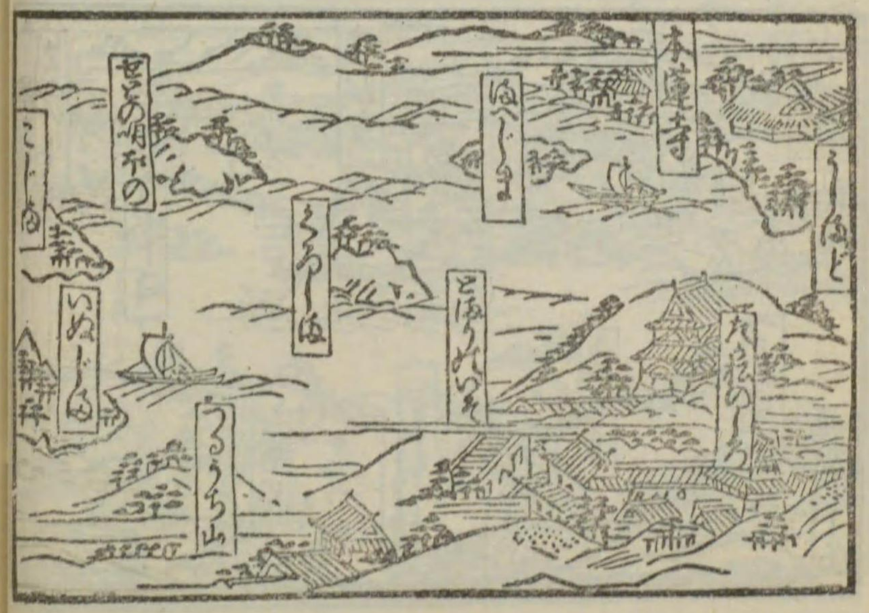
是より南の海上はるに讃岐のやしまの浦々見ゆる

○津田の里

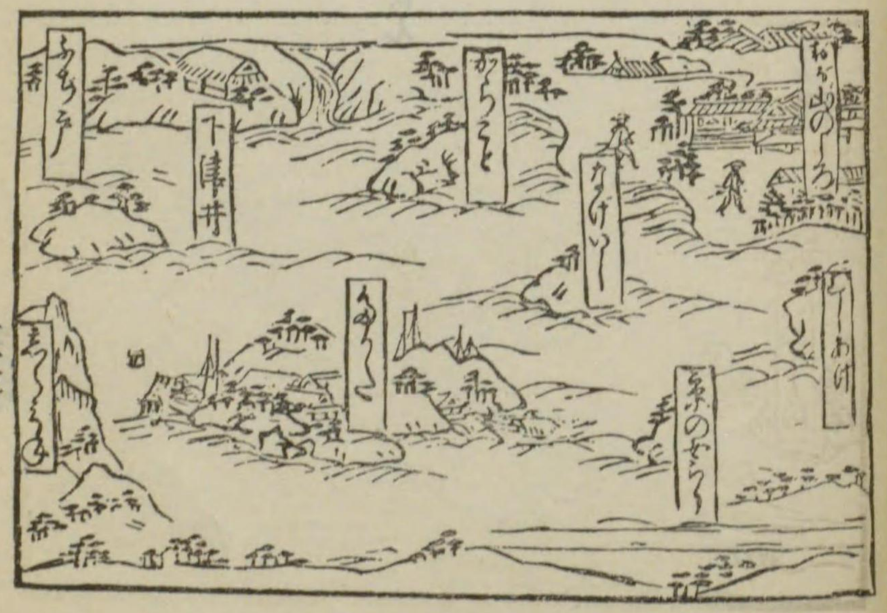
○志渡の島　○珠數島



○やくり寺　○古高松
○新珠島
房崎の浦といふも爰也。
○次信が石塔有。　○八しま
○那須與市馬立石有。
是より又北の海邊也。
○赤穗の御崎
移ひてあこの御崎の夕虹に山下近く五月雨のころ
○高山島　○中村　○取あげ島
○赤穗　城主淺野内匠頭殿
大坂より是まで三十一里有。
○鹽屋　燒鹽の名物也。
是より南の海邊に、
○高松の城主松平讃岐守殿
大坂より舟路四十八里の所也。



○泊の磯　○松が浦
松が浦のとまりの磯と聞物を名にもさはらず歸る浪哉
○女木島　○男木島
○ちふり島
○絃打山　○あや川
○牛窓　○木蓮寺
○前島　○小島
○くろしま
波〔○間脫カ〕より見ゆる小島の島がくれ行浦もなし君に別れて
○虫明の瀨戸
風あらき虫明の瀨戸の夕闇に友呼かはす夜半の舟人
○岡山の　城主松平伊豫守殿
大坂より是迄四十五里なり。此所の名物、海月、白魚、紫藻、あみさこ、底鮠、燒物。



○備前川
○金岡　○神崎
○つくえ　○片岡
○小串　○なけいし
○京の女良　○犬島
○唐琴の泊

波の音の今朝からことに聞ゆるは春のしらべやあらたまるらん
都までひゞき通へるから琴は浪のをすげて風ぞ引きける

此沖のかたに名所の島〳〵有。

○向ひ島　○寺島　○直島
○鹽俵　○大藺頼
○柏島　○蛇島
○包しま　○竹の子島
○高田

人家あつて舟がかりの所也。北の海邊備前の領内。

○藤戸　○下津井

佐々木三良盛綱先陣わたせし入海也。　○藤戸寺有、　名物苔。

○矢柄　○西の浦
○龜が島
○浮洲の岩　辨才天立せ給ふ。
○呼松　○引網の浦　○赤崎

南の海中に、

○白峯
○大槌島　○小槌島
○丸龜の城主京極備中守殿
○牛島　○鹽屋　○多度津
○前津　○金比良山

社領三百二十石別當金光院

○鹽飽　人家あつて舟がかりの所也。名物石海鼠。
○辨才天島

○出島　○小出島　○廣島
○白潟　○三角屋敷
弘法大師御誕生の所也。
○いや谷
○屏風が浦　○箱の御崎
○觀音寺
是より北備後の海邊つゞき。
○宮浦
○帆面島　○無口島
○水島　○ひしやく島
○眞鍋島　○布殘島
○白石しま
○福山の城主水野美作守殿
大坂より五十里也、名物莨菪、素麺。
○みのしま　○全盛島　○はしり島

姫が濱　讃岐伊豫の堺也。
沖津浪に沈もやらず戀島のはるかにへだつ姫が濱哉
○ちこか島　○戀島
○川の江の城跡
○三島の社
○をび島　○はかま
○うし島　○黑島
○氷見
北の海邊は備後路也。
○鞆の津
○室野の浦　昔日はたはれ女有し所。
旅ねして月斗こそ鞆の浦磯の室野に明ぬ此夜は
○密語の橋　磯邊の里はづれに有。
熊野なる音なし川に渡さばやさゞやきの橋忍び〳〵に
○風早の浦　風早の濱伊豫に有。

磯の松寢覺の秋をつげ越てよの所より風早のうら

○あぶとの觀音　海中に立せ給ふ。

○野戸原　○草深　○和布苅瀨戸

是より又南の海邊伊豫路。

○西條の城松平左京太夫殿

○國分山　○拜仕

○今治の城主松平駿河守殿

○むじま　○くるしま

○宮崎　○新町

○菊間　○濱村　○原

○淺海　○有明濱

世の中に有明のはまも有物を人の心の闇となしける

○いと崎　○庭島

○瀨渡田　○山伏の瀨戸

○岩本　○犬が瀨

○大ば島　○湯下

○三原の城松平安藝守殿領

名物酒。

○尾の道

名物燒物。

○三島の社

○鼻ぐりの瀨戸

此わたり汐のさし引はやく難所なり。

○十八女島

○形見の瀨渡　○岡村

○土井島のせと

○かしは島　○唐舟島

○大浦　○向ひ浦

○向ひかまがり

○宮森　○田戸

○淺黄の瀨渡

ふる雪に嵐も白く詠めしが淺黄に替るせとの夕浪

○かまがりの瀨渡

五月雨に磯の屋遠く捨小舟苅て朽なん蒲のうき草

○三瀨

○下島　○蒲苅島

○宮が崎　○北條

○風早の濱

うき雲の晴て行方は風はやの濱の夕月さえ渡る哉

○柳原　○堀江

○松山の城主松平隱岐守殿

名物平素麵、釣簾。

○湯桁

伊豫の湯のゆげたの數は左八つ右は九つ中は十六

○高濱　○三津

○伊與の高根

雲間なるいよの高ねの時鳥月より外に聞く人もなし

是より北の海邊也。

○和田の里　○野うじ

○瀨戸田

○横島　○觀音

○大島　○鐙しま

○上の瀨戸　○岡崎島

是より南の海伊豫路也。

○はま村　○長濱

○大洲の城主加藤遠江守殿

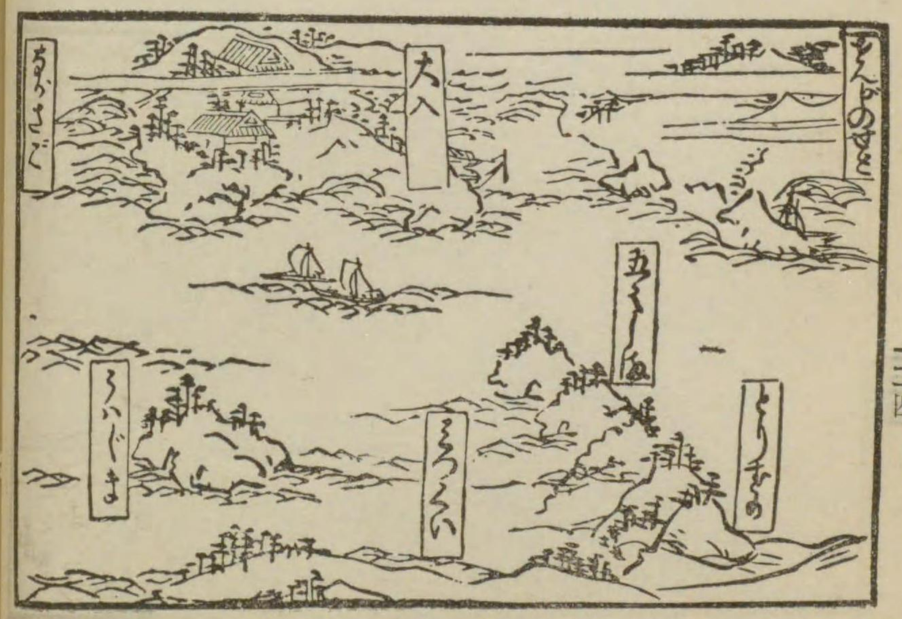
○由浦島　○羽崎

是より北の海ばた安藝の内。

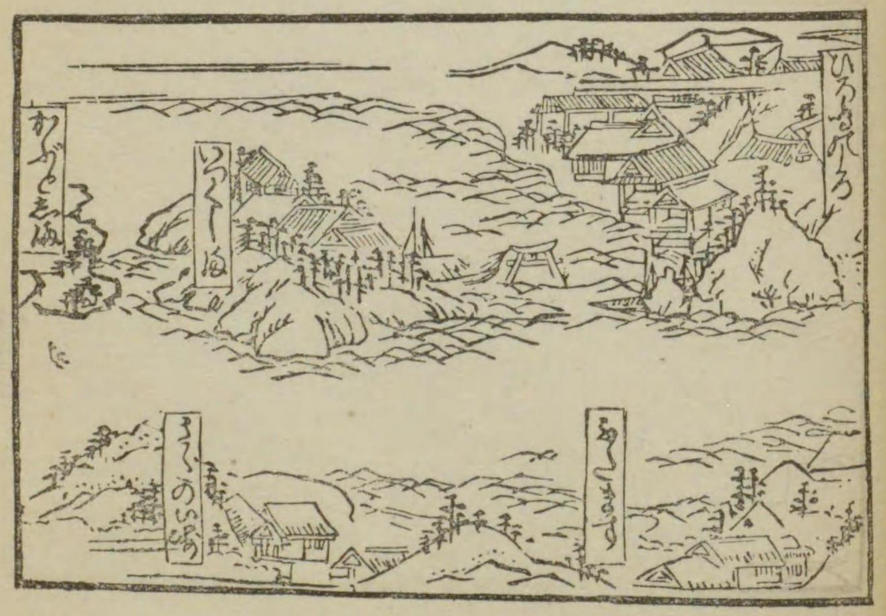
○吉松　○二瀨島

○横崎　○かしは島　○猫島

○三つ瀬　○ひろ
○せび　○かうら崎
○鳥のひら　○まちだ
○あかの里　○大入
○なかさこ　○いつきじま
○上くろ島　○下くろ島
○大なげ島　○こなげ島
○龜が首　○くらはし島
○おんどの瀬戸
○宮原　○大入
○長佐古　○吉浦
○大屋　○白濱
○江田島
○東能美　○西能美
○江波島　○片山島



○廣島城主松平安芸守殿
○草津　○井の口
○高洲島　○五日市　○廿日市
○嚴島明神
推古天皇三十二年にはじめて御殿建立。
此島大龍の形風景ならびなき所也。人家立つゞき、六月の市芝居の色〳〵爰に集る。
○遊女町有。
是より又南のかたの海邊也。
○鳥岡　○五五島　○三杭
○うはしま　○道島　○二桝
○佐田の御崎
是より北の海邊なり。
○地の御前　○大野　○黒川　○小方
○由見　○大竹



○甲島　是は安藝周防の堺也。
　是より周防のうち也。
○和木の浦　○婆束濱
○室木　○今津　○車村
○柳井

丸雪ふる今朝の嵐の吹落て柳井の底にくだく玉水

○庵田　○由宇　○八代島
○禿　○大萬の鼻
○すはな　○伊保の庄
○池野　○千把がたけ
○になひ　○あひの浦
○上の關　舟がゝりの濱也。
○長島　○よこしま
○をへふり　○いわうが島
○尾國　○小部　○佐賀

○曾根　○大渡の入口
○草紙島　○高島
○室住　○大野
○ゐにく濱　○麻江の島
○勝間浦　○大しま
○祝ひ島

詠めふる汀の松の風もなく君が千とせをいはふなるらん

○可良浦　○竈戸
　是より南のかたの海邊豐後。
○佐賀の關　舟がかりの湊也。
　關の權現立せ給ふ。
○鶴崎　○野津
　是より北のかたの海邊周防。
○室積

むろづみや竈を過る舟なれば物を思ふるこがれても行

○つげん　○光井
○島田　○淺江村　○水無瀨島
○東市　○宮の洲
○久多松　大煎海鼠の名物有。
○おし島山　○とをし
○相島　○がきど島
○かさど　○若浦
○火ぶりが鼻
○みとり島　○はうすい
○すどしま　○たる島
○泉水山　○浮野　○むし
○德山毛利日向守殿
是より南の海邊豐後也。
○府内の城主松平對馬守殿
○牛島　○ひぢ

○姫島
波枕おのづからなる姫島やつまなし衞何うらみなく
○北浦邊　○湯の嶽
ゆのたけや今も吹風袖さえて雪打拂ふ谷の卯の花
○とむく
是より北の海邊周防の內。
○三田尻松平長門守殿舟手屋敷
○天神の社　○田島
○小泊　○鯖島　○中野
○右田　○花田
○岩屋　○小部津
○丸屋の鼻　○あちづ
○ぎわ村
○床浪村　○こえ島
是より南の海邊豐後路也。

○竹田の城主中川佐渡守殿

名物大豆。

○おび村　○松久

是より北の海邊長門の内

○宇部　○かりや

○山本の鼻

○藤まがりの村

○道か鼻　○汐見村

○干珠島　○滿珠島

此ふたつの島は神軍の時海中になげさせ給ひ、汐の滿干のありける所也。沖のかたにまんじゆ島、汀にちかきは干珠島也。

是より南の海邊豐後。

○竹島

○木附の城主松平市正殿

○高田

○宇佐八幡宮　豐前の一宮也。

世の中のうさにも神もなき物を何祈るらん心づくしに

○中津の城主小笠原信濃守殿

○白山　○白根

○田の浦

○早戸茂明神　○門司村

毎年十二月三十日の夜半に社人海中はるかに入て和布を苅る。是を和布苅の神事といへり。

○内裏　平家此所を取立る。

○柳が浦

○左中將清經最期の所。

見わたせば柳が浦の櫻花爰も都の跡ふりにけり

○赤坂　○長島　○高濱

是よりや天の川原につゞくらん星かと見ゆる菊の高濱

○簑島

とよ國のみのしま山の時鳥かしらや雨にぬれて鳴らん

○柴津山
○笠結島

しはつ山打出て見ればかさゆひの島漕歸る棚無小舟

○小倉の城主小笠原遠江守殿

此所の名物櫛帶、同柄絲、さんぐはん飴、ちぢみ布。

○彦山

豐前豐後筑前三ヶ國根さし有大山なり。此所に七不思義大木有。根元は杉にして末はさま〴〵やどり木七色也。

刀鍛冶行平が父源正坊定秀此山住僧也。

是より北の海邊長門の内。

○長府の城主毛利甲斐守殿

○八幡宮　○あみだ石

○濱の八幡　○門司關　○赤間が關とも

旅人の心つくしの道なれや往來ゆるさぬ門司の關守

書絶てへだつる中と成にけり見し玉づさのもじの關守

硯切まへの細道はのくれて薄く書なすもじの玉づさ

此所硯石の名物也。

此關今の下の關なり。舟がゝりのよき大湊也。遊女ある所をば　いなり町といへり。

○阿彌陀寺

清盛の御影あり。此外平家の一門殘らず有。

○鷺の松

左中將清經詠めしと也。

○竹島村

○千珠島　○ひしま

○びく島　○小通り島

○今浦　○いかき

○沖のもつれ　○地のもつれ

○ひんぢの鼻

○間の島

○小友　○西間の島

是は長門の國の分。

又南の海はた筑前の内也。

○戸畑　○黒崎　石を燒く所也。

○若松町　○小石　○脇田

○岩屋

○御崎　○山家鹿

○小熊　○泉地

○當連寺　○芦屋　此所の名物釜。

○岡の湊

みづくきの岡の湊の浪の上に數書捨て歸る鴈金

○内浦の濱　○宗像

○秋月の城主黒田甲斐守殿

○白濱　○桂潟

神代に異國をしたがへ給ひて、かつら嶽といふ所にのぼり、かつ浦とのたまふより、勝浦といへり。

○身のうき濱　○宰府の天神

此安樂寺は醍醐天皇延喜十九年に建立。

○西の都　○木丸取

○朝倉山　○思ひ川

○染川

思川絶ず流るゝ水のあわのうたかた人にあはで消めや

染川をわたらん人のいかでかは色になるてふ事のなからん

○幸の橋　○三笠山　芦城山

○博多　名物ねり酒、遊女柳町に有。

○福岡の城主松平右衞門左殿

○鐘が崎

南都大佛の鐘此所の沖に沈む、海次良といふかね也。

○志嘉の島　○海の中道

しかのあまの釣にともせるいさり火のほのかに妹をみるよしも哉

秋風に汐干の月のかつらがた山にもつゞく海の中道

○野古の島　○唐泊　○袖の湊

から泊りのこの浦浪立ぬ日はあれども君を戀ぬ日はなし

○箱崎　八幡宮立せ給ふ。

幾世にか語りつたへん箱崎の松のちとせの一つならねば

此所に戒定惠の箱を埋ませ給ふしるしの松有。此國の一の宮なり。

○生の松原

祈りつゝ千代〔○を脱カ〕か　たる藤浪に生の松こそ思ひやらるれ

涼しさは生の松原増るとも そふる扇の風な忘れそ

○香椎潟

ちはやふるかしゐの宮の杉のはを二たびかざす我君ぞきみ

○三笠山

やさしくも我濡ぎぬをきつる哉三笠の山を人にかられて

○大島　○鰐島　○鼻黑

○しんくうじ　○そがはな

○あの島

○銘の濱　○今津

○西の浦　○玄界が島　大灘也。

○竈山

春はもえ秋はこがるゝかまど山霞も霧も煙とぞ成る

○中の御崎　○吉井

是より南西のかた筑後

○久留米の城主有馬中務大輔殿

○ぬれせぬ山　○高良山　○一夜川

其ままに後の世もしらず一夜川渡や何の夢路なるらん

○柳川の城主立花飛驒守殿

此所の名物海竹、女冠者、あげまき、是磯貝也。

○三池立花和泉守殿

此所の名物賀留多。

○住吉の宮　○榎の木津

有馬中務殿領内也。此所より久留米に行く船入。

○寺井　是より肥前の領内也。

此所より長崎へ乘舟有。四十八里又南のかたはるかに肥後。

○熊本の城主細川越中守殿

名物うねもん、すいせんじのり。

○鬼風山　○阿蘇の嶽　○裸島

肥後の國ことの内成裸島きれたる浪や衣なるらん

○宇土の長濱

ははかの御調此所より。

○八代城有。越中守殿持

此所の名物蜜柑。

是より肥前の内。

○蓮の池　明神の社有。

○龍藏寺の城主鍋島加賀守殿

○姫島　○羽島　○濱前

○高島　○からは島

○神集島

○玉島川

梅が香や先づ移るらんかげ清き玉島川の水のかゞみに

玉島や落くる鮎の川柳下葉より散る秋風ぞ吹く

たま島や川せの浪の音はして霞に浮む春の月影

○川上

柴舟の波の花かとしら玉の棒手折て誰に見すらん

川上や谷蔭深く見わたせば棒も同じ水の白玉

○雲仙が嶽

此所より硫黄出る。出湯有。

○島原の城主松平主殿頭殿

天草名物鑓の柄樫、砥石出る。

○伊佐葉井

○唐津の城主松平和泉守殿

○今萬利　此所より染付の燒物出る。

○そこはへ島
○間家　○妙見浦
○呼子の浦

夕ぐれて呼子の浦によぶ衞我聲ながら我も覺えず

○あ一町　○友高島
○名古屋　大湊也。つしまへも是より乘。
○わへさきの鼻
○かり屋　大湊なり。
○まんこう島　○二神島
○かつき島　○くろしま
○大島　○飯盛島
○九十九島
○松浦潟
名物いわし。

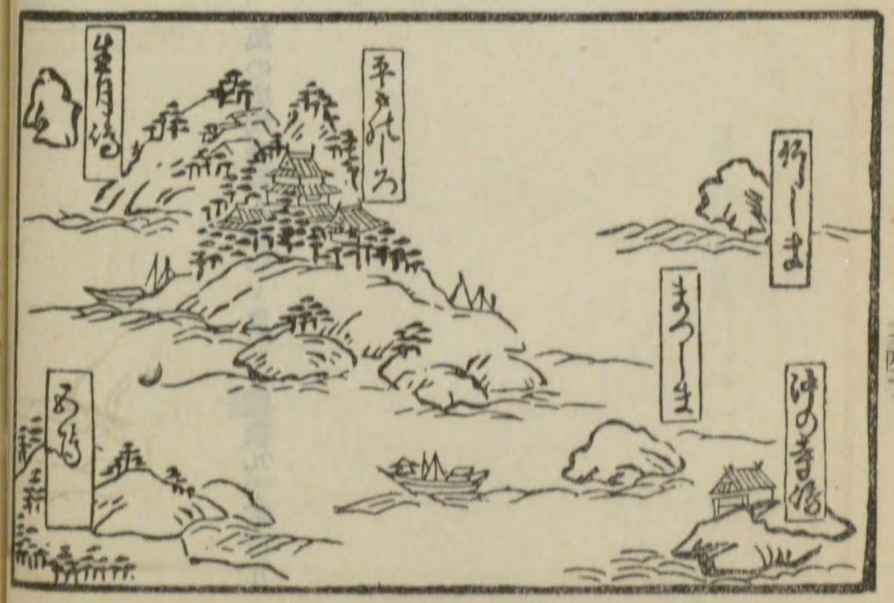
木の間よりひれふる袖を餘所に見ていかゞはすべき松らさよ姫

小夜更て堀江こぐ成松浦舟かぢ音高しみをはやみかも

あひ見んと思ふ心は松浦なる鏡の神や空にしるらん

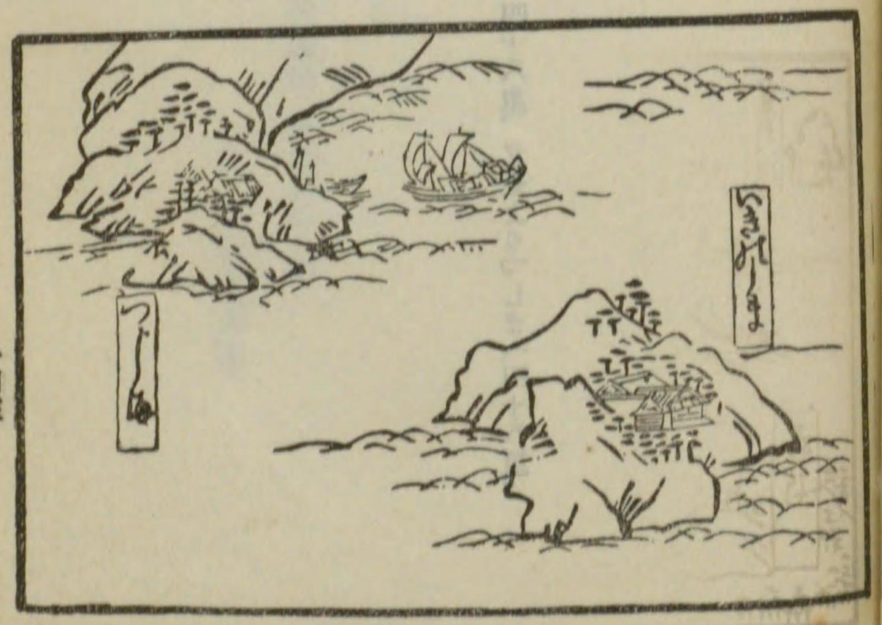
是まで肥前の北海也。
○長崎　大湊也。
此所は唐舟の入津にして、藥種、端物、糸鮫、伽羅、萬の唐物商賣人家つゞきて、竈數九千貳百九十三軒の所也。
○丸山　遊女町風俗よき所也。
○出島
阿蘭陀人を置せらるゝ所也。
○舟入左右番所。
松平右衞門佐殿
松平丹後守殿
是より唐國への海上。
○高麗迄　百四十四里
○南京迄　三百十五里　○琉玖迄　五百里

○高砂迄　五百四十里　○福州迄　五百四十里
○ちやぐちう迄　五百四十里
○ひよう迄　六百四十里　○天川迄　七百二十里
○河内迄　九百里　○ばるしなん迄　千里
○ろはん迄　千八十里　○東京迄　千四百二十里
○ちやんはん迄　千六百六拾里
○まろふか迄　千六百九十里
○かぼうちや迄　千七百貳拾里
○しやむ迄　貳千百五拾里　○はんたん迄　貳千十
里
○咬嚼吧迄　貳千百六拾里
○まかさる迄　四千百十里
○ゐんでいや迄　四千百四十里
○こは迄　四千百十里
○さんろれんば迄　五千貳百五拾里



○いすはんや迄　一萬千七百三十里
○いげれす迄　一萬貳千六百七十五里
○おらんだ迄　一万三千貳百里
○らうま迄　一万三千貳百三十里
右は日本道の積り也
○大村の城主大村因幡守殿
此所の名物鯨也。
○牛かしら　○蛤の瀬渡
○寺島　○小島
○かきふ島　○こだて島
○大だて島　○松島
○大瀬戸　○七つが瀬
○手くま　○きはん
○上の島　○ちごしま　○高鉾
○沖の寺島　○大崎　○竹島

一目玉鉾　巻四



此島〳〵長崎の西海也。

○平戸の城主松浦肥前守殿

○さきだ　○かつをしま　○黑嶋

○こすか　○河内浦

○ごくつん島　○高瀨島　○唐崎

○牛月島　○たての濱　○いちぶ

○五島　五島淡路守殿

此所の名物鯛。

○壹岐　人家有。筑前より四十八里、長崎より四十八里、又是よりつしまへ四十八里。

○對馬の城主宗對馬守殿

鷹、人參、龍門、朝鮮國より渡る。

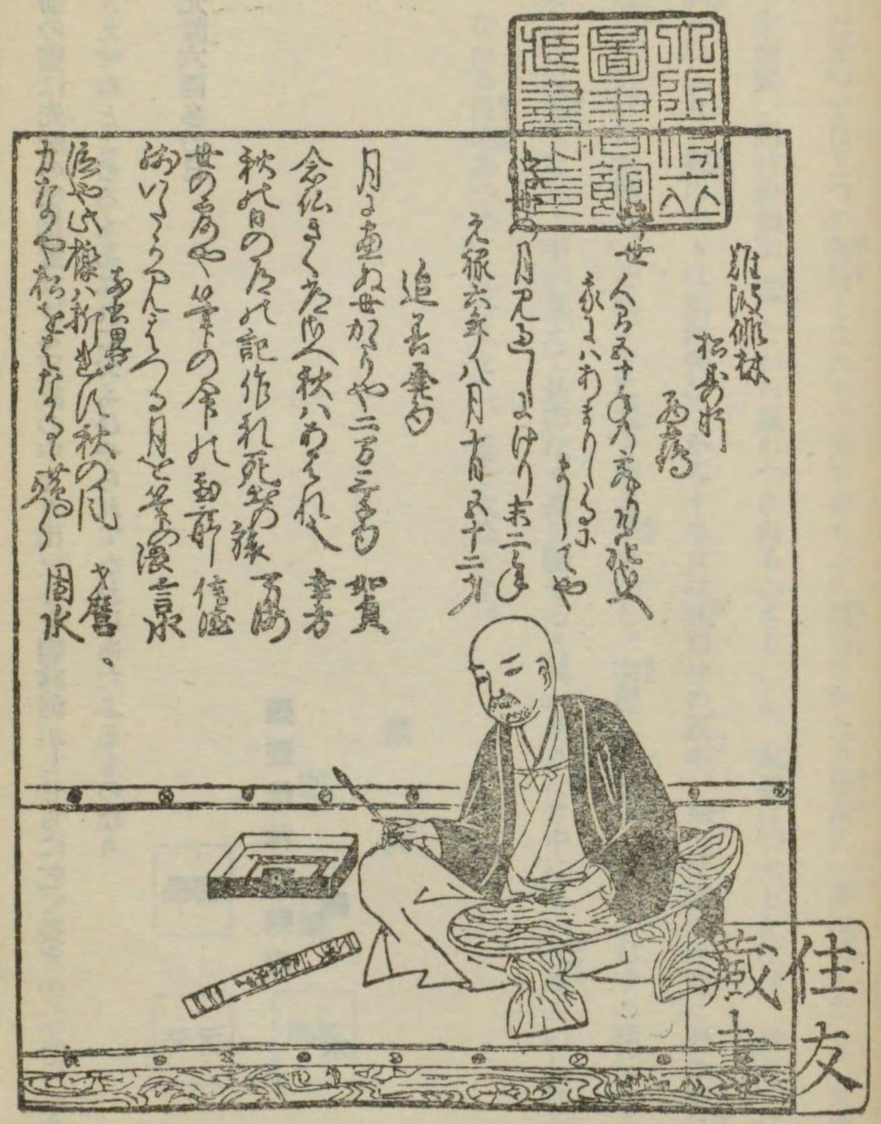
元祿貳年巳正月吉日

大坂高麗橋心齋橋筋南入町

鴈金屋庄左衞門板

清入

西霧女記人奇


住友
藏書

此全部五册の書は先師の書捨置れける反故の中より出たるを書林何がしせちに乞て長きかたみにもやといへるに跡はきえせぬとよめるもあはれにおもひやられてかれにあたふるものなり

元祿六酉冬の日

難波俳林西鶴庵　壽松　平元

團水

世界の僞かたまつてひとつの美遊となれり。是をおもふに眞言をかたり揚屋に一日は暮がたし。女郎はない事をいへるを商賣、男は金銀を費ながら氣のつきぬるかざりごと、太鼓はつくりたはけ、やりてはこはい臭、禿は眠らぬふり、宿のかゝは無理笑ひ、かみする女は間ぬけの返事、祖母は腰ぬけ役に酒の横目、亭主は客の内證を見立けるが第一、それ〳〵に世を渡る業をかし。去程に女郎買、さんごじゆの緒じめさげながら此里やめたるは獨もなし。手が見えて是非なく身を隱せる人其かぎりなき中にも、凡萬人のしれる色道のうはもり、なれる行末あつめて此外になし、是を大全とす。

難波

西鶴　壽松

西鶴置土産　卷一　大全目錄

大釜のぬき殘し
古金屋が寢覺

つらき物傘なしの雨
情はふぢ崎が待夜
水は袖にかゝる迷惑
たがひに裸物語
夢は明方の風呂敷

四十九日の堪忍
是からは皆我物

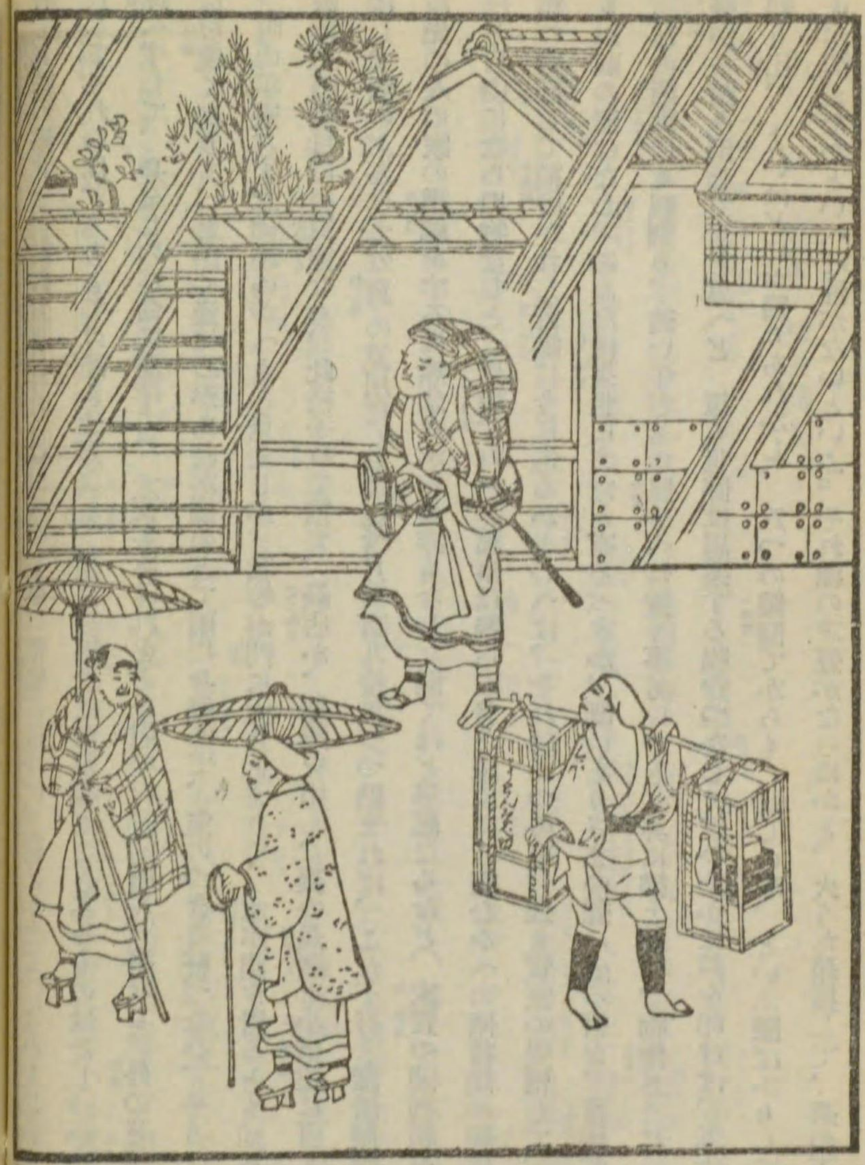
世には借錢をゆづる親も
もてあましたる一人
野秋があだまくら
たいこもち律義
みやこの島原へ流人

ひそかに詠め候人
腰ばりも銀になる
金太夫がしかけ
いづれこゝろの外
とかく知れぬは命

偽もいひ過して
契の家餅

一　大釜の拔き殘し

世は外聞包む風呂敷に替帷子、夏は殊更供の者連れずして自由成がたし。昔は定まつて柳行李に物を入れ、皺の調の古きにてからげ是を持たせけるに、それは葬禮の時か、公事人の供なり。近年の大臣は小島染の兩面、又はべんがらの大縞の風呂敷に暑き時分も暮方の用意して、單物給羽織を入れさせ、利根なる小者連れたるは、古金買に見せても三百貫目より内の身躰にはあらず。爰に難波津の横堀川の邊に婬酒二つに身をわけもなう、胸は煙め毎日鹽屋のふじ崎といふ美君に焦れ、銀でなる分里の女ながら、後は勤め外になし、此男より誰にかはと、黒髪の半ばきりて、世間にこれを隱さず、いとしさに此姿と、名に立つ年は十九の花の咲く比、此里の色も香もひとりして知つた顔、少しは悪い程なれども、いかにしても他の女郎のなるまじき事は、世にある客を見捨て、揚屋のかどを闕にさへびく〳〵して、春の夜のひとつ著物袖の嵐を厭ふに、因果はふる雨かなしく、宿の軒下も人の灯挑ゐるさく、此のまへ取出の時分、家買うて取らせたる太鞁が方へはしり込み、聞きしる聲かすかに傘一本かせといへば、女房が下女にいひ付けて、編笠ならばござるといふ。さても足もとを見立てたる返事する、木履かせといふならば、日和の好い時お出なされと申すべし。さりとては物しらずめ、米の百目する時娘を八坂へ遣る談合、廿五日樣の名號まで質に置き、後世を取りはづす時も、金子十兩の合力、前後遣つたる物を勘定すれば、家の時より此かた三貫七百目、小判四十七兩、米十八石、著物羽織廿一、其外ちよこ〳〵心付けせし事、留帳にはつけず覺えがたし。これを忘れて今度傘一本貸してくれぬは、さりとては酷き仕方なり。是れを思ふに女郎程まことあるものはなし。いひかはせし事を違へずして、身をしのび命にかけて、一夜もあはれをとひ慰めぬ〔〇原ん〕事なし。外のさはりと成る事更に可愛くなりて、とかく逢はぬがあれが爲めとて雨に身細めて、氣のつきる軒づたひ、やう〳〵宿に歸れば、町の年寄ども念佛講のかへりと見えしが、我等が門に立ちとまりて、主が聞き居るとも知らず、いづれ此家貳拾四貫目には買德なり、此格子取て捨て、錢店か、蠟燭を出し、裏の長藏を小借屋に直し、かど引きまはして表のぶんは七分莚の算用にして、壹ヶ月に百九拾目づつ納まれば、これぞ好き隱居屋敷と、賣りもせぬ先に人の家の指圖をするは無念ながら是非もなし。聞くほど堪忍ならなど、家質の連判頼みおけば、世上ほど自由にならぬ物なしと、男泣すれど、萬事は歸らぬ昔と思ふに、筋むかへの兩替屋の親仁のいへるは、親の庭好して植置かれし蘇鐵は今にあるかといへば、それはいつの事、迚も賣家の覺悟して、岩組まで一つも以前の形はなし、あんな仕果世にまたと有るべきか、既にありさまの聟に成る筈を、首尾せいでお仕合せ、私の西隣にも親縣り、若い子どもの風うへに置く事もいやと、鼻に皺よせて、物憎さうにいへり。おのれ後から踏み倒してもと思へど、扨も世間は思案する程むつかしく、ひそかに戸を叩けば、五十あまりの下女罷り出、よいほどにお歸りあれかし、八つの鐘聞てからもしばしの事、といふ聲ばかりして闇がりなり。火が消えたかといへば油がないといふ。それ程の才覺がならぬかと、火うち箱捜して、茶の下へ燒き付



け、そのひかりのうちに二階へあがり、古き長持をこぼちて、終夜これを燒火して、ひとり文など讀みながら、寄の袖をあぶるうちに、門を遠慮もなくたゝけば、寢た良も成がたく、誰といへば、色友達四五人、むりやりに走り入り、寒き夜の庭火、亭主が物好、どうもいへぬと、是等も傘なしの濡身を干して、何も馳走はいらぬぞ、酒は一つ飲ませといふ。つね〳〵贅を申して何時なりとも御出遊ばせ、内にさし合はなし、のぞみ次第の食悦さすべしと、其言葉も是非に酒を呑する所と、德利手樽をさがせども、いかな〳〵一滴もなかりし。小半買ふべき錢もなく、此才覺晝さへならぬに、夜の事なれば、ましてや分別出ざりしが、大庭に十七ならべて只ひとつ賣り殘せし大釜引き拔き、幸ひ横町に古金屋のあるこそ仕合せなれ、たゝき起して錢の俄に入る子細を語り、つぶしの値にして四匁にまけてやれば、錢渡しさまに夜中に釜は何とも合點はゆかねども、よもや是ばかりを盜んではござるまいといふ。神ぞ口惜しけれども、斷り申して錢を請取り、やうやう外聞を酒に包みて、此醉の餘りに明日はこよひの憂晴しに道頓堀に出、中の太夫本にして是の亭主振舞といふ。かたじけなしと約束かためて別れ、その明の日いよ〳〵御出の使、追付お後よりと、物のいらぬ事なれば男つくりすまして、夜前著物皺のばして、櫟染の平帶、長柄のひとつざし、かどたふさぬ大鶴屋が扇、見た所は今も大臣なり。けふ一日のやとひ草履取に、奥嶋の風呂敷かたげさせしが、このうちへ其名染込のうれん疊み入れ、人目には替著物と見るらんと我が心のはづかしく、眞齋橋筋に歩を南へ急げば、芝居のはての人立に、小間物屋の男が打水にゆきかゝり、腰から下へひとしぼりに成て、著替なき身の悲しく、心腹立てて眼色變れば、主はしり出、段々御尤千萬に存じたてまつる、此男め大和より二三日あとに爰許へまゐり、つちけの離れぬものなれば是非に御勘忍と、亭主結構なる一言に、ねだるべき力なく、侍衆にかけぬやうにしやれと、言ひ捨てて通れば、是へ御腰をかけられ、御著物召し替へらるべし、さあ〳〵座敷へといふ程氣の毒、くるしからぬとて濡れながら三津寺八幡のまへに行き、このあたりに旅役者の笛ふきに伊勢の吉太郎といふもの、折節は子どもの一座によびて、二三度も物取らせたる事有り。是より外の茶屋役者皆々分あしく立ち寄る事は思ひもよらず、裏借屋住の吉太郎にたづね寄れば、丸裸にて立ち出で、お久しや旦那、斯る埴生の小屋へ御立寄、かたじけ有りといふ物ぢやと、俄に煙草盆の塵は拂へど、裸で飛び廻るを見て、これは氣根強しといへば、只今大酒致しましたとはいへど、上氣をして、旦那もこの御小袖の濡はと不思議を立る。はじめを語りて、是を日當へ干せといふ。大臣も丸裸になつて、いづれ今日はあたゝかな日ぢやと、椽がは〔○に脫カ〕立ちならび齒をくひしめて語り、我等は今日に限つて著替もたせて參らなんだ、其方がいつぞやの郡内縞の著物すこしの程借せといへば、我がはだか何を隱しましよ、只ひとつの郡内、裏ばかり洗はせまして、隣へ紺に參りしうち、此仕合せと語る。大臣横手を打つて、扨も事の缺けたる内證かな、近日著物羽織拂者はずむでござる、今日は宿に首尾惡しければ取りにもやられずと、ふたり裸で待つうちの身振さま〴〵可笑しく、やうやう西日になつて、干したる著物、ひあがりて大臣これを召せば、吉太郎仕立著物も出來て、二人ともに常の姿となつて踊り出で、待ち兼ぬる振舞の方に行けば、膳はしまうて酒の

面白き所へ立ち出、いやといはれぬ人に留られて、いづれもの手前迷惑千萬といふ。今まで御陪入、御飯はまゐつたかといはれて、いかにも喫べましたといへば、其通りに濟みて、空腹の亂酒、肴の中にも生貝など食ひ盡して、夜食までの待遠く、吸物の出るたび、もし饂飩かと見れば、切かけ烏賊のしかもかすかに、是等に腹もふくれず、笛吹の吉太郎は氣をつくして立つて歸る。一座は衆道の色に前後忘るゝ醉心。我を覺えず、これは寒いといへば、御著物の入りたる風呂敷取てまゐつて、大勢の中にてこれをあくれば、紺染の暖簾に丸の内に仁の字付きたるを取り出せば、此座敷興覺めて、おの〳〵見ぬ顔するもなほをかし。隨分氣強き物ながら、酒醒めて、浮世の人を恥ぢて、是より無用の色道と思ひ切て、家財しまひて其身ひとりの草庵、昔の友にあふ事絶えて、髭おのづからに伸ばし、手足終に洗はず、渡世に江戸鬢の貨びねりして、一日暮しに、難波の堀詰に身を隱し、大寺の櫻は近きに五とせあまり春を夢となし、蝶の定紋も付けず、木綿を淺黄にやつて、世は輕く暮して埒をあけぬ。

二　四十九日の堪忍

長者に二代なし、女郎買に三代なしと、京の利發者が名言なり。洛中廣きに、歌仙分限とさゝれて、三十六人の中にも、ひだり座の第一、二文字屋の何某とて、親より家藏諸道具の外に十〔〇千カ〕五百貫目書置せし時、連判のおの〳〵是をあらためて、跡取に相渡し候事實正明白なり。是を請取り四十九日の朝は旦那坊主よびて、夕食に精進あげて、箸を下に置くと宿をかけ出、島原に行きて、丸屋の亭主合點か、おやぢが所務分、見たか〳〵と、小判を逆手にもつてまきちらし、この家内繁昌と喜ばせける。これより心にまかせ、太夫の石州を揚詰にして、いかな〳〵脇の男には、ひぢりめんの戸帳をがませず、この女郎を祕佛の太夫と名高く、その比の太皷、しやくしの德入といふ針立、此祕佛樣を預り、晝夜まもりて、後生大事に目付する。これ繼に心ざしなく、情に望なし、只妻子のため何も身過と療治を捨てて、一年壹貫貳百目の御合力に定め、我宿有りながら、年越の夜も内に寢ず、目に正月させて、こぎみのよき首尾聞きながら、妻なし千鳥ととびあるく。引舟女郎の帶とき、髮のそこぬるもかまはず、木枕が見えずは、よき物有りと、空重箱を横にして、誰に遠慮もなく足手をのばし、後のすけを呑むまい物と、現のやうにいゝ寢入に、此おもかげ燈火に移り、あらはに見えけるに、末の女郎ながら、白無垢の肌著に首筋麗はしく、少し中びくにこそあれ、瀕皮にしてちひさき口もと、此中で見ればなり、大津などの天職よりは見よし。毎夜十八匁が物を、國土の費と無常を觀ずる所へ、頓て出前の禿、我身を人の物にして、しどけなく腰まで裾のまくるゝもかまはず、酒にいたみて、あした雨がふつて四つ時まで寢たいぞと、おぼえず言ふもをかしき。こいつもわけを知らぬさまにも見えず、只置くもむねんと、又次の間を見れば太皷女郎ふたりまで、九匁が所ひき草臥て、三味線の筒を枕に足もたしあうて、懺悔話を立聞するに、刈藻といふ女郎、しかも好さうなるに、それにこしらへて置く身も、自颱我まゝもならぬ事は、氏神稻荷さまを誓文に入れて、去年の九月の十四日に、肥後の衆と

床へいつたまゝといふ。我等は年明けて二三度も分の立つ客にあうたと語る。扨もふびんや、此女郎どもを買捨にして置くは、喰はぬ殺生、罪にも成るべし。傾城の男めづらしがる事、よもや世間にしるまじ。又臺所を見わたせば、柳眞那板取りまはして、色めきたる下女ども、男まじりにうちふしけれど、誰かこれらに日をやる人もなかり。是をおもふに吉野の麓に花の盛をみずに暮し、山崎の人郭公に耳ふさぐに同じ。爰もその如く女房見あきて、なんとも思はぬと見えたり。こんな所へ來て、たゞ居るはうかとした事ながら、つねづね律義におぼしめして、大事の御番をお賴みなされしに、微塵もじだらくする事にあらずと、片隅に取りのき、小分別有りげに眉をひそめ、まる寢して隨分塞いめを堪忍して、夜あけを待兼ぬる時、大臣起きあはせ給ひ、德人が寢姿を見給ひ、いつもその如くひとり寢するか、幸ひの手あきがあるに、さりとは無用の斟酌、さても殘らぬたはけ者、爰で戀をせぬは風呂へ入て垢をおとさぬに同じ、ひえ物御免、どのふところへ成とも入れと、お言葉かゝりて後、分際相應の遊興。是皆お蔭〳〵、太被持ほど有難き世渡又もあらじと覺えける　此大臣一代の奢、行年七十四まで、腰の骨のつゞく程は色ざわぎ、其子なほまた中比の野秋には つと出て　見事なさはいしすごし、是も智慧すぎてやむるにはあらず、自然とおもしろさやみて、七十九の夏ごろより此道をとまりける。二代ともに名を流し、三代目は二清といはれて、かをる大臣なるが、程なくかよひ灯挑の立消して、次第わろくやめにける。二代目に分散に極りたる身體なりしが、鼻のゆづり銀、貳百貫目のひゞき天秤にかけ出し、今まではつゞきぬ。二清身に當ては、三十四五貫目つかひしに、わるい所を請取り、あたら身躰此男が皆になしたるやうに沙汰せられ、聟にも養子にも談合の相手なく、なんにも殘らぬ身ひとつ、けふを暮しかねて、やう〳〵長者町によろしき妓の許へにじり込むを、ゆかりなれば見捨てがたく、四五人ゆる〳〵と世をわたる。金銀取らせば是も又半年立たぬうちに、かの里へはこびける。莵角俗をはなれさせよと、わうじやうづくめに坊主になせども、なほ此道をやめず。此うへは養ひころせと、座敷籠に押入れ置くに、是も忍び出、氣色を見るばかりにかよへば、いかなる事もや仕出しけんと、賢き人に相談するに、自らやめさする遠島あり、こなたへ任したまへと、島原の揚屋町の横手に、ちひさき借屋を借りて二清に渡し、家賃の外に、壹ヶ月の合力銀三十目、何なりとも勝手次第に狂ひたまへといひ捨てける。爰にて名譽惡心かはりて、人にあふも迷惑して、後にはやり咄のうけ賣して、女郎さまより物もらひて口惜からず暮しぬ。

三　僞もいひすごして

萬事洒落て、女郎狂ひの今程面白き事はなし。香車の桑が十四五手づつ先をみすかし、此大臣は九月の節句過より大年までは永いうちに、さのみ物費のない時を考へ、よい事をして取り、正月買さしづめになり、にげ道に伊勢へ年ごもりに親仁の代まゐりすると、師走廿日比にいひ出して、太夫さまからはなむけに、貳百目程入る肌小袖を取つて、置土產に小判進ぜて、四十末社の者どもには、すこし子細有てやめ分なり、內

證聞いてから鳩の目一文のたよりにならぬ事、うちやつて置けと、何事ぞありさうに思はせ、如在なき女郎に、帥仲間から讃をつけさすは知れた事、そんな前かたなる仕かけ、四も五もくはぬ事、十月の始ゐのこに、こなたからいやといはせぬ男、きのふと暮してつひ多のはじめの朔日になりぬ。大勢のつきあひ見濟まし、京屋のあるじに、やりての衆が、何か大臣さまへ、おそれながら御訴訟事と申せば、その時殿樣は、置頭巾して書院毛抜を持ち、一歩欲き訴訟かといふ。いかにもそれに似ました御事なり、家のお餅の米と申すも、さもしき事ながらと申せば、いや〳〵世間にする事はしたがよい、して何程入るぞ。此時いうて取らいではと、正月の餅米まで算用して、六石五升と申せば、女郎屋には大分家を祝ふぢやなと、不思議がましき貞つきして、紙入をなげ出す。小判の次手に十夜の盛物代、霜月はをさめの庚申待、わたくし小宿の水風呂の釜を仕替の御合力、何や彼や取集めて春までの勘めども、殘らず御無心申し、その上に正月の事いまだ聞のある讃なれども、外に申す方なければとさゝやけば、此男遣げる分別かはつて、いかにも拙者請合と、慥に宿へ申しわたせば、亭主これは珍重、さても見事なあそばされやう、恐らく十月朔日に正月のきはまりし女郎、新町廣しと申せども、此太夫さまの外にあらばいうてござれ、此首水もたまらずやるは、こんな大臣の御宿には今時分から仕事物がしまうて有る物ぢやと、むしやうにのぼされ、前後かまはず、一座は柳にやつて立ちけるが、風のなびきにかはるは大臣の心、てつきりと太夫さまへ難義をもつてござる所なり、時にこなたから先にいひ出し給へと、その段々敎へ置きしに、案の如く大臣無理を持つて來さうなる貞つきの

時、しみ〴〵深う仕かけて、けふ御出を待兼ねました、すこし御内談いたしたき事は、此程兩度扇屋で逢ひまする田舍の大臣が、此方いやな程のぼりつめ、指を切りたらば、根引にして國へつれて歸ると無分別に進めば、いづれも爰は切り所ぢや、女郎の指は盆正月勤むる男にさへ切るもあり、いうても是は小指一つに千兩あまり入用出して、借錢まで濟まして一生の苦患のがるゝ事ぢや、殊には親方のため、是程の事又いつの世にか有るべし、是非に切れと、やりての糸が薄刄あてがへど、氣に入らぬ男に連れられて、然も知らぬ國へ行きて大勢供連れて、乘物に乘る事いやぢやといへば、さりとては其根性で、ようも〳〵太夫と呼ばれさんす、淺ましや、事によつて死ぬるもあるに、こなたには何事があつても、勤の指は切らせぬ程に、身に疵付けずに女郎がなる物か、手柄に淋しう無いやう遊ばせ、太夫から二疊敷の住居、今まで幾人か見た事、唐紙の模樣は立田川が目に立つ物ぢや、仁介さまに煙草吸付けて、ちと上へござりませいと、直に言やる貞を見るやうなと、扨も酷い事を遣手の糸がいひまする、私も新屋の金太夫といはれしもの、好いた男ならば、命が何のをしかろと、もたれかゝつて泣出だせば、大臣聞屆けて、是はあちらこちらの詮議なりける、けふは口舌を仕かけ、是非指を切らす心底にて來りしに、おもひ寄らぬ事を聞くは、何の日ぢやぞ、我をたよりに語り掛るこそ因果なれ、此は見捨て難しと、まんまと一杯くうて、數ならねど拘者が居るぞ、氣惡い客をまき散らせと、頭から大きに出て、我ひとりして萬事を勤めけるは、是大分のおはまりなり。此男も北濱に源といはれて、諸分ちうろくてんにくゝり、あまり先繰を仕掛しに、又女郎はそれを所作にする帥ごかしにあはされ、扨もわろき身躰取集めて貳百貫、やりての糸がおひ立てける。若い女郎に付けたき者はふるき遣手なり。町家の若代に家久しき手代あると同じ。此大臣にも良き手代あらば、是程までには成るまじきを、出入の者も皆惡所にして雞飯をふるまはれて、羽織借取にして歸るも有り、家請を頼みながら、疊の無心を申すも有り、喧嘩する祕傳書を預けて金子十兩無理借にするやら、寄る所さはる所にて取りひしがれ、財寶ざらりと皆明けて、昔の風俗四五年に變りて、今は小谷といへる比丘尼寺の邊に裏屋住ひして、いかな〳〵硯箱が一つあらばこそ。ちんからりにかけ釜掛けて、汁なしの飯を炊き、有る時は餅に日を暮し、無い時は帶締めて、三月大根も腹ふくるゝたよりと、おのづから常精進の身となれり。此北鄰には觀音さまを負うて、勸進坊主住みしが、烏賊つくりて、わけぎ膾の薫、不斷鹽魚きらすといふ事なし。南鄰は三途川のお姥さまの勸進に歩行く男、ふる布子あまた拵へ置き、一夜を六文づつにて、貧家の嵐をしのぐ爲に貸して朝は片端から剝ぎて廻りて、目前に彼の世を見せける。かゝる所にも住み馴れて其氣になれるは、惣じて人間のならひぞかし。今は人置中間の使して、妾奉公人の著替を持つて供するも口惜しからず、錢さへ取ればおろしたる胞までも捨てに行く。人の果こそ淺ましきものはなし。中々生きては何か効の無き事ながら、其身に成ては死なれぬものと見えたり。されども昔殘りてさもしき心にて紙一枚、ちよろまかすといふ事なし。或夕暮にさかりを惜む藤見がへりに、今橋の現銀といふ大臣、わづかの春雨に逢ひて、軒傳ひして行くに、彼の男破傘さして、我を見懸け、此傘を御用に立つといふ志優しく、そのまゝ借りて見れば、越

後町京屋五十本之内と書付をかしく、其男の歸る入口を覗けば、東窓の反古張皆々奉書の假名文、心をとめて見るに、疑もなく新屋の金太夫が書翰。さま〳〵もたれたる文柄　お定りの奥の手、我等命はしばし貴樣より借物と書く事、誰にても嬉しがる行方なり。何とやら可笑しく、押賦けて尋入り、内の樣子を腰張も皆太夫が筆なれば、如何なる由緣ぞと昔を聞けば、何の用捨もなく、金太夫ゆゑに此仕合に成りけると語りぬ。金太夫に我等わけあつて逢ひけるに、此君が文ども斯くさらし置くは由なしと、文反古殘らず所望して、金子三兩取らせて立歸りける。此大臣も此男の如くに追付なるべき志なり。金太夫の文やら鬼の手形やら知らぬ裏貸屋なるにと笑ひぬ。

あたご瓢の　堺の島長花紅葉の遊
袖さむし　かべのくづれより小判珍し
百に成ても女郎はこしつき
晝食なしの道中
小家も八朔の鱠
人には棒振虫　金魚が狂言もふるし
同前に思はれ　江戸櫻のかへり咲
男子がひとつきるもの
朝貝の實を取る姿有
御前の戸も茶の木となり

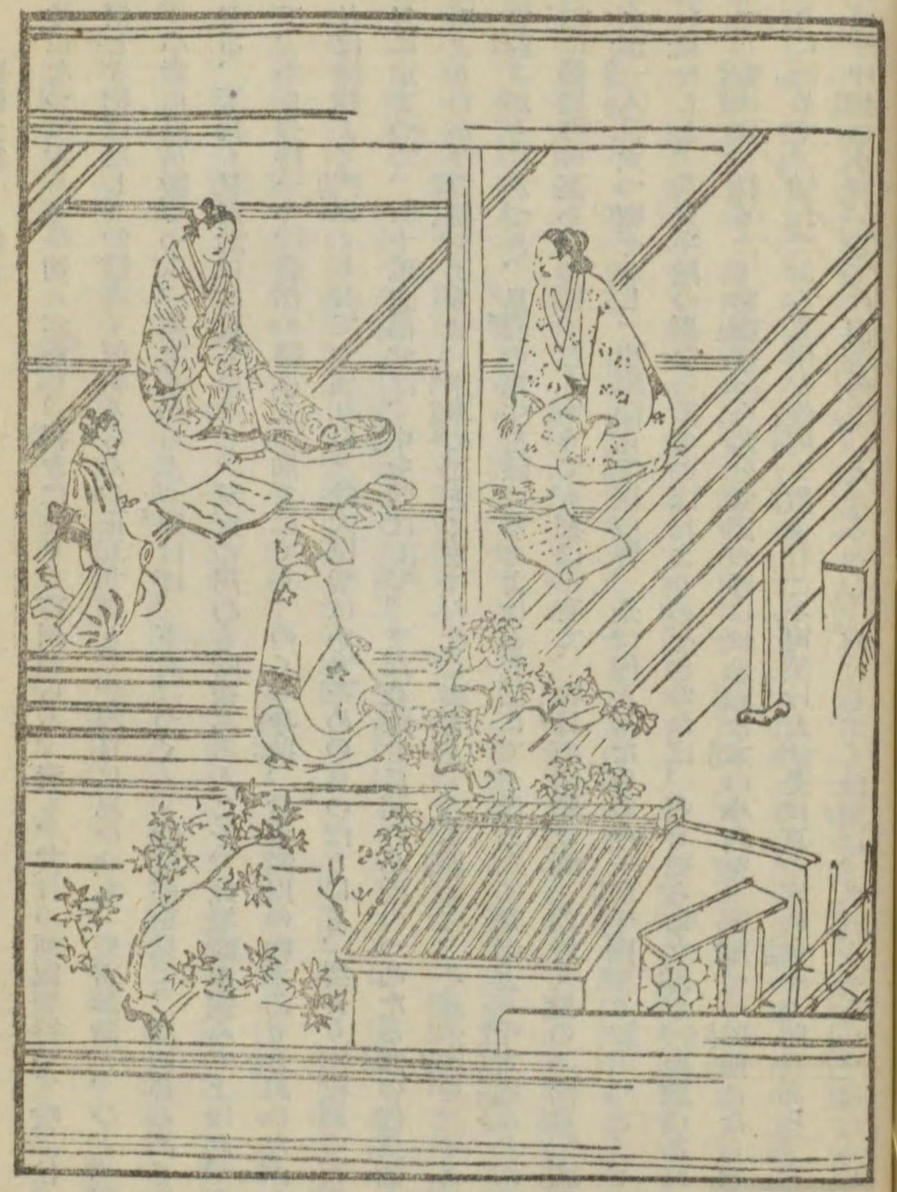
うきは餅屋

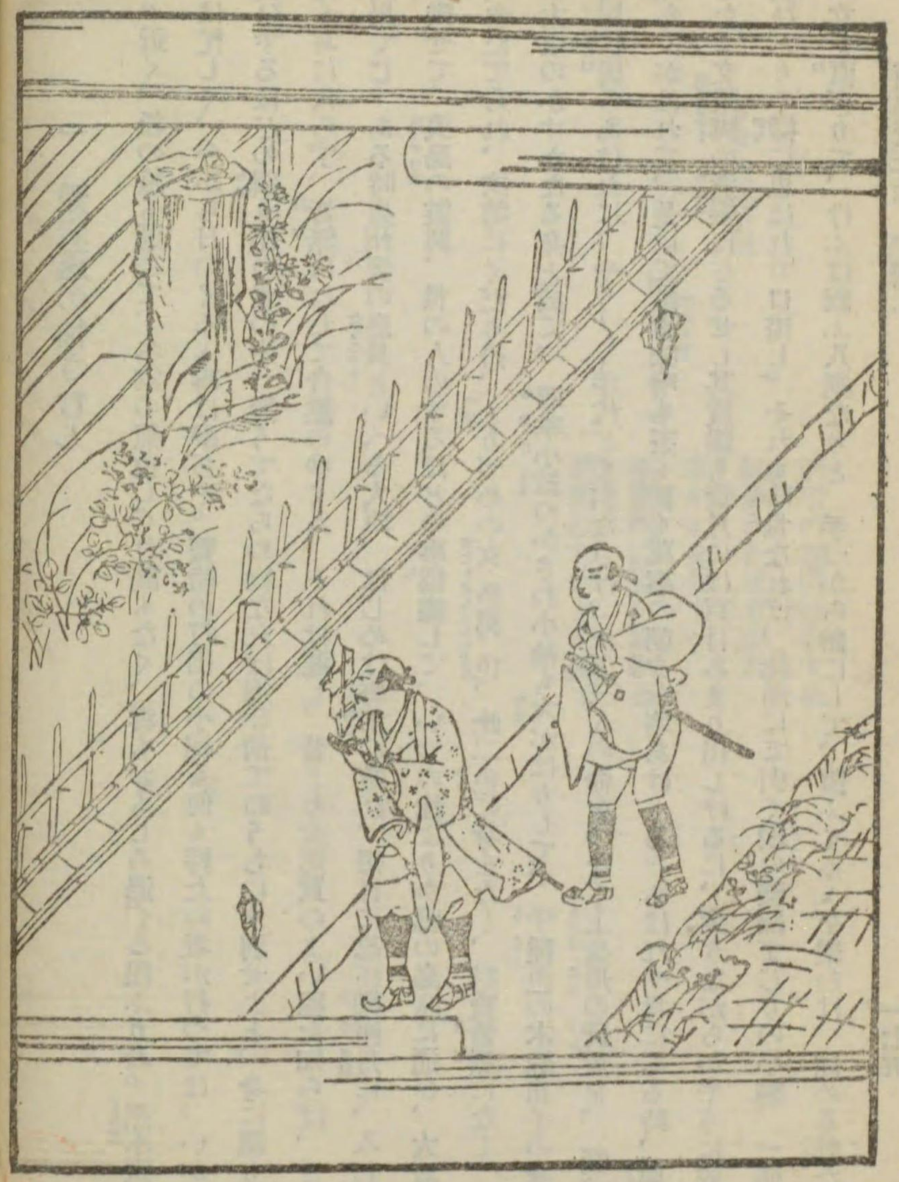
つらきは碓ふみ

新町の夜店知らずめ
綿秋のたまりかね
木半が身のうへ
座敷踊に戀がまはる
紋所はむかしを殘す

一　愛宕嵐の袖さむし

京は山々近く、松の風も通ひて、冬空の氣色しぐれ間もなく、雪もおもしろ過ぐる程ふりぬ。黒木賣る聲も常よりは忙しく、今から日のくるゝ事は夢ぢや。寶船の打出の小槌も何も持たぬ者が打つては、いかな〳〵茶屋狂ひするほどの銀も出ぬ世の中。無うてならぬ物なれば遣ひ捨てぬうちに分別せよと、身に懲りたる人の異見も耳に入らず、皆無になして合點のゆく人、それは遲し。昔より女郎買のよい程を知らば、この躰までは成果てじ。ある時泉州堺の島長といへる大臣、はじめは野郎に遊び、毎日に忍び御座舟に、みねのこざらしを乘せて、夷島の遊興、世の人のするほどの事爲盡して、いつの比よりか都の島原に通ひ、大坂屋の野風に吹きたてられ、次第にくだり舟、上りづめの女色男色、此二色に身をなし、財寶皆無になし、さすが名高き大臣のかすかなる身と成て、四季小紋のかさね小袖も大がはりして、千種色の木綿布子の身狹にして、借屋住居のあはれに、やう〳〵手代どもがなさけ、上下三人の命をつなぐ上荷舟の貸賃を、壹ヶ月四十五匁宛あてがはれて、是にて酢も味噌も茶も新も萬事の朝夕を埒あけゝる。あはれや世にある時、惡所へつかはしたる文飛脚の通帳にしるせし其賃銀も壹月には百目あまり出しけるに、生きながらかやうに成果つるは、我ひとりの樣に思はれて口惜し。それも時世なれば、此浦にて引く網の磯藻まじりの小鰯、一籠わづか五文六文を直ぎりて、けふは祝ふ八朔なりと、手づから鱠にして、腹ふくるゝを樂むは、住める効なく思へ





ど、其身になつて舌もくひ切りがたし。科きはまりて首刎ねらるゝ者も、其日の朝飯箸持つて喰ふは、人の命ほど惜しき物はなし。此隱者も何祈るらん、正五九月とて廿四日に思ひ立ち、愛宕參詣と、ひとへ二日の旅用意。小者に風呂敷づつみ、其身もわらんづ穿けば、下女はつく〳〵此風俗を見て、あの鼻の高さにて何の願か有る、天狗も旦那殿には恥ぢぬべし。又火の用心も財寶ある人こそ、此地藏を頼みてよけれ、留主預かるとて、から長持一つ、自然の時は女の働きにても、のくる身躰、貧者無用の物まゐりと思ひながらも、主命なれば機嫌よく門おくりして立別れぬ。此大臣昔はかりそめの京のぼりにも、堺より六枚肩の夜駕籠、壹人七匁に定まつて、四十貳匁出せば、中を飛ばして、まだ夜深きに淀の小橋のつめなる僞の仁兵衞が所まで、島原よりむかひ灯挑を出させ、水車のごとくまはらせし事もと、うち詠めて、それが門をばすこし足ばやに編笠前さがりにかづき、鳥羽の馬牛を除けるもよほど世話にて、ほどなく東寺より千本通にわかれ、曲輪の塀越に揚屋町の裏を行くに、どういうても都ほど有て、物日の出懸け姿、柏屋丸屋の二階に、衣裝はとかく赤きが一入目立つ物ぞかし。小唄聞えて撥の音、是は何ともならぬ今一度千兩ぎりにしつこうせず、爰の氣色を見たしと、八文字屋の裏なる壁のこぼれよりのぞきぬれば、名も知らぬ女郎が、座敷はなれて涼み所に拵へし置床に、枕もなく寢轉び、今時分女郎の手には珍しき本の小判を、五兩づつ四所にならべ置き、嬉しさうに詠めて、知れてある算用を幾度も數よむこそ可笑けれ。是は京の客の金やり時にあらず、九月廿日過に時づけ屈の小判、さては田舍の素い人なるべし。何にしても此里は、あれをやらいではならぬ所と思ふうちに、宿の噂がひねり文に五兩ばかり持添へ、わたくしの方へも半九樣より、御書翰に預りました、御返事に宜しく、御禮申してやらしやりませい、やりてのまかせに金にかまはぬは昔の事、今の廿兩は上代の貳千兩にもかけあひます、殊に北國衆は文を國のひけらかし物に、人丸、貫之の筆より、おの〳〵樣の書捨を大事にかけ、紙の損ずるをうたてく、裏うちして卷物にしたまふとかや、又地の衆の文は皆までも讀み給はず、小宿にかいやり捨て給ひ、挽碓の敷紙になりて、太夫さまの御名を、小麥の粉に汚すもよしなし、それと又今の京の大臣位ばかり取つて、勝手になりませぬ、とても勤めの御身なれば、殿ぶりの御物好やめにして、たとへ物言ひ惡しく、一座初心にござりませうとも、こんな御狀まゐる方が大臣なり、惣じて帥が女郎さま方の役に立たぬもの、隨分しやれたる男自慢の人、京大坂堺にも數多あれど、無分別につかひ捨て、揚屋の手前も味惡く、まはつて通るは其心からの白痴者、女郎狂ひばかりに片づけば、末長う遊ばれしを、又野郎に戀をまたげ、あたら身躰を潰し、若盛にあてがひ世帶、うご〳〵と生きて居て、何か面白い事あると、我を見付けて、斯く當言をいふやうに、是天性なりと、身震ひして立ちのき、彼の內儀がいふ所、一つも違ひなし、橋本の渡越えて松の尾に掛り、實の道筋を愛宕へまゐれば、かゝる憂事も聞かざりし物を、此里餘所ながらも見たくて、いはれざる京にまはり、身に應へたる人の言葉を合點して、都も面白からず、嵯峨に行けばはや夕暮になつて、人とむる女の袖にたよれば、一夜は爰に定めしに、筆屋といひて、廣座敷なり。折ふしの燒松茸に酒さま〴〵饗應しける。女もふつゝかに見えず、機嫌取りて立ちふるまひも、どこや

らお町めきたる所あり。然も其女は年まへなるが、廊下走りやう、只者とはおもはれず。くどき寄りて昔を語れば、申さぬ事か島原の座持女郎、土佐といへる流なり。いづれ移り香常ならず、物まゐりの精進をうち破りて、木綿寢道具にわびながら、太夫に逢ふ心地して、又下向にもたはぶれ、御初穗の殘りをありぎりに取らせ、山崎よりの舟賃なくてひろひ草靴の歩行路、中食無しに歸りぬ。是ほど戀りて此身になつても、やまぬものは好色と逢ふ人ごとに語りし。

二　人には棒振虫同前に思はれ

上野の櫻返咲して折ふしの淋しきに、是は春の心して、見に行く人袖の寒風をいとはず、何ぞといへば、人の山靜なるお江戸の時めきける。黒門より池の端を歩むに、しんちう屋の市右衛門とて隱れもなき金魚、銀魚を賣るものあり。庭には生舟七八十もならべて、溜水清く、浮藻をくれなゐ潛りて、三つ尾働き、詠なり。中にも尺にあまりて鱗の照りたるを金子五兩、七兩に買求めて行くを見て、又遠國にない事なり。是なん大名の若子さまの御慰に成るぞかし。何事も見た事なくては、噺にも成りがたし。莵角人の心も、武藏野なれば、廣しと沙汰する所へ、田夫なる男の、小き手玉の掬網に小桶を持添へ、此宿に來りぬ。何ぞと見れば棒振蟲、是金魚のゑばみなるが、一日仕事に取集めて、やう〳〵錢二十五文に賣りて、又明日持つて參るべしと、下男どもに輕薄云ひて歸る。又是を見れば、爰も悲しく世をおくれる人有りと、物哀れげに其者を見れば、是は〳〵伊勢町の月夜の利左衛門といへる大臣、我家を立退き、何國に暮せしとも知らざりしに、さりとては見にくい姿にはなりぬ。何れも昔語りし友達中間に汝を慕ふ事大方ならず、知らぬ事とて、それよりの年月、かく淺ましく暮させし事は是非なし、此後は我々うけとり、貧樂に世を渡らすべしと言ひけるに、まだ此身になりても、過ぎにし贅やまずして、女郎買の行末かくなれる習なれば、さのみ恥しき事にもあらず、いかな〳〵おの〳〵の御合力は受けまじ、利左ほどの者なれども、其時にしたがひて、惡所の友の好誼に、けふを送るといはれんも口惜し、面々のこゝろざしは千盃なり、久しぶりに逢ふ事、又重ねて出合ふ事も有るまじ、一盃の茶碗酒、しばしの樂みなるべしと先立つて出、茶屋に腰を掛けて、是きりと彼廿五文を投げ出しぬ。然も此錢は宿なる妻子の夕をいそぎ、鍋あらうて待ちけるに、すこしも怯けぬ心根、皆々涙に袖口をひたし、時雨も知れぬ空なれば、いざ其方の侘住居に行きて萬を語りながら、酒を呑むならば、ひとしほ慰みにも成りぬべし、今の内儀は定めて吉州かとよい中をいへば、此女郎ゆゑにこそ、かくはなりぬ、傾城も實のある時あらはれて、四年あとより男子をまふけ、父樣かゝ樣といふをたよりに、けふまでは暮しけると、夢の如く語るを、うつゝのやうに聞きて、谷中の入相比に、呉竹のざはつき、とまり雀の命も、あしたを知らぬ餌指町の東のはづれに著きぬ。此裏にかすかなるすまひ、三人ながらはひり給はば、なかなか腰の掛け所も有るまじ、それもよし〳〵何かつゝむべしと、案内して行くに、蘆垣に秋を過ぎたる朝貟の、末葉もかれ〴〵になりける蔓を搜し、七十餘の婆の、其實を一つ〳〵取て、又來年の詠を慕ひける。